今日のソ連邦

1978
14
7.15.



ウラル工業地帯ではいま…

古くて新しいハリ療法

生きがいのある老年とは?

今日のソ連邦

第14号　1978年7月15日号

本誌の材料はノーボスチ通信社の提供によるものです。

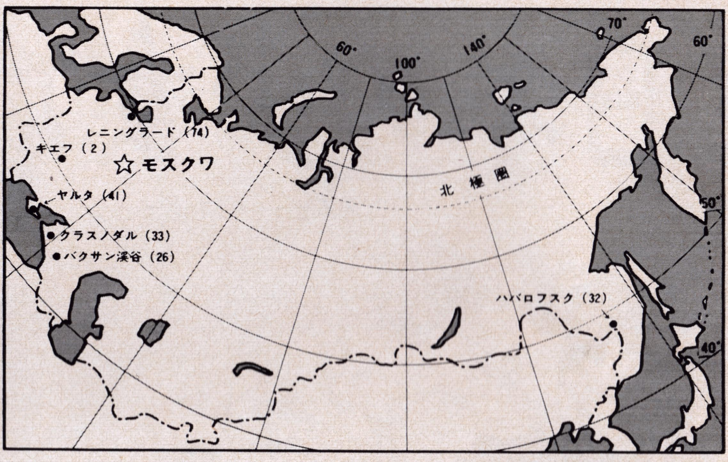
本誌を入手するには

下記送料を添えて広報部にお申込み下さい（誌代無料）。（送金には振替または切手を御利用下さい）

半年分送料……1200円
1年分送料……2100円

同時一括送りの部数が多くなれば、送料も割安になりますから、広報部にお問合わせ下さい。

★数字は関連記事のページ



ソビエト社会主義共和国連邦大使館
東京都港区麻布台2—1—1　電話（583）4224
（本誌についてのお問合せは広報部へ）

広報部　東京都品川区東五反田3—9—13
郵便番号141　電話（03）447—3536（代表）
振替口座東京9—122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）









キエフが迎えた日本の少女たち

ジノビー・コフトゥン

日本のバレエ愛好家たちには、ウクライナのシェフチェンコ記念キエフ国立アカデミー・オペラ・バレエ劇場は余りにも有名。この5年間に、キエフの舞踊家たちは3回も日本で公演した。今年の2月、東京で開催された第2回国際バレエ・コンクールでもこの劇場のリュドミラ・スモルガチョワとセルゲイ・ルーキンの二人が一位に入賞した。

この劇場の幹部クラスの舞踊家たちは、キエフ国立バレエ学校で学んだ人たちばかりだ。ここ数年来、日本のバレエの教師が、生徒を引率してこのバレエ学校を訪れ、その経験を学ぶのが、慣例のようになっている。

今年の3月から4月にかけて東京、京都、千葉の18人の少女が、京都の寺田バレエ・アート・スクールの芸術監督、高尾美智子さんに引率されてキエフ・バレエ学校にやってきた。

高尾美智子さんは、本誌記者に、次のようにその印象を語った。

「今度の日本のバレエ学校の生徒たちは、キエフにきた4番目のグループです。一九七五年にはじめて私たちがキエフを訪れて以来、一〇〇人以上の生徒たちがこの美しい都にやってきています。

日本のバレエ専門家たちは、キエフ舞踊学校の教育水準の高さを知っています。そして私たちは、ここに来るたびに、喜びを味わうばかりか、たくさんの有益なものを身につけます」



▶どうきれいでしょう――ウクライナの晴れ着姿の娘さんたちもにっこり。



キエフ銀座、クレシチャチク大通りで。



キエフの名所めぐりにも心がはずむ

この学校の芸術監督で、ソ連国家賞受賞者のガリーナ・キリロワは日本の少女たちを温かく迎え、両国の先生たちは一緒に授業と練習を行った。日本の少女バレリーナたちは、自分たちと同じ年ごろのバレリーナたちの練習風景を見学。しめくくりに両国の少女たちは合同コンサートを開き、いろんな舞踊作品をひろうした。

日本の若いバレリーナたちは、キエフの名所を訪ね、博物館を見学したり、オペラ・バレエ劇場の舞台を観賞した。ピオネール・学童宮殿では、いろいろなサークルの活動を見学。クラシックダンスのスタジオでは生徒たちが特別に、少女たちにコンサートをひろうした。

ガリーナ・メンジェレワ・キエフ市ソビエト執行委員会副議長〔副市長〕は日本の少女たちと会って「ソ連と日本の子どもたちが、大人と同じように、キエフ・京都の姉妹都市の友好と協力を強化することに貢献しているのはたいへんすばらしいことです」と語った。

「私たちは、ソ連の子どもたちが肉体的にも、芸術的にも発育するあらゆる可能性を持っていることをもう一度確信しました」と最後に高尾美智子さんは語った。



合同コンサートで、ウクライナ民族舞踊〝ゴパック〟をひろうするキエフ舞踊学校の生徒たち。



合同コンサートで踊る日本の少女。

ガリーナ・メンジェレワ・キエフ副市長のあいさつ。





贈り物の交換。



キエフ・オペラ・バレエ劇場のバレリーナたちに囲まれてうっとり。

イデオロギー問題

社会主義的協力の大きな成果

——ソ連党・政府代表団のチェコスロバキア訪問に寄せて

ワジム・ジョブブル
スビャトスラフ・モルチャノフ

5月31日から6月3日まで、L・I・ブレジネフ・ソ連共産党中央委員会書記長・ソ連最高会議幹部会議長を団長とするソ連党・政府代表団はチェコスロバキアを友好訪問した。L・I・ブレジネフとチェコスロバキア共産党、政府の指導者との会談は、共産主義社会を建設している両国の内外政策、国際情勢、経済的、社会的発展のすべての問題にかんして、ソ連、チェコスロバキア両国共産党の見解が一致していることをあらためて示した。

会談後プラハで調印された諸文書の中で強調された点は、ソ連でも、チェコスロバキアでも、マルクス・レーニン主義の思想、プロレタリア国際主義の諸原則は党建設、国家建設における先導的な力であったし、いまもそうであるということだ。

マルクス・レーニン主義思想はいまや社会思想における前衛的立場を占めている。これは社会主義諸国の共産党・労働者党の共同の理論活動に負うところが大きい。たとえば社会主義志向型の発展途上国の数が増えているのは偶然ではない。ある西側の政治家たちは他に説明のしようがないので、このような場合、モスクワまたはハバナの実在しない〝干渉〟なるものをとかく持ち出しがちである。しかし現実の社会主義建設の実践を通じて日一日と補強されているマルクス・レーニン主義の明確な科学的概念の魅力をどうして考えないのだろうか?

社会主義諸国の相互協力の効果は、これらの国の経済的成功を見れば十分納得がいく。たとえば、この10年間に経済相互援助会議（通称コメコン）加盟諸国の工業力は倍増した。ここでは各国の努力とならんで、多角的協力の発展も大きな役割を果たした。社会主義共同体諸国の地図には、ソ連に建設中のキエンバエフ選鉱コンビナートや、ブレイラ（ルーマニア）でルーマニア、ドイツ民主共和国、ポーランド、チェコスロバキア4ヵ国が建設中の紙パルプ・コンビナートのような共同の建設場がどんどん出現している。この社会主義経済統合の分野では、加盟諸国の国民経済の急伸長を約束する新形態がたえず生まれている。

こんどの訪問中にソ連とチェコスロバキアは、生産の専門化と協業化を深める新段階を共同で決定した。これらの段階は国際分業がこんごどんどん伸びる傾向を示している。こうした要因のおかげで、共同の課題の解決が著しく促進されるといった例は少なくない。

現在ソ連とチェコスロバキアは、専門化と協業化にかんするコメコン加盟諸国の50以上の多角協定に参加している。ソ連・チェコスロバキア二国間の30以上の協定はさまざまな種類の工業製品の共同開発のほか、分業や努力の結集を定めている。宇宙を含むすべての分野にわたる協力は、これらの国の間の友好関係が実り多いものであることを明瞭に示している。

こんどの訪問の結果調印された新ソ連・チェコスロバキア諸文書の中で重要な地位を占めているのは、科学・技術、エネルギー産業、機械工業と軽工業のさまざまな部門、教育、医学、文化、芸術、互恵貿易の増大の分野における協力の拡大、深化の見通しである。

ソ連とチェコスロバキアの現在の貿易額は五五億ルーブル以上だが、一九七六—八〇年度には二五〇億ルーブルに達する。両国の地図には共同の新建設場がどんどん現れている。

ソ連は若干の種類の原料や材料にたいするチェコスロバキアの需要を満たし、また重機械工業その他の国民経済部門のさまざまな種類の製品を供給している。逆に、毎年チェコスロバキアからソ連は金属工作機、織物、化学、食品、その他の工業用機械、設備を受け取っている。

南ウラルのオレンブルグからソ連の西部国境までのガスパイプライン〝ソユーズ〟のソ連領内での共同建設は順調に進行している。ソ連とチェコスロバキアの専門家は共同で高性能の紡績機械を開発して、紡績機械工業の専門化を進め、生産を集中化し、国際規格並みのレベルに進出した。原子力発電設備の生産分野でのソ連との協力も、チェコスロバキアにとって大きな意義を持っている。電気化学、生物学、計測機器、自動化制御システム、〝インターコスモス〟計画のわく内の宇宙空間開発の分野での作業など、両国の学者が共同で行う重要な科学研究調査は多い。

ソ連の党・政府代表団のチェコスロバキア訪問は、両国の目的の一致、兄弟的な相互関係、両国民の友好を今後も強化してゆこうという両国の熱意をいま一度確認した。一九七〇年のソ連・チェコスロバキア友好・協力・相互援助条約調印のさい、L・I・ブレジネフは「数年、数十年過ぎ去っても、この条約はソ連とチェコスロバキア両国民の利益に、平和と社会主義の偉大な事業に、確実に役立とう」と語った。それ以来8年たったが、その8年間はこの言葉の正しさをはっきりと確認した。



各出場者はまずロシア語でスピーチ…

1978年度
ロシア語弁論コンクール

6月17日、東京・有楽町の朝日講堂で一九七八年度ロシア語弁論コンクールの決勝大会（主催・朝日新聞社、朝日イブニングニュース社）が開かれた。大会に参加したのは、30人の参加希望者の中から予選を通過した15人。それぞれのテーマを5分以内でロシア語で話したあと、質問者ナタリア・チョーラババさんの質問に答え、さらにトルストイの長編『戦争と平和』の一節を暗記で朗読した。

審査の結果、『どうぞ、遠慮しないで話してください!』という演題で話した河西雅子さん（慶応大学4年）が、1位に決まった。2位は古出恭子さん（東京外国語大学3年）の『イコンとの出会い』、3位は有賀裕子さん（上智大学2年）の『私の好きな詩』、4位は宮崎武俊さん（早稲田大学大学院）の『おまえを食ってやる!』、5位は杉山春子さん（上智大学2年）の『私とロシア語』。

1位の河西さんと2位の古出さんは在日ソ連大使館を通じてソ連対外友好文化交流団体連合会から、10日間のソ連旅行に招待された。

なぜロシア語を勉強する気になったのかという質問に、1位の河西さんは次のように答えた——「レニングラードに行ったとき、ホテルの部屋に鍵を忘れたままドアを閉めてしまいました。途方にくれて管理係のおばさんのところに駆けつけましたが、何と説明していいか分かりません。やっとわけを話して、部屋を開けてもらって、ほっとすると、引っ込み思案さえ克服すれば、ロシア語で説明できるんだな、という自信がついたのです。これは大きな発見でした。ロシア語は、外国語で意思が通じ合える喜びを私に与えてくれました」

最後に、弁論コンクールの司会をつとめた朝日新聞の元モスクワ特派員である杉田寿男さんに、コンクールについて語ってもらった。

「今回のコンクールの特徴は、昨年とくらべて、参加者の成績がよかったという点でしょう。したがって、審査委員会は入賞者を決定するのに苦労しました。もう一つの特徴は、ロシア語を学ぶ女性の数がひじょうにふえたことです。女性は勤勉でねばり強いので、今回も5位以内に4人も女性が入賞しました。

指摘しておかなければならないのは、近年、日本の若い人たちのあいだでロシア語熱が高まり、日本の大学でもロシア語を教えるところがふえたことです。18年まえには、ソ連にたいする偏見にわざわいされて、ロシア語を勉強する学生の数はきわめて限られていましたが、現在では、両国の通商経済関係の拡大や友好関係の進展が、ロシア語の普及に役立っています」

本誌の編集部も、日本におけるロシア語学習者のいっそうの成功を期待し、追加賞としてコンクール参加者全員に1年分送料当方負担で『今日のソ連邦』誌を送ることにした。

ソ日経済協力シリーズ⑪

日本の食卓をにぎわすソ連食品

ある国民の生活やその文化的、歴史的伝統をより身近に知るためには、その歴史や風俗、音楽や文化を知るだけでは十分ではない。あれこれの国民の生活様式を知るためには、その国民にだけ特徴的な食べ物の分野での伝統を知ることも重要な手がかりになる。

互恵的な商取引にもとづいてソ日両国民の生活を互いに知り合うことを可能にしているのが、食料品の貿易である。というわけで、今回は「プロドゥイントルグ」（全ソ食品輸出入公団）と「ソユーズプロドインポルト」（全ソ果実輸出入公団）の業務をご紹介しよう。



試食会でソ連食品に舌つづみを打つ出席者

ソ連の「海の幸」

今年の5月から6月にかけて行われた二つの試食会は、ソ連が日本市場に供給しているいくつかの食料品を、日本の専門家に紹介するためのものだった。そのうちの一つ、プロドゥイントルグが5月25日に行った試食会には、世界的に有名なキャビアや、日本人にむかしから好まれているカニのかん詰め、世界のさまざまな海でとれる魚のかん詰めの新しいサンプルなど、さまざまな種類の魚や海産物のかん詰めが紹介された。

プロドゥイントルグは、食料品とその原料の貿易を専門に扱うソ連でも有数の公団の一つ。この公団が扱う品目は、魚、魚製品、その他の海産物をはじめ、植物性および動物性の油、肉製品、乳製品、競走馬、種馬、種付け用家畜、動物園用の動物その他、きわめて広範囲に及んでいる。

長年にわたって、プロドゥイントルグの日本との貿易においては、海産物が大きな比重を占めてきた。なかでもクジラの肉や油、冷凍魚が多かった。一九七七年の日本への輸出総額は約一五〇〇万ルーブルだったが、そのうちの95％以上が、これらの海産物だった。

二〇〇カイリ経済水域の実施にともなって公団の輸出能力と日本市場の需要が急速に変わりつつある条件のもとで、海産物貿易にたいする新たなアプローチを探求する必要性が熟した。ソ連製の魚のかん詰めを日本の市場へどの程度売り込むことができるかの調査は、この作業の方向の一つである。

微妙な好みの差

先の試食会が示したように、日本の専門家はソ連製かん詰めに大きな関心を持っている。この試食会には一二〇人以上が訪れたが、その中には通産省や農林省水産庁の代表、大手漁業会社や商社の代表もいた。

試食会はまた、ソ連製の魚のかん詰めが日本の市場で正当な地位を占めると言えるまでには、ソ連の諸機関がさらに取り組まなければならない問題があることをも明らかにした。これらの問題は主として好みのちがいや、かん詰めの製法のちがいによるものであり、当然解決できる問題であるし、プロドゥイントルグと日本のパートナーとの間の協力が成果をもたらすことは疑いない。

一方、ソユーズプロドインポルトが東京丸一商事の直接の参加と協力のもとで組織して6月1日に行ったもう一つの試食会（試飲会）は、日本人にソ連の伝統的な酒類のさまざまな銘柄を紹介した。試飲会で中心的な地位を占めたのは、世界で最も有名な酒——伝統的なロシアの製法でつくられたさまざまな種類のウォツカである。

ソユーズプロドインポルト駐日代表は記者のインタビューに答えて次のように語った。「わが公団はソ連外国貿易省傘下の最大の公団の一つで、コーヒー、茶、各種調味料と香辛料、果物、野菜およびそれらのかん詰め、酒類、コーラ等を輸入しています。一九七七年の貿易額は二〇億ドルに達しました。

ウォツカに国境はない

現在、公団は世界70ヵ国と取引しており、貨物量は五〇〇万ｔ以上になっています。わが公団が輸出しているアルコール飲料の中ではウォツカが最もウェイトが高く、ロシア・ウォツカは世界各地で販売されています。ロシアのウォツカの歴史は11世紀の初めにすでに名前が出ており、20世紀初めには商品を送り出したと伝えられています。

ロシア・ウォツカの原料は小麦です。輸出は一九五〇年代に始めましたが、一番の得意先は米国です。今年米国への輸出量は三〇万ケースになるとみられています。米国に次いで大きなマーケットは欧州ですが、たとえば西独には三〇〇万本輸出しています。米国は赤ラベル、西独は緑のラベルが多く、その他イタリア、スウェーデン、ドイツ民主共和国、チェコスロバキア、ハンガリー、コロンビア、メキシコなどの国々へもかなり輸出されています。日本の市場について言えば、日本の場合、アルコール度数の高い酒に慣れていないので、難しい面もありますが、パートナーの東京丸一商事やサントリーが積極的に販売に取り組むなら、数年後には二万ケースにはなるでしょう。

わが公団では日本製の食品の輸入も検討していますが、具体的な交渉はこれから始めたいと思っています。

日本とわが国は経済的にも友好関係にあり、今後もソ日交流が頻繁になると思うので、ロシア・ウォツカも年々普及していくものと確信しています。また一九八〇年にはわが国でオリンピックが開催されるので、これを機会に交流は一段と深まると思います。自然にウォツカの消費もふえるでしょう。

今年、わが公団は東京丸一商事およびサントリーと3ヵ年契約を結びました。この契約によって、自然の恵みを使って昔からのロシアの製法でつくられたブドウ酒やウォツカの輸出量が大幅に増えるものと期待しています」

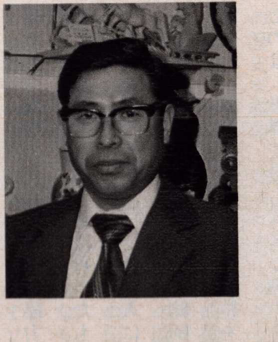
微妙な好みの差など、まだ問題がないわけではないが、ソ連製食品はしだいに日本の食卓にも進出している。



日本側当事者は語る

ユニークなソ連物産の店〝白樺〟

東洋貿易株式会社代表取締役　難波恒夫



私たちがソ連の民芸品や食品、みやげ品を日本に紹介し、販売する「ソ連の店白樺」を東京に開店してから、もう15年近くになります。それは東京の新橋駅前ビル5階に、小さな店構えで始められましたが、日本における唯一のソ連民芸品、みやげ品を扱う店として、沢山の日本の人々から暖かい支持を受け、またソ連側の各貿易公団をはじめ、在日大使館、通商代表部などの大きな協力を得て年ごとに事業を拡大し、開店10年目には最初の年の取扱高の一〇〇倍に相当する商いができるほどに成長することができました。

「ソ連の店白樺」では最初民芸品、みやげ品だけを取扱っていましたが、これだけではお客様の要求を十分に満たすことができませんでした。そこで、民芸品だけでなく、ソ連産のウォツカ、コニャック、ワイン等の酒類や、ジャム、はちみつ、その他のびん・かん詰め、紅茶、チョコレート、菓子などの食料品、切手、絵はがき、レコードなどからコハク、毛皮、宝石、貴金属などにいたるまで、ソ連のものなら何でもそろっているという、総合的なソ連物産の専門店の実現をめざしてきました。

しかも「ソ連の店白樺」が総合的なソ連物産の店となる以上、それは単に商品の販売というだけの仕事にとどまらず、そうした商品を通じてソ連邦自体への社会的、文化的関心をよびおこす機能をもつようになり、いわば「ソ連の顔」といったような役割をもつようになってきました。それはどうしても日本の最も代表的な、目抜きの場所につくられなければなりません。こうして一九七六年8月6日、銀座二丁目6―1の銀座通りに面したビルの1階に「ソ連の店白樺」が実現したのです。

店内に一歩入ると、なつかしいマトリョーシカをはじめ、ソ連邦各共和国の民族衣装を着たお人形がずらりと並んで皆様を歓迎しています。続いてソ連邦各地の民族文化の伝統を香り高く伝える民芸品、工芸品がところせましと並んでおり、店内を流れる静かなロシア民謡のメロディーとともに、皆様の心をロシアへといざなってくれます。

このほかに、バラライカ、バヤン、バンドーラなど、ソ連独特の楽器類や、サモワール、紅茶、コーヒー・セットなど目のさめるような陶磁器の数々、まるで博物館の中にいるような感じになります。さらに奥に進みますと、高価な毛皮の帽子やえり巻き、美しいコハクのアクセサリーなどが女性のため息をさそいます。また店内の一隅では、ロシアのウォツカ、アルメニアのコニャック、グルジアのワインなど、世界に誇るソ連の銘酒がずらりと勢揃いして、愛飲家を待ちかまえております。ご希望の方には無料の試飲サービスもしております。



白樺銀座店の内部

銀座のど真ん中で、モスクワのふん囲気と味が楽しめる「ソ連の店白樺」は開店以来大へんな人気を呼んでいます。お客様は、北海道から沖縄の方まで全国からおいでになっていて、初めてソ連の品物に触れるという方も多く、ソ連への親近感を深めているようです。

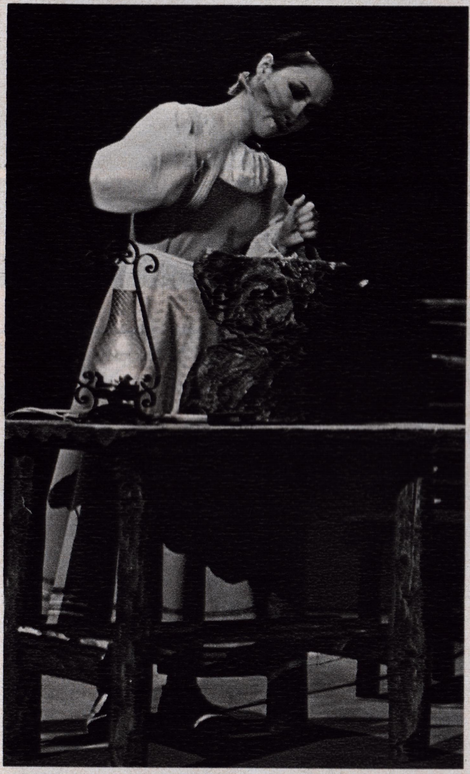
また、日本を訪れた外国人のお客様が、銀座に「ソ連の店」があるというのでびっくりしたり、大変喜んで買物をしたりされます。お客様は、直接来店される方たちだけではありません。全国各地から電話や手紙で注文があいついでいます。問合せは商品についてだけでなく、ソ連のいろいろなことがらについて沢山きております。こうしたお客様との対話が持続され、拡大されております。

銀座の伝統的な商店主たちは、自分たちの街のど真ん中に「ソ連の店」ができたことに驚きの目を見張りました。銀座での「ソ連の店白樺」の成功と人気をみて、全国各地の百貨店、専門店がソ連物産への関心をいっそう高めてきております。この店の出現に驚いたのは国内の業者ばかりではありません。ニューヨーク、パリ、ロンドンなどの一流商店会でも話題になり、その業績が注意深く見守られておるようです。

「白樺」の新橋店は郵便番号105　東京都港区新橋2―20新橋駅前ビル1号館5階（電話03・572・3291―3）。

銀座店は郵便番号104　東京都中央区銀座2―6―1（電話03・567・6361）

劇団仲間が『石の花』を上演



『石の花』の舞台から

映画でもおなじみの『石の花』が日本の劇団『仲間』によって上演される（さねとうあきら、中村俊一・脚色）。

『石の花』はソ連の作家パーベル・バジョフがウラル地方の民話や伝説を集めて書いた説話集『孔雀石の小箱』の中の一篇。主人公の牛飼いのダニーラは主人の大切な牛をなくした罰に、がん固者で有名な石工の親方のもとへ無理に弟子入りさせられたが、妖精の助けをかりて立派な石細工を完成させる。それを主人のところへ持って行くと、欲の深い奥さんはダニーラを鉱山へ追いやり、3年のあいだ石細工を作り上げるよう命令する。くる日もくる日も石細工に取り組むダニーラのところへまた妖精が現れて、〝石の花〟が作れるへビ山へさそう。〝石の花〟にあこがれていたダニーラは親方の娘カーチエンカへの愛を捨ててへビ山へ行く決心をする……

『石の花』の公演にあたって、演出を担当した中村俊一氏は次のように語っている。

「『石の花』（2幕8場）は10年ほどまえ、マルシャークの『森は生きている』（原題『12の月』）のような作品をという労演の要請を受けてつくられ、各地の労演会員のために上演されたものです。それ以前にも、本来児童劇である『森は生きている』や『乞食と王子』を労演例会として、ほとんど全国的に上演した経験からいうと、作品の質が高く内容が豊かであれば、観客はおとな、子どもの区別なく、まったく同じと言っていい反応を示してくれます。その意味からすれば、労演会員のためにつくられたとはいえ、もともとが古いウラル民話である『石の花』の持っている深い味わいは、そのまま子どもの鑑賞にも十分耐えうる作品だと思います。

舞台転換も含めて、全体のテンポを速めるために若干手を加えはしましたが、子ども向きに話をやさしくするというようなことはしませんでした。子どもたちがどういう風に受けとめてくれるか、楽しみです」

公演日程　7月21―26日

開演　あさ10時、ひる1時半（21日のみ2時）

場所　都市センターホール（東京都千代田区平河町2―4）

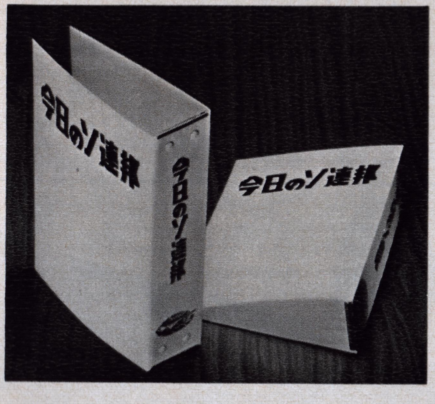
入場料　A席2000円　B席1600円（全席指定、おとな子ども同一料金、20名以上団体割引あり）

なお、本誌で見たと電話で申し込まれた場合には割引料金になるそうです。7月27・28日には東京都立川社会教育会館でも上演されます。

お問合せ・お申し込みは

劇団仲間「子どもの劇場」係（〒164　東京都中野区中央2―54―10　電話03・368・4623または361・9568）

本誌専用ファイルができました！



『今日のソ連邦』を保存するのに便利なファイルが発売されました。このファイルには、ことしから週刊誌型（B5判）になった本誌の一年分24冊がとじこめます。材質はポリプロピレン、乳白色のバックに『今日のソ連邦』の金文字が印刷されている上製のファイルです。定価は六五〇円。送料（二〇〇円）を添えて左記にお申し込み下さい。

お申し込み・お問合せ先

（郵便番号一七〇）

東京都豊島区東池袋3―1―1

サンシャイン60

ソ連総合貿易株式会社

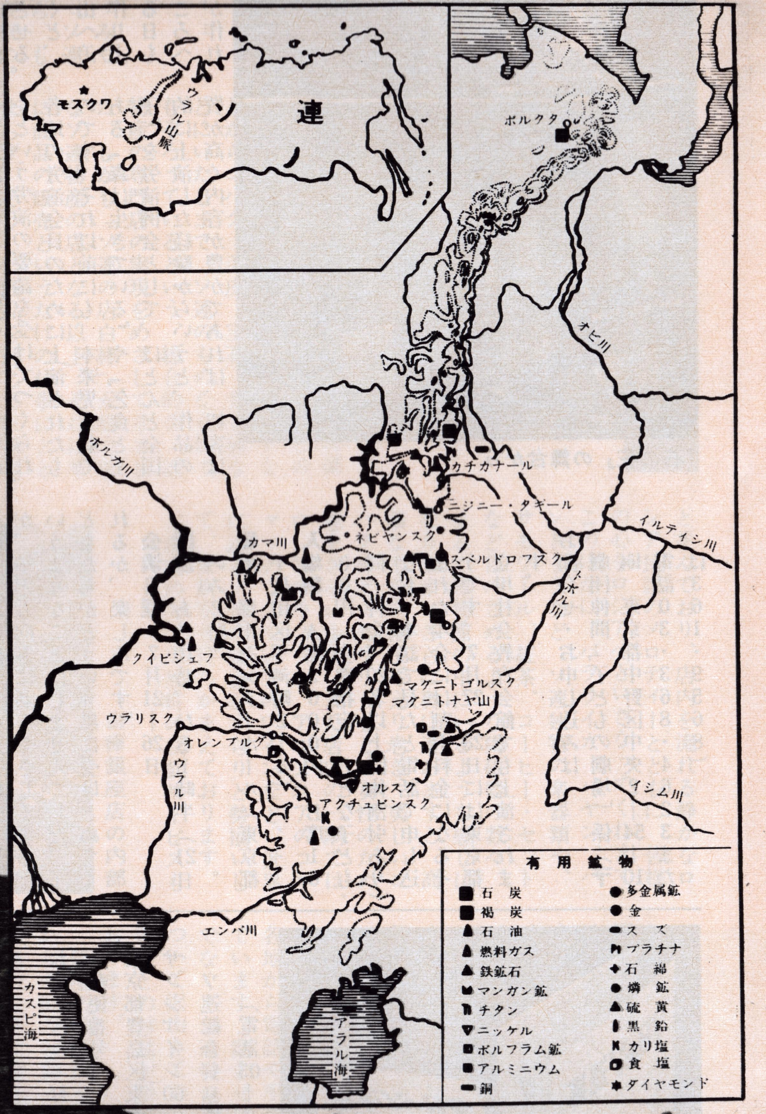
（電話03―988―5711）

"欧州とアジアの境界"

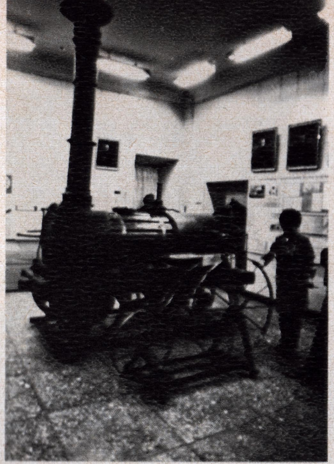
ウラル工業地帯ではいま…

ドミトリー・カズーチン
アレクサンドル・フラトキン　カメラ　G・コポソフ他









▼極北に近いウラルの北部は索漠たるたたずまいである。

ニジニー・タギール博物館の呼び物の一つである一八三三―三四年にチェレパーノフ父子（エフィムとミロン）が発明したロシア最初の蒸気機関車。

ニジニー・タギール美術館の呼び物『マドンナ』はラファエルの作品だという人もいる。

まずはウラルの概観

寒冷のカラ海沿岸からカザフスタンの炎暑のステップにいたる南北二〇〇〇kmにわたって広がるウラルは、欧亜の境界であるだけでなく、自然界の驚異の現象に富み、活動的で進取的な人々に豊かな恵みを与えている。

"ウラル"という言葉はチュルク語。ある人は"帯"という意味だといい、ある人は古代の英雄叙事詩の主人公の名だというが、われわれは、ウラルとは鉱物王国の世界的な宝庫だと言ったソ連の有名な鉱物学者アレクサンドル・フェルスマンの言葉をとることにしよう。

一七〇一年にすでに銑鉄を生産したといわれる最初の鉄工場をこの地につくったピョートル一世以来三〇〇年間に、徐々に開発されてきたウラルの自然の多種多様な富こそ、ウラルの魅力のすべてである。

かつてウラルには木材の世紀、石炭の世紀があったが、いまは石油の世紀の時代である。ウラルのウドムルチア（ウドムルト自治共和国）、ペルミ周辺、オレンブルグ地区と北部には、石油とガスの鉱床がある。こうしたさまざまの天然資源こそ、国全体がこの地方にたえず熱いまなざしを送っている主な理由である。

2世紀半の間にウラルには衰退の時代もあった。前世紀と今世紀の境がそれだった。しかし一九一七年の10月革命



ウラル工業地帯ルポ

後、国が工業化に着手したとき、ウラルの富はウラルを新しく開花させた。また国が投資額の半分をウラルに投資した時代があった。もちろんその投資が無駄にならないことを完全に確信してのことだ。

こうした先を見越した投資のおかげで、ウラルはとてつもなく強大な経済地域に変身した。現在のウラルとは、ソ連の国民総生産の10%であり、またソ連の技術・経済的進歩の拠点であり、おそらくその拠点のなかでも最も重要な拠点の一つであろう。

ソ連科学アカデミー・ウラル学術センターのミハイル・セルゲーエフ副総裁は、ウラルの鉱工業について次のように語った。

「ウラルの鉱工業の構造はまったく自然に出来上がったといってよい。この構造の主体は有用鉱物である。鉄鉱石と石炭は鉄鋼業を、銅は非鉄金属工業を生み、さらに鉄鋼業から機械工業が生まれた。少し遅れて化学工業と精油業が出現した。ウラルの産業はこれだけにとどまらないが、これらの産業でウラルは有名になっているといえよう。

15—17年ばかり前まではウラルから方々へ鉱石が移出されたものだが、いまは逆に移入しなければならず、そのためにずいぶん費用を使っている。破産の前兆ととられるかも知れないが、そうではなく、この15年ばかりの間に多くのことが変わり、経済問題を解決する新しい可能性や新しい製造法が現れたからにほかならない。ウラルに新しい山ができたが、山といってもそれは古い製造法のときに捨てた廃棄物の山である。われわれはかつてそんな山などにいっこう目を向けなかったが、いまの技術で、こうした廃棄物は貴重な原料となっている。

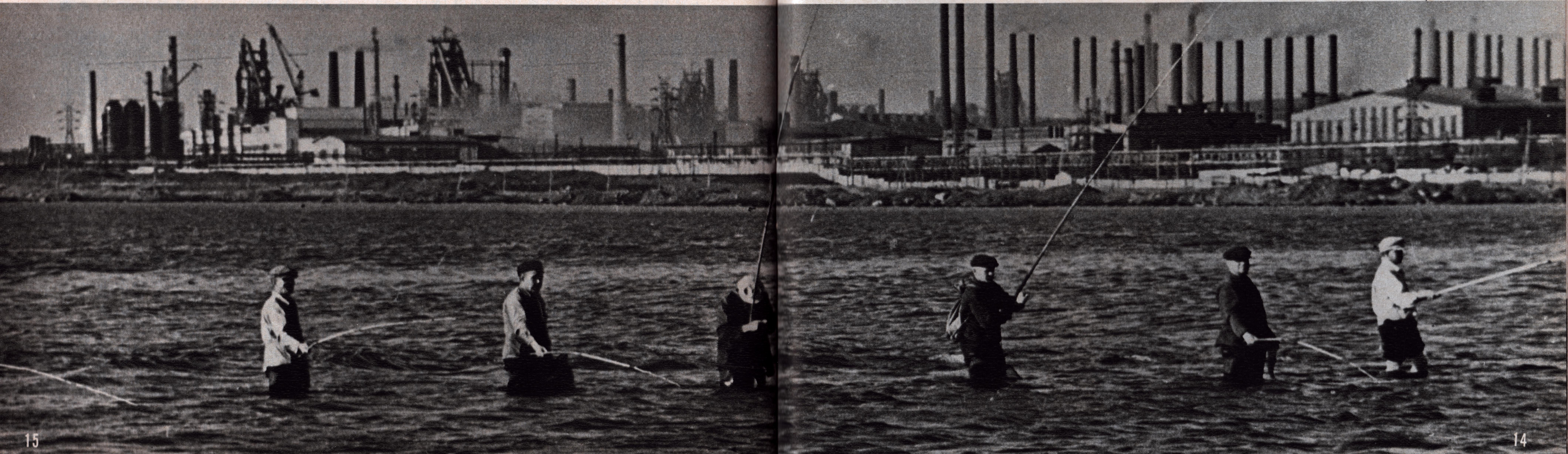
もう一度繰り返すが、ウラルはもう〝年老いて〟しまった。だがわれわれの知っているウラルの地下は五〇〇—六〇〇mどまりで、深さ一〇〇〇mとなるとまだよく分かっていない。一九七三年にわれわれ

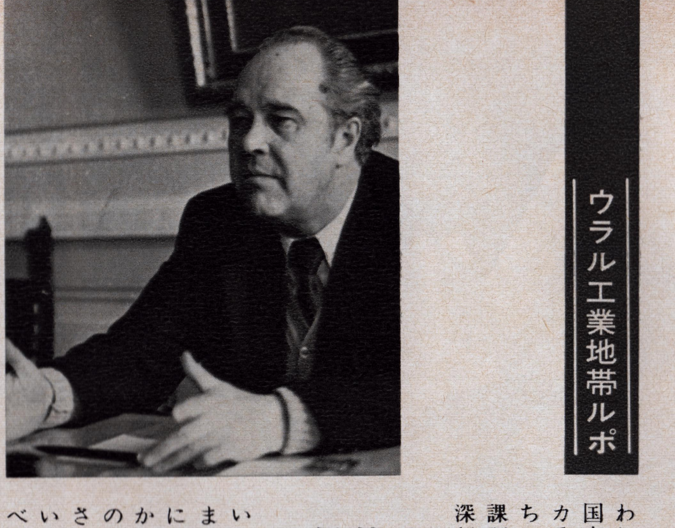


上右　ウラレツ部落（ニジニ－・タギール市）にある欧亜の境界標識柱。

上左　ソ連の大地質学者フェルスマンの言葉を借りると、ウラルとは、鉱物王国の世界的な宝庫だ。

下　マグニトゴルスク市。コンビナートのすぐ近くで釣りとはたのしい。





ウラル工業大学学長フョードル・ザオストロフスキー——「ウラルの大工場の幹部はほとんどがうちの出身者」と鼻高々。



スベルドロフスク建築大学学長ニコライ・アルフョーロフ——「文化全般の水準は大体が建築家しだいだ」

われは自分の構想と計算を、国家計画委員会やソ連科学アカデミー幹部会に提出し、うちの地球物理学研究所に緊急課題として一五〇〇mまでの深部の試掘を命じた」

カチカナール山と絶対的、相対的価値の話

カチカナール山のたたずまいとこの山が有名なこととは、まったく別物である。ハゲ山に近いこの山は斜面がなだらかで低い。海抜八七八m、この地の広い池の表面からの高さは一五〇m以下。だがながい歴史をもつこの山は、うわべのさえないたたずまいとは裏腹に、現地ばかりか、はるかモスクワでも論議のタネとなり、以前は地質学者、いまは経済学専門家をまごつかせている。

鉄鉱石の世界もご多分にもれず均等ではない。鉄鉱石のうちで最も富鉱といわれる磁鉄鉱の鉄分は72%。冶金学者の意見では、鉄分40—50%のものでもまず結構だそうだが、鉄の含有量24—25%以下の鉱床が開発された例もいくつかある。

ピョートル一世以来、カチカナール山に鉄があるという噂がとび、ずっと前に鉄鉱石の露頭が発見されたが、埋蔵量を大ざっぱに計算できた(それも見当はずれの誤算だったが)のはほんの数十年前のことだ。カチカナールは一〇〇億tの鉱石を埋蔵してはいたが、ひどい貧鉱で、鉄分はわずか16%とは、およそ思いもよらないことだった。だがこの鉄にはバナジウムが混じっているので、普通の鋼よりも強度、寿命ともにずっとすぐれたバナジウム鋼を生み出すことができる。ほかならぬそのバナジウムの存在が決め手となって、ここの鉄鋼石は利用されることになった。

一九七五年5月27日、ウラル最初の工業都市ネビヤンスクの北一六〇kmのカチカナール山のふもとの森の中で、鉱坑、採鉱・選鉱コンビナートとまち(これもカチカナールと命名)の建設が始まった。

まちはわれわれが考えていたよりも、速く、しかもりっぱに出来上がった。なだらかに池の方に下る山の斜面に、シラカバやアカマツの古木に囲まれて数階建てのタワーのようなアパート群が建っている。まちが出来て21年になる。ここの住人の平均年齢は27歳。カチカナール市にはトロリー・バスの路線、スーパーマーケット、40の商店、文化宮殿、映画館、図書館、スタジアム(一万人収容)、屋内プール、28の幼稚園と保育所、八つの普通学校のほか、音楽学校と美術学校が一つずつ、スポーツ学校が三つ、採鉱・冶金大学の分校、職業技術学校が四つある。市は引き続き建設中。市の発展のマスタープランは二〇〇〇年までを予定している。

市が建設されたのは、鉱坑と採鉱・選鉱コンビナートのためだが、この鉱坑やコンビナートのほうはたった6年間で完成した。ちょっと信じられないほどの工事のスピードである。

コンビナートの建物は、山膚を切り込んでつくった大きな階段の段そっくりで、段の長さは七五〇m、高さは一〇〇m近い。ここで砕鉱機が数秒間で1立方mの塊を噛み砕き、一日に列車一〇〇本分の鉱石を処理する。この巨大機械設備の王国は、最大限に自動化されているので、人影はまばらだ。だからカチカナールで産出される高炉の原料は比較的安い。

それでもやはりカチカナールは相変わらず論議のタネとなっている。ウラルの鉱業、鉄鋼業関係者は、コンビナートをもっと積極的に力強く発展させ、もっと生産力の大きな第2期分を建設しなければならないとしており、カチカナールのチタン磁鉄鉱はぜひともウラルの高炉の主原料とならねばならぬと言っている。そしてこの地域の富源が全面的に開発されれば、ソ連の他の地域のチタン磁鉄鉱の貧鉱の鉱床開発は決定的な影響をこうむるだろうと見るむきも多い。

古くから豊かさに馴れ、自然の富がいつでも手の届くところにあったこの地方にとって、思いきった、パイオニア的考えが必要であり、その豊かさや手の届くところにある安易さは、かつて採鉱・選鉱などの仕事を大きく前進させたが、几帳面な経済的観念や一生けんめい精励する心構えを起こさせなかった。しかしいま時代の波と科学技術革命の力におされて、こうした心構えや自然資源にたいする新しい態度はどうしても必要になっている

ステップの中のまちと〝欧州部の開発〟の話

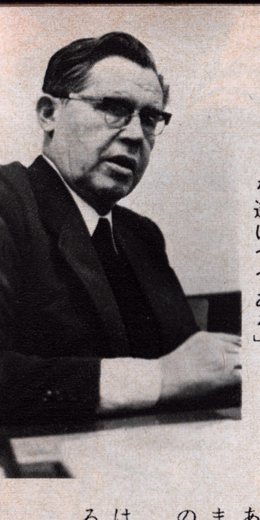
マグニトゴルスクは
かつての希望のまち。
やがて信念に燃える
まちとなり、
いまはとわに
わが愛のまち。



セーベルスキー鋼管工場長オレグ・タンツィリン——「自然に借りを返すべき時だ」



マグニトゴルスク鉄鋼コンビナートの平炉工場先任職長アナトリー・ボチャーロフ——「この工場ほどに腕を発揮できる職場はほかにない」



ソ連科学アカデミー・ウラル学術センター副総裁ミハイル・セルゲーエフ経済学博士——「科学技術の発達は情勢をすっかり変えた。ウラルの原料基地はまたもめざましい発展を遂げつつある」

いまわれわれは巨大ダムや大工場、大都市を建設するすべを学びとったが、25年前当時はまだ学び始めたばかりだった。

〝当時〟——それはマグニトナヤ山のふもとの丸裸のステップ、氷まじりの風に打たれていた最初の建設者たちの防水テントの列、そしてシャベルと手押し車だった。〝当時〟——それはマグニトゴルスクの最初の日だった。

この〝当時〟から3年後が〝やがて〟となる。

〝やがて〟——それはその当時最大のマグニトゴルスク鉄鋼コンビナートの最初の銑鉄であり、そしてその最大は10年、20年、30年、そして50年たったいまも変わりはない。

〝いま〟——それは人口四〇万の都市であり、人口の半数以上は何らかの形でコンビナートとかかわりあっている。

コンビナートとは、一〇〇以上の本工場と補助工場を擁する面積数十平方kmの土地である。ここでは高炉で溶融され、平炉で溶解し直された鉄が、さまざまの種類の鋼に変わり、あるものは鉄柱の梁材となり、またあるものは乗用車の車体の鋼板になる。

ふつう鉄鋼工場の作業能力は、年間の出鋼量で評価されるのだが、このコンビナートの場合は他の諸工場よりも、ほかの国々と比べるほうがらくだ。コンビナートの出鋼量はフランスのそれの八〇〇万t減、イタリアのそれの七〇〇万t減、またポーランドと同じで、チェコスロバキアよりも一〇〇万tも多い。

大体都市に付属して工場がつくられるのが常識だが、マグニトゴルスクは工場に付属して出来た都市であり、そのことはいたるところで感じられる。この都市ただ一つの5階建てのホテルは30年代に建てられたものだが、工場の門のすぐそばにある。そしてちょっとゆくと〝ラートゥシャ〟(市役所)があり、その左手に最大のレストラン〝ウラル〟がある。

まちが小さかったころは、力強い親(工場)と同じ屋根の下で暮らすことは大して苦にはならなかったが、まちが大きくなると、広い土地と空気を切望するようになり、こうして欧州部への移住が始まった。

ウラル川は欧亜の境界を流れ、左岸はアジア、右岸は欧州である。マグニトナヤ山はアジア部にあり、ここを基点にコンビナートも、まちも建設された。

いまマグニトゴルスクの人口の2/3は欧州部に住居、アジア部に職場をもっている。それも欧州部の右岸には工場が一つもないからだ。

左岸の通りが活気づくのは一日たったの3回、労働者の交替の時間だけだが、右岸の通りは日中ずっとにぎやかだ。赤色の市電が走り、色とりどりのネオンが明滅し、通行人は用事をたすために足ばやに通り過ぎる。もうまったくありきたりの都市であり、ここがつい50年前まで乾燥したハネガヤの生い茂るステップであったなどとは、とうてい思えない。

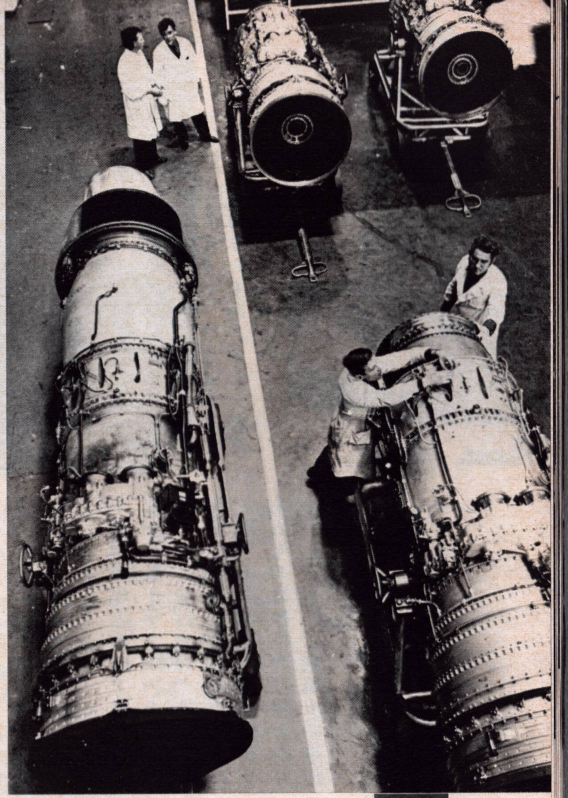
マグニトゴルスクの建設のパイオニアは、一九二〇年代のコムソモール員たちであった。ソビエト政権初期のある一定のタイプの若い人は、このコムソモール員という名で呼ばれた。労働者や貧農の子どもだった彼らにとって、社会主義社会を建設するということは、ただ一つの生きがいであり、唯一のやりがいのある仕事であった。もしほかならぬ自分たちが乗り出して、大きなダムや大工場、大きな都市を建設しなければ、社会主義がひとりでになど到底やってこないことを彼らはよく知っていた。マグニトゴルスクは社会主義のこうした都市の一つとなるはずであった。

マグニトゴルスクの初期の建設者の服装はまったく質素なものだったが、日常のごたごたや困難などにあまりとんちゃくしなかったと同じく、服装のことも、あまり気にかけなかった。彼らは政治論議に花を咲かせ、詩集や技術関係のパンフを読みふけり、春の朝焼けよりも高炉の最初の火で空が赤く染まる日を待ち望んだ。そして一九三二年1月31日、最初の銑鉄が炉を出た。

今日銑鉄を溶解し、鋼をつくっているのは、マグニトゴルスクの最初のコムソモール員の孫たちである。これはこのまちの市民たちの履歴に共通している事実であり、コンビナートの労働者の大半はマグニトゴルスクで生まれ、成長したのである。だからその愛郷心たるやまた格別で、まったく愛郷心の塊といってよいほどだ。年齢、社会的地位、業種のいかんにかかわらず、みんなこぞってこんなすばらしい所はほかにないと信じ切っている。この信念には熱意がこもっていて、真剣そのものだから、つい共感を呼ぶ。

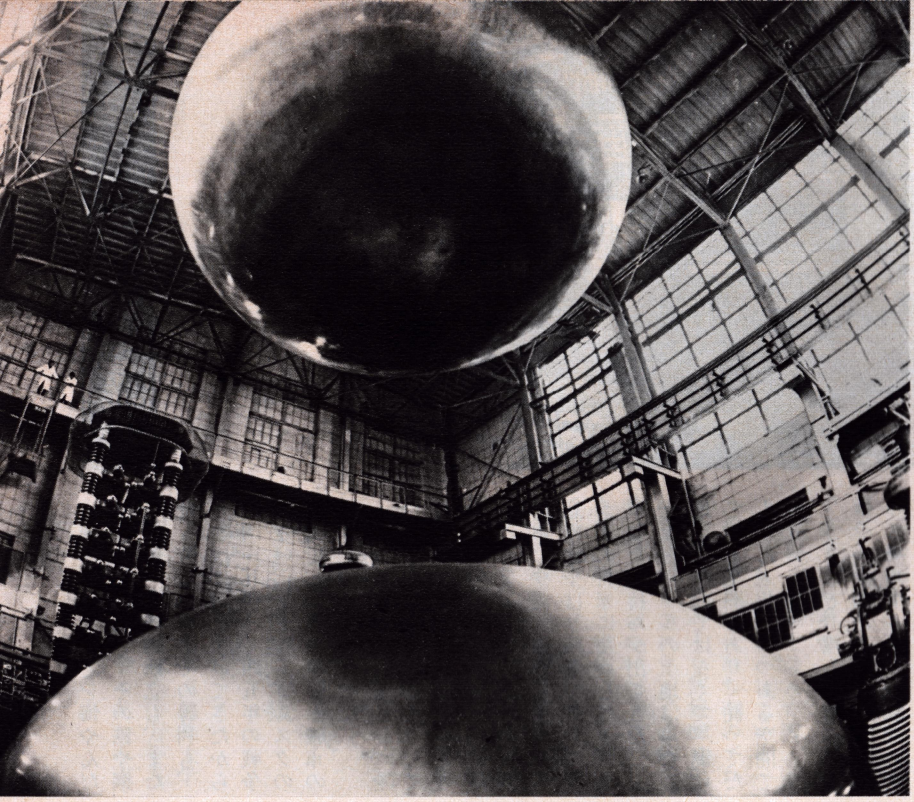
マグニトナヤ山の運命の話

一九七八年の2月のある日、地図の上で標高六一四mのマ









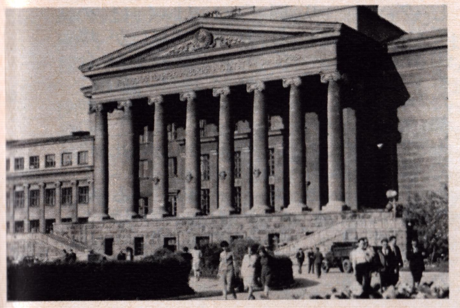
ウラル工業地帯ルポ

グニトナヤ山と記されている場所に、われわれは黙って立っていた。だがおよそそこは山といえるどころか、まさしく穴で、それもとても大きく、とても深い穴だった。

ウラルにくるずっと前にも、山がないことは聞いていたが、何分百聞は一見にしかずということもあるというのできたのだが、案の定山はなく、穴があったというわけだ。鉱夫

上右　ペルミのモーター製造工場

上左　ペルミ州ベレズニキ市近郊の岩塩坑



下　ビシェラ川（ペルミ州）

ウラル工業大学（スベルドロフスク市）

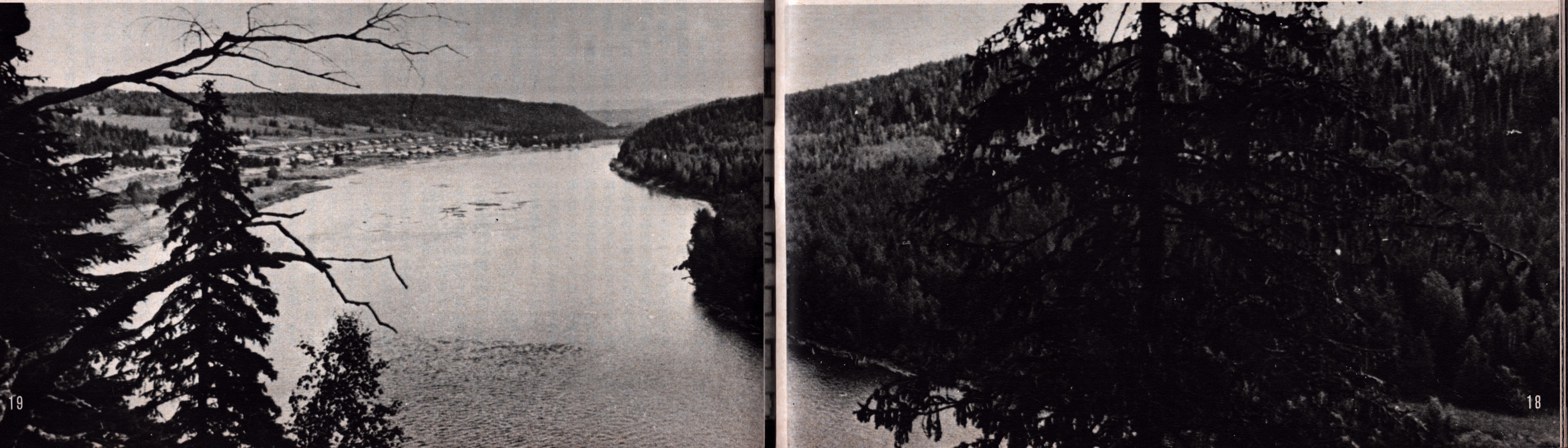
上右　カチカナール採鉱・選鉱コンビナートの採鉱場

上左　ウラル重電機工場（スベルドロフスク市）

流にいえば、その穴は採鉱場であり、その採鉱場は荒廃に近い感じなので、うら悲しさがこみ上げてくる。その穴はマグニトゴルスク鉄鋼コンビナートの半世紀にわたる仕事の現実に残された結果であった。数十mの採掘段が下方まで続いている穴の斜面を見ても、人間に支配されている機械の威力のすごさが、なぜか感動を呼ばず、むしろなにかばく然とした罪悪感を起こすのはどうしたことだろう。

そこでわれわれは遅まきながら、マグニトナヤ山の場所を教えてほしいと頼んでも、なぜマグニトゴルスクの人たちがなかなかいい顔をしなかったかが、やっとのみ込めた。もう一つ。われわれと話し合ったどの現地の人たちもみな、自然との相互関係の話になると、バツの悪そうな顔をしたわけもどうやら納得できた。

ウラルの鉱員や鉄鋼業関係者は、ほかの多くの人たちに先がけて、自己体験から、どんな鉱物資源もやがては枯渇することを知ったようだ。だが底に到達しても、彼らは別





スベルドロフスク市。手前の円形の建物はイセチ・ホテル。

に掘り尽したことを悔やんだりはしていない。その鉄や鋼でソ連の経済的独立も、また最も苦しい戦争での勝利も、りっぱに鍛え上げてきたからだ。一九四一―四五年の戦争のさい、マグニトゴルスクの金属で、砲弾の半分と戦車の1/3がつくられたのだ。

ウラルはまるまる山一つをなくしたが、それがどうしても必要なことだったといくら言い張ったところで、山には気の毒なことをしたという気持ち、ウラルにたいする罪の意識はやはり残る。そしてウラルの将来にたいしてとても不安な気持ちが出てきた。なぜならウラルの土地は単なる地理的空間ではなくて、働いている空間であり、従ってだんだん老化しつつある空間であるからだ。

さきほど登場してもらったウラル学術センターのミハイル・セルゲーエフ副総裁の話が頭に浮かんできた。そのときセルゲーエフは、われわれの知識の総和と、その時使用に適する自然富源の総和との間には相互につながりがあり、知識の増加は自然を守る、と語った。ここでつけ加えさせてもらえば、知識の増加だけでなく、道徳感、われわれを取り巻く世界にたいする社会的、純人間的な責任感も、自然を守るといえよう。

ウラルの人が自然を守るようになったのは、生態系にかんするわれわれの知識がふえたためではなく、この土地のおかげをいかに多くうけているかを、ますますはっきりと認識したためだ。もう自然に借りばかりをつくるだけでなく、借りを返し始めていることも、わきまえている。

その借りにたいする返済――カチカナールの新しい製造技術――は、有用鉱物を大事に取り扱っているよい手本である。またその返済は、池に再び姿を見せるようになった魚(どのウラルの都市もこの魚の出現から返済が始まっている)とか、少しでも水がにごると死んでしまうエビである。

近代バレエ、タギールのマドンナと音楽テープの話

一九七六年1月28日、厳寒の夜スベルドロフスク・オペラ劇場で、モスクワのボリショイ・バレエ団のバレエ『アンナ・カレーニナ』が初演された。満員の盛況だったことはもちろんだが、ウラルの首都の演劇界のビッグ・ニュースでもあった。

しかし出し物そのものにたいする関心は、別に何かとりたてて変わったものを期待するというふうではなかった。スベルドロフスクには昔からオペラ・バレエ劇場がちゃんとあるし、市民もこの劇場の価値を知っており、劇場を愛好している。われわれは『アンナ・カレーニナ』のほか、チャイコフスキーの『エブゲニー・オネーギン』やジュゼッペ・ベルディの『オセロ』も見た。二つとも大入りだった。

われわれはウラルの旅のあいだずっと第一級の芸術を見る機会に恵まれた。ニジニー・タギールの市の美術館ではイタリアの作者不明のすばらしいマドンナの絵(一部の人はラファエルの筆になるものだとさえしている)を見た。

余談だが、タギール市民のクラシック趣味は超現代趣味と平和共存しており、建設者文化会館のレコード室は、入りたくてもなかなか入れないほど人が殺到している。

劇場の出し物や美術展の初日、超満員のホールは、どれもみんなたのしいものだが、もう馴れっこになっていて、別に誰も驚かない。だがマグニトゴルスクにいってみて驚いた。

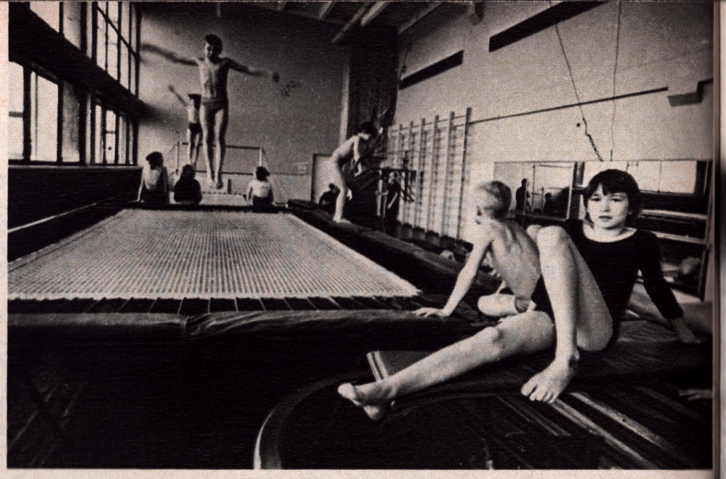
はるかモスクワでわれわれは、鉄鋼労働者のところへ行くのだと思っていたのだが、さて現地にいって会うことになったのは音楽家たちだった。こんなことになったのは、背の低い、もう中年の男のせいだった。国立合唱団芸術指導者、音楽学校長、コーラス協会会長、ロシア共和国人民芸術家、マグニトゴルスク名誉市民――これがその人の数多くの称号と肩書きだが、それでもやはり彼がここで演じてきたし、いまも演じている役がどれ位あるかはちょっと分からない。鉄鋼コンビナートには技術長、動力部長、精錬部長がいるが、彼セミョン・エイディーノフはマグニトゴルスクのいわば音楽長なのだ。もちろん公式にはそんな職務はないが、このまちには必要だろう。

エイディーノフはこのまちの音楽熱についてこう語る――

「うちの市では音楽が生き、栄えている。この市の音楽学校の生徒数は六〇〇〇人で、教師がざっと二〇〇人いる。教師の大半はわれわれの教え子で、上の音楽教育を終えると、またこのマグニトゴルスクに帰ってきて働いている。

一番大事なのは、毎月第4火曜がコンビナートの音楽の日となっていることだろう。この日はコンビナートの各工場で18のコンサート班が出演する。それからどの学校や幼稚園でもプロの音楽家が働いていること、このまちに二つの音楽会館があって、その中に図書館、レコードやテープの収蔵室、小さいコンサート・ホールがあることも言っておかねばなるまい。会館には大人も、近くの子どももやってきて、講演やコンサートをきいたり、本をよんだり、レコードをきいたりしている。入館は無料。それも市のプロの音楽家がみんな無報酬で年に2時間ボランティア活動をやっているおかげだ。このしきたりはもう40年以上も続いている」

党の市委員会のウラジーミル・コロソク第一書記は10月革命60周年の祭典で「わがマグニトゴルスクは金属と音楽のまちだ」と述べた。



プールのスポーツ室(チェリャビンスク市)

″カーメンヌイ・ポーヤス″、工業大学と21世紀の技師たちの話

スベルドロフスク建築大学の付属博物館で、八〇万平方kmの土地を取り巻く北から南へ延びた環(″カーメンヌイ・ポーヤス″(石の帯)――ウラルの別称)を示す地図を見た。この八〇万平方kmの土地は、一種の文化地域といえるところで、ここにはウラルの物質・精神文化や歴史、自然の何千というユニークな記念物がある。建築大学の学生はこれらの記念物を一つの記録にまとめるために、夏の調査のときに、写真に撮ったり、絵にかいたり、記録にとったりした。学長のニコライ・アルフョーロフ教授の説明によると、この作業は、将来建築家が科学技術革命の社会的後遺症とたたかう職業的方法を見つけるのに役立ち、史跡や文化財、自然とその富源を守ることを未来の建築家に教えることになるという。

スベルドロフスクは学生のまちである。一二〇万人近い人口のうち、八万四〇〇〇人がこのまちの12の大学の学生だ。ウラル工業大学はそのうちで最も有力、かつ最も権威がある。フョードル・ザオストロフスキー学長(ロシア共和国最高会議代議員)の権威も同じく大したものである。

大学の建物群はそれこそちょっとしたまちであり、二万六〇〇〇人の学生は、ウラル工業地帯のほとんどすべての主な職業を専門に学んでいる。

「この60年間にウラルの工業の発展の問題がどれだけ出てきたか知りたければ、うちの大学の学部をあげれば分かる」と学長は言う。「もちろんこれは冗談だが、この冗談にはたくさんの真実が含まれている。工業大学はウラルの最も重要な関心事を片付ける必要に迫られて、成長拡大してきた。初期の学生は採鉱、冶金関係者だったが、その後化学工業関係者、ついで工場の建設工や機械製作工、それから電気技術者、電子工業関係者、つい最近は自動制御システム専門家が加わった。大学はウラルのあらゆる必要をほとんど即座に感じとってきたし、そのあるものについては先取りさえしてきた」

「大学はいまどんな″主目標″を立てて学生を教育しているか」という問いにたいして、学長は″数学的目標″だと答え、それをこう説明した――

「ことし入学した学生が卒業するのは一九八三年、そして一人前の専門家になるにはそれからさらに数年かかる。いいかえると、今世紀と21世紀の境の技師というわけだ。科学、技術、製造法の進歩はひじょうにめざましく、25―30年後のうちの大学の卒業生がどんな仕事をやるようになるかはちょっと見当がつかない。しかしこの間におそらく変わるただ一つのことは、科学の基本的基礎、まず第一に科学の数学的基礎であろう。私は生産の数学化はもっと進み、あらゆる分野にわたると思っているほどだ。だからわれわれは基礎教育、まず数学教育にうんと力を入れている」

くじゃく石の部屋、元素周期律表とウラルにたいする確信の話

世界最大の美術館の一つ、レニングラードのエルミタージュ美術館の世界の宝物の中にウラル産のくじゃく石でつくった花びんがある。花びんだけでなく、美術館のホールの一つの内装も、全部がくじゃく石で出来ている。

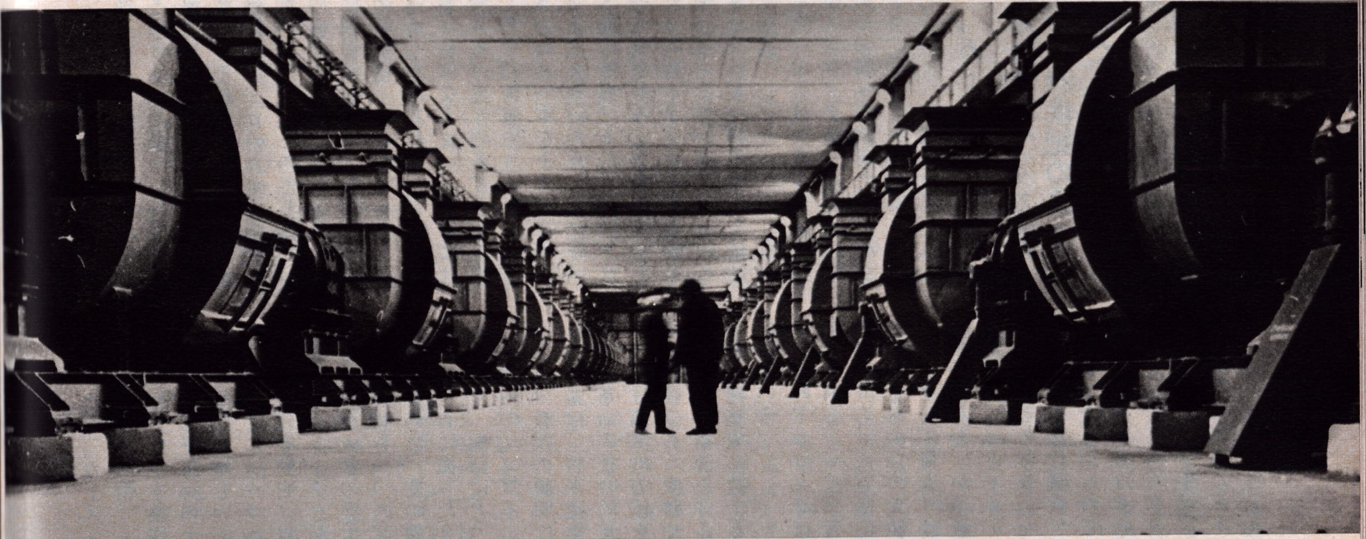
銅鉱床の二次鉱物であるまかふしぎな緑色のくじゃく石は、ウラルのシンボルとなっており、それ自体が美しいだけではなく、その周辺に他の大きな富源があることを約束しているかのように輝いている。メンデレーエフの周期律表の一〇七の元素のうち、たった四つが孔雀石の化学成分なのだが、さらに50ばかり

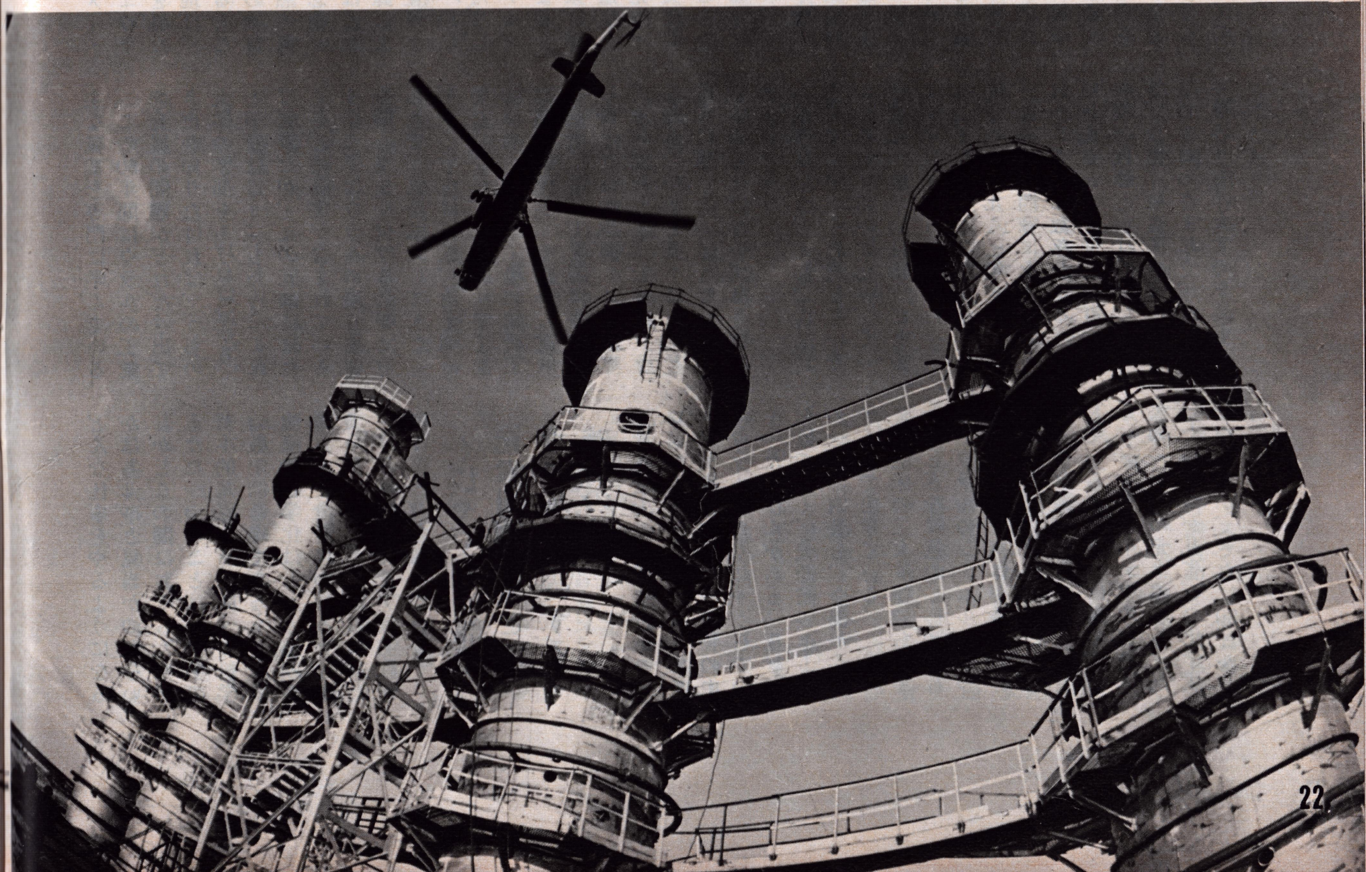
の元素に囲まれて賦存している。鉄と銅、ニッケルとアルミニウム、マグネシウムと亜鉛、マンガンとクローム、チタンとコバルト、石炭と希金属、岩塩とガス——これらが工業に利用できるほどたっぷり埋蔵されているのである。

19世紀末ドミトリー・メンデレーエフはウラルを旅行して、『一八九九年のウラルの鉄工業』という本を書いた。その当時ウラルはひどく衰退していたので、メンデレーエフにはこの古い鉱業・工場地帯の先行きを楽観するだけの材料はなかったようだ。だがメンデレーエフは「つねに私の胸の中で生きてきたロシアの将来にたいする確信がわき上がり、ウラルをじかに見てその確信はさらに強まった。なぜなら未来は経済的諸条件しだいで決まり、経済的条件はエネルギー、知識、土地、穀物、燃料そして鉄によって決まるからだ……」と強調した。

今もってウラルの歴史は、メンデレーエフの言葉どおりに進んでいる。

われわれがウラルで会ったすべての人々の言葉の中にも、ウラルの将来にたいする同じような確信がうかがわれた。





さきのミハイル・セルゲーエフ学術センター副総裁は、あらゆる意見を総括するかのようにこう言った。

「科学技術の発達は情勢をすっかり変えてしまった。ウラルの原料基地はまたもめざましい発展を遂げつつある。われわれは有用性確実と見られる鉱物を発見しており、これらの鉱物はゆうに数百年分はあると見ている」

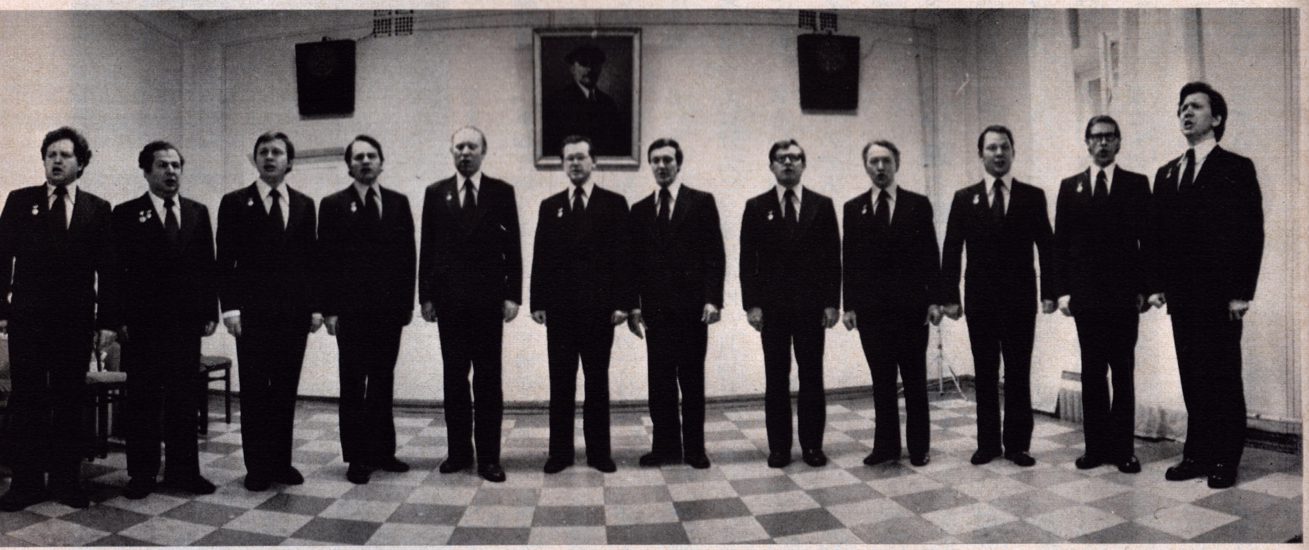
詩人アレクサンドル・トワルドフスキーはウラルについて「大いなる国の拠点の土地、この国の採取者、鍛冶工、わが古き栄光や現在の創造者の栄光と同じ年のもの」とうたったが、われわれはもう一つ、「未来と栄光」をつけ加えておきたい。

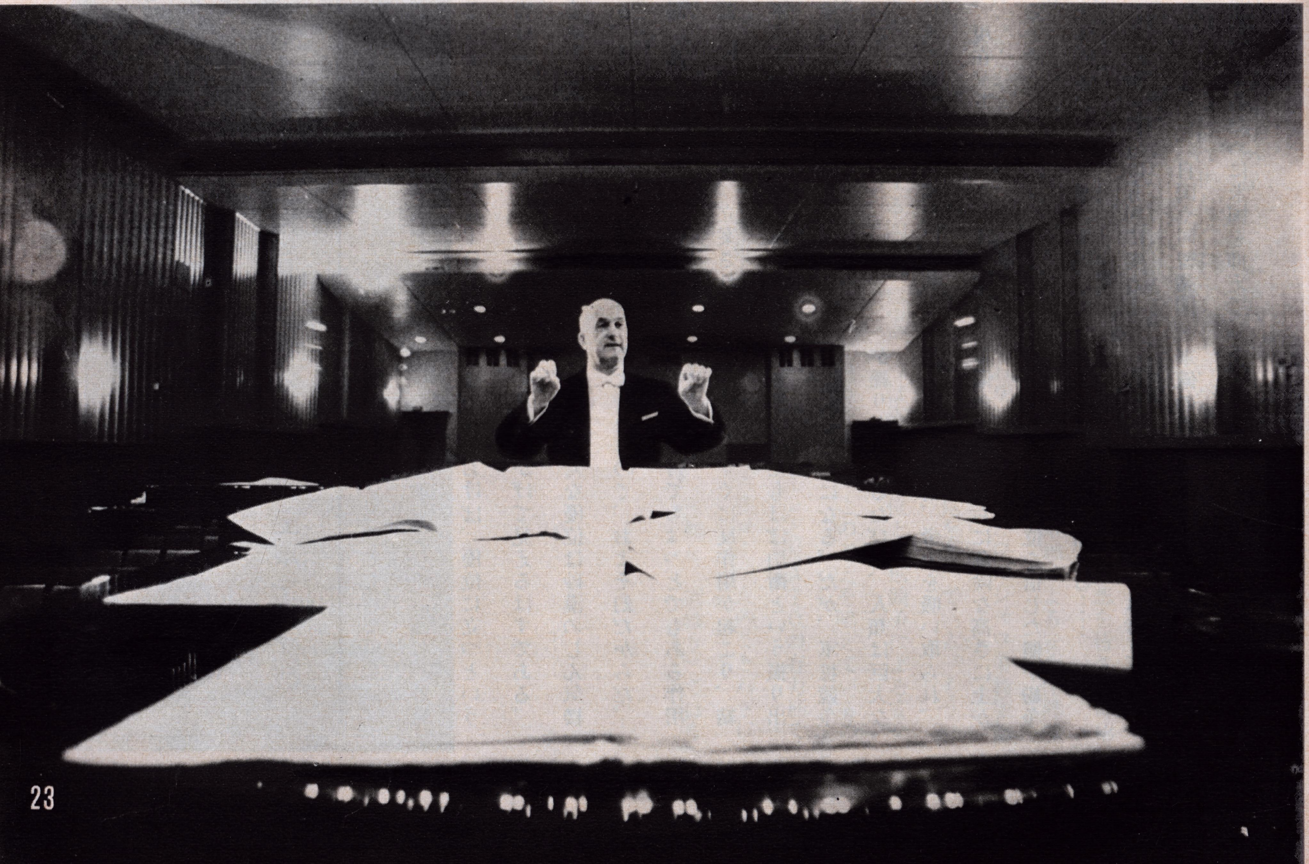
右上　アスベスト市（スベルドロフスク州）の石綿選鉱工場

右下　シナラ鋼管工場（スベルドロフスク州カーメンスク＝ウラリスキー市）

左上　ボーカル・アンサンブル『メタルールグ』は一九七二年創立。外国でも公演し、ドイツ民主共和国の労働者フェスティバルで入賞。

左下　マグニトゴルスクの名誉市民、ロシア共和国人民芸術家セミョン・エイディーノフ。





ソ連の視点

ソ連と西側の二つの安全保障構想

ノーボスチ通信政治評論員　ウラジーミル・エルマコフ

さる5月末の国連軍縮特別総会におけるアンドレイ・グロムイコ・ソ連外相の演説が、広く注目を浴びたのは、現代の最も重要な問題である軍縮問題を解決するための具体的提案が、演説の中に明確に述べられていたことも理由の一つに違いないが、それだけが理由ではない。これらの具体的提案はほとんどみんなこれまでに何度もソ連側から出されたものだが、これらが法典のように一つにまとまると、軍拡競争の抑制とその後の軍縮のあらゆる問題全体を解決の方向へ前進させるために、ソ連が払っているまことに巨大な努力の量がはっきり分かることも、理由の一つといえよう。

ソ連の構想や提案のねらいは、核兵器や通常兵器の競争のありとあらゆるルートを閉ざすか、狭めることにある。だが、そんなことをすれば、ソ連の安全を弱めることになりはしないかとか、「軍縮というまぼろし」を勝手に追っていると、やがては（敵の）優勢な兵力にぶつかる破目になるのではないかという質問もちょくちょくきく。たとえばげんにソ連は中欧の自国兵力の増強を一方的に止めているではないかというのである。

ソ連と西側の構想の違い

モスクワはそんなことを恐れてはいない。ソ連は自国や同盟国の防衛に必要なものはすべて持っており、ソ連の最高の権威筋はそのことを何度も強調してきた。しかし肝心なのは、ソ連の安全保障構想が、ワシントンならびにNATO全体の政策の基本構想と正反対であることだ。米国やNATOの戦略の土台にあるのは、質量ともにソ連にまさる軍事力を持とうとする強い意図である。そしてそのために次々に新種の兵器（通常、レーザー、核、ミサイル兵器）が開発、改良、立案されており、軍事予算は果てしなく増額され、ソ連国境周辺に基地の新しい環がつくられている。

一方ソ連の戦略の基本構想は西側とは違う。現在双方の軍事力がほぼ均衡していると考えている点はホワイトハウスと大体同じだが、ソ連は米国と違って、この均衡を自分に有利に変えようとはしていないし、自国や同盟諸国の安全を保障するために米国を抑えて、軍事的優位に立とうともしていない。現在の軍備水準を正しく評価し、貯蔵兵器を頭におけば、優位に立つという考え自体ばかげて見えるはずである。なぜならそんな優位は砂漠のしん気楼のようなもので、およそ幻だからだ。もしこの分野でちょっとでもある作用が働けば、すぐに反作用が起こり、結局世界はまたもほぼ均衡という振り出しに戻ることになる。だが、軍拡競争が繰り返されるたびに、人類は巨大な物質財、精神財、労力を吸い取られ、軍備の水準はさらに危険な高さに上がり、そして一瞬優位を信じた側が紛争を仕掛ける危険が高まる……

しかしモスクワはそうは考えない。軍備の過剰や優位の幻を追っても、安全の保障はできない。ソ連は、軍拡競争を抑制し、軍縮協定、すべての協約国の利益を平等に考慮する誠実な協定を結んでこそ、自国の安全や国際平和全体を確保できると見ており、その第一歩が軍拡競争の停止、次が現在の力関係を破らず、どちらの側にも損害をかけずに軍備水準を下げること、第3がこれまでと同じく、すべての国の平等の安全の原則を尊重する立場に立って、通常兵器と核兵器を縮小するさまざまな措置をとることである。

軍縮は実現可能か

ではこういう目的は実際に達成できるだろうか？　ソ連の安保構想は果たして実現できるだろうか？　もちろんソ連はさまざまな障害があることを十分わきまえ、情勢をクールに評価している。実のところ軍縮のプロセスは、他の国際問題から切り離れた存在ではなく、これらの問題としっかりからみ合っているからだ。デタントの敵や優位の幻を追う連中は、ザイールとかアフガニスタン、エチオピアとか中東の事態など、なんでも手当たりしだい口実のタネにして、軍縮による全般的安全保障の構想自体にケチをつけようとしている。

しかしモスクワのわれわれは、ここ数年の国際政治市況の揺れにもかかわらず、バロメータがいぜんがまん強くデタントをさし示しているのを感じとっている。はたしてヘルシンキ会議の合意事項は存続し、よい成果を生んでいるのだろうか？　ヘルシンキでは軍拡競争をいくらかなりとも抑制し、地上での平和な生活を助長する20近い協定が結ばれた。国連加盟8ヵ国がこれらの協定に調印したことは、緊張緩和にとって重要だといえよう。緊張を高め、人類を新しい軍拡競争に追いやる人為的、実際的なあらゆる企てが行われているとき、緊張緩和を選ぶか、それともせいぜいよくて戦争瀬戸際（それもいつまで続くかわからない）のきわどいバランス状態を選ぶかであるが、緊張緩和を選ばねば平和はない。

このように二つの構想を皆さんに紹介した。前者は軍縮による安全保障であり、モスクワとワルシャワ条約加盟諸国はこの意見をとっている。もう一つは軍事的優位と軍拡競争による安全保障であり、この考えを唱えているのが、ワシントンとNATOの有力筋である。さて古代ローマ人のことわざにあるとおり「比較し、選ぼう」ではないか。

☆　☆　☆

トピックス

クレムリンの修復工事

モスクワ・クレムリンの修復工事がイワン大帝の鐘楼から始まっている。この鐘楼は16世紀に建造され、1812年のフランス軍の攻撃にもビクともしなかった世界的な建築記念物である。

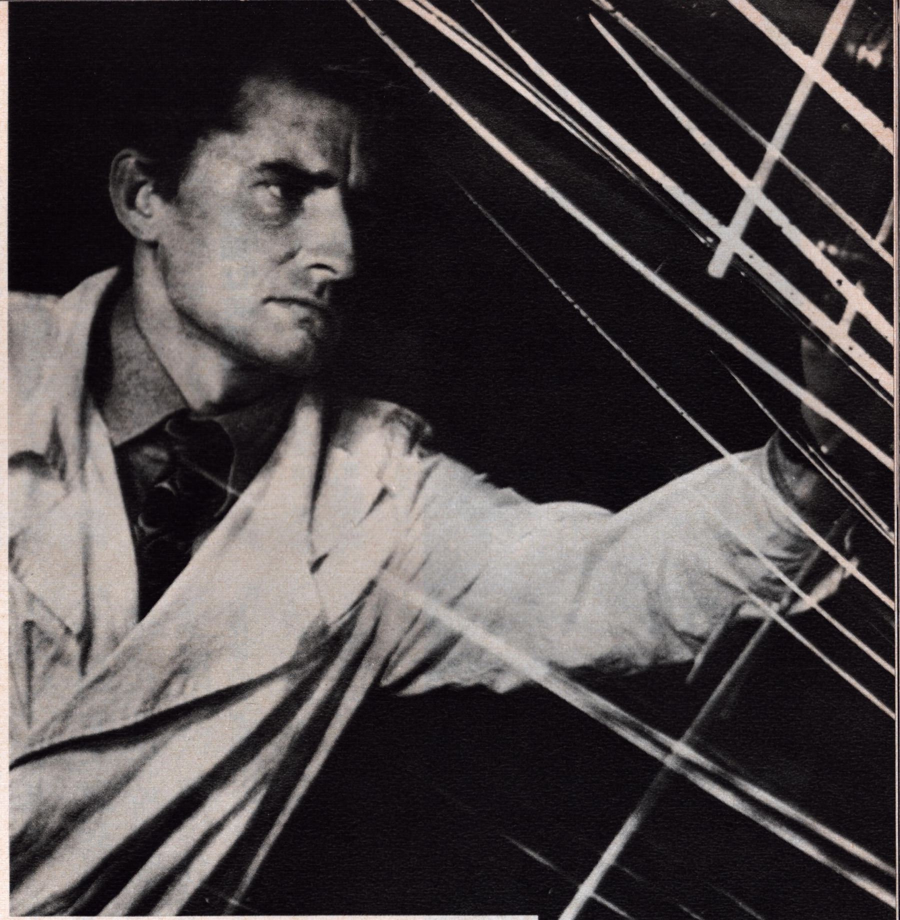
クレムリンにある20の塔全部の外装の修復と、全長2235ｍの外壁の取り替えはすでに済んでいるが、こんどのような大がかりなクレムリンの修復計画は史上初めて。修復開始までに、大量の古文書が研究され、建築法や昔の資材の製造法を知るために土台が掘りおこされた。

これまでの工事中の出土品により、モスクワの起源が年代記の最初の記述の1147年より約 100年古いことが分かったこと、またドミトリー・ドンスコイ大公の時代に建てられた城壁が現在のクレムリンの3角形とほとんど完全に一致していることが確かめられたこと、モスクワの最初の石造建築物は大公イワン1世のころとされていたが、それより古い12世紀末の土台が発掘されるなど、修復工事はさまざまな話題をよんでいる。

建物の修復作業は1980年までに終わる予定だが、内部の絵画の修復作業はそれ以後も続く見込み。



北カフカズ山中のバクサン渓谷にあるソ連科学アカデミー・ニュートリノ観測所。この山の中に長さ800mのトンネルが2本通じており、その奥に観測施設と計測センターがある。



地下から宇宙をにらむ

バクサン渓谷のニュートリノ観測所

アロイズ・フィール
カメラ B・ウシマイキン



計測センターの第1ホール。



計数管でとらえられたあらゆる情報がこの計測センターに集まる。



観測所では毎週、研究セミナーが開かれ、ときには激しい議論が行われる。左端がソ連のニュートリノ観測計画の指導者のひとりアレクサンドル・チュダコフ。

ヨーロッパの最高峰エルブルース山（五六四二m）のふもとに通じる北カフカズのバクサン渓谷は、アルピニズムと山岳スキーのメッカ。だが、このスポーツの地はいま、科学の分野でも脚光を浴びている。ここに、地下天文台が開設されたからである。

この地下天文台の望遠鏡は、夜空をにらんでいるわけではない。天文台につきもののドームもない。これは、宇宙をよく見るために地下を数百mも掘った、いわば現代科学のパラドックスである。

地下にひそむ〝天文台〟

岩が行く手をふさいだかのように思われたとき、運転手がブレーキをかけた。われわれは門の鉄格子を通過して、がらんとしたトンネルに入った。地下の、身を刺すように冷たい風が、前方から吹きつけてくる。背後で、何かの設備を積んだトラックが警笛を鳴らした。15分後に、われわれは普通の事務室と少しも変わらない部屋にいた。

「あなた方は、ソ連科学アカデミー核研究所第1ニュートリノ観測所の地下3階にいるのです」と、ソ連のすぐれた物理学者でソ連科学アカデミー準会員のアレクサンドル・チュダコフが説明する。

われわれはチュダコフといっしょに、それぞれの階を見て回った。観測所はアンディルチ山の地下、トンネルの入口から五五〇m奥のところにある。部屋は、高さ17m、幅40m、奥行き20m。その容積のほとんどを〝望遠鏡〟が占めている。望遠鏡といっても、普通のそれとはちょっとちがう。シンチレーション計数管がびっしり詰まった4枚の板からなる巨大な〝棚〟なのだ。

計数管は、見たところ液体の入った大きなタンクを思わせる。このタンクの中に、光電倍増管が入っている。光電倍増管は、宇宙線がタンクの中の媒体物質と衝突して発生する微弱な光（シンチレーション）をとらえる。計数管からは何千本もの電線がケーブルによってホールの機械へと通じている。

記録された諸プロセスについての情報は、記号化されてコンピュータにかけられる。

このような施設は、地球上にはまだほんの数えるほどしかない。これらの施設の目的は、高エネルギー宇宙線を構成する粒子を全面的に研究することであり、それらの粒子の一つ――ニュートリノが、これらの研究の主要な対象である。



コンピュータで得られた資料を分析する若い研究員ユーリー・ペトロフスキーとエブゲニー・マレツキー。▶

あらゆるものを貫く粒子

チュダコフは説明する――「素粒子の一つであるニュートリノ（中性微子）が存在するという直接の証拠が得られたのは、比較的最近のことです。その秘密の解明に、ますます多くの学者が熱中しています。数式や方程式で厳密に記述されたニュートリノの特徴は、専門家でない人々にとっても、驚くべきものです。そのもっとも重要な特徴は、ニュートリノが他の物質とほとんど相互作用を起こさず、したがって実質的には粒子があらゆるものを貫通するということです。

ここバクサン観測所の〝天井〟は、厚さ数百mの岩ですが、ニュートリノ以外にも、宇宙線に含まれている、あるいはそれから派生したいくつかの素粒子は、この〝天井〟を貫くことができます。しかし逆に、観測所の〝床〟、つまり地球を貫いてこの装置まで到達することができるのは、ニュートリノだけです。そのさい観測装置は、ニュートリノの飛来そのものを記録するだけでなく、その軌道をも記録します。

それを逆算すれば、その発生源の宇宙における座標を知ることができます。〝地下の望遠鏡〟は、このようにして宇宙を観察しているのです」

たとえば、いわゆる超新星からニュートリノの強力なインパルスが出ていることが知られている。この、いまのところもっとも謎に満ちた天体の研究は、全宇宙で起こっているきわめて重要なプロセス、とりわけ星の誕生と死滅のプロセスについての現在の概念をいちじるしく深めるだろう。したがって、ニュートリノの発生源を不断に観測し、超新星の出現を記録することが、バクサン観測所の主要な仕事の一つになっている。

この仕事はきわめて地味なもので、すぐセンセーショナルな大発見につながるというものではない。だが、この仕事の結果は、基礎科学をいちじるしく豊富にするだろう。

地味な仕事だが…

バクサン渓谷の地下観測所には、もう一つのユニークな設備――太陽ニュートリノ望遠鏡が建設中である。この望遠鏡には、アンディルチ山のどまん中に通じる長さ4kmのトンネルの先端につくられる、さらに広い第2観測室があてがわれる。この設備を使えば、自然科学のもっとも重要な分野の一つで、いくつかの新しい発見が生まれるだろうと期待されている。その新しい発見とは、たとえば、典型的な恒星で

観測所で得られたすべてのデータはコンピュータで処理される。▼



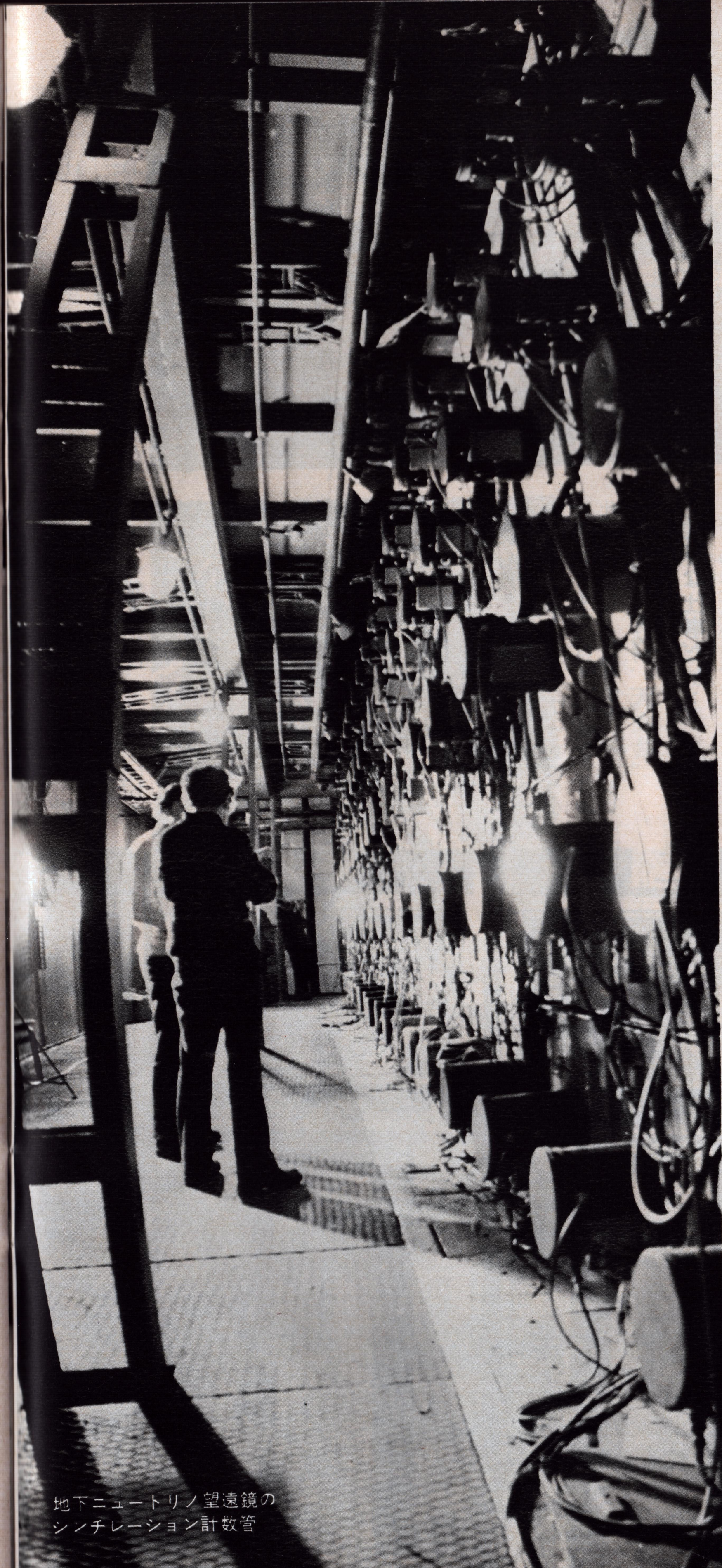
ある太陽のエネルギー源、ひいては一般に星のエネルギー源の解明などである。

というのは、太陽エネルギーは水素が核融合反応によってヘリウムに変わる過程でつくり出されるという現在の定説も、理論モデルにすぎないからである。近年得られたデータは、その普遍的真理に疑問を抱かせている。太陽エネルギーは、別の発生源を持っているかもしれないのである。このことについても、太陽の内部で生まれているニュートリノが、情報をもたらしてくれるだろう。ニュートリノはあらゆるものを貫通することができるので、地球の厚さも簡単に通過する。第2観測室の岩の〝屋根〟が、地下望遠鏡の計数管がニュートリノを何の妨害もなく受け取るのを助ける。というのは、この〝屋根〟の厚さは数kmにも及び、したがって、宇宙線や太陽風（プラズマ流）に含まれている他の素粒子は、この設備に到達する以前に、みんな吸収されてしまうからである。

「どんな具体的な効用があるのでしょうか？」と私は質問した。

チュダコフは確信を持って答えた。

「私たちはここで、応用を直接の目的としない基礎科学に取り組んでいます。とはいえ、大局的に見れば、基礎研究はつねに将来性を持っています。現在の科学技術進歩のあらゆる実践的な結果が、それを裏書きしています。星のエネルギーの物理的プロセスの研究において、将来何らかの発見があれば、それは人類に、いまはまだ知られていない、新しいエネルギー源をもたらすかもしれません。何しろ、エネルギー危機の接近が、ますます痛切に感じられる現在ですから……」



地下ニュートリノ望遠鏡のシンチレーション計数管

情報交換で正確な天気予報

――ハバロフスクの気象センターから

ウラジーミル・ドルゴドボロフ

ベルの音。ハバロフスク天気予報所のパネルに緑色のランプがつき、東京との通信が開始されたことを知らせている。テープは、アラスカからオセアニアにおよぶ広大な地域の気象情報を伝える規則正しい数字の列で音も無く埋められて行く。同時にハバロフスクから東京にソ連国内の気象情報が送信される……

ビタリー・ズプコフ・極東水文気象局主任技官に気象情報の交換について語ってもらった。

「日本海に敷設された海底ケーブルの特別回線で、もう4年間も2時間ごとに天気図の交換が行われています。

低気圧と台風の〝行動〟にかんするデータは、日本からもらう情報のうちでも、われわれには特に貴重なものです。ソ連のたくさんの船舶がこのデータを利用していますし、沿海地方の天気予報にもこのデータはぜひ必要です。日本の関係者の方々の仕事に満足しています。またわれわれの方も現行協定を順守しています。将来、われわれの連絡はもっと拡大されるでしょう。特に、ハバロフスク管区気象センターにセットされる技術装備の不断の改善がこれに役立ちます。最近、5台目の新しい電算機を導入しました。通信装置は60の回線で同時にデータの送受信が可能であり、その速度は一二〇〇ビットでわが国最大です（テレタイプの標準速度は50ビット）」

ハバロフスク管区気象センターは、ソ連最大。東西がバイカル湖からアラスカまで、南北がアムール沿岸から北極までの広大な地域がその観測圏内に入っている。六〇〇以上の気象観測所が、この広大な地域の山地や北極圏内の氷原、交通困難なタイガやツンドラに配置されていて、3時間ごとに気象データを伝えてくる。同様のデータはモスクワやノボシビルスクの気象センターからもハバロフスクに送信されてくる。ソ連の気象衛星〝メテオール〟からはシベリア、ヨーロッパ、北アフリカ各地の地表の写真が電送されてくる。

現代の技術は、ハバロフスクの気象関係者が近隣諸国から受け取るデータの容量を増やしている。たとえば、長期予報の作成に極めて重要なロケット観測の結果を日本からもらうことができた。また、米国の気象衛星からは世界の一連の海域の水温にかんする情報をもらっている。

これらすべてのおかげで、天気の〝思いがけない贈り物〟は事実上避けられるようになっている。気象関係者は天候の変化について24―36時間以前に知るようになっている。その結果、周期的に大陸を襲う低気圧がソ連極東の国民経済に重大な損害を与えるようなことはなくなった。

ハバロフスク天気予報所のガリーナ・ニキチェンコ所長は、次のように語っている。

「世界気象機関の枠内で他国の気象観測網と協力することは、正確で多面的な予報を作成するのに大いに役立っています。専門ケーブルで東京ばかりか、ウランバートル、ピョンヤン、ハノイなどの気象関係者と気象情報の交換をしています。日本や朝鮮民主主義人民共和国の気象専門家が、意見交換のためにハバロフスクにやってきました」

✻ トピックス

ボリショイ劇場の増築計画

モスクワのボリショイ劇場の建物が改修増築されることになった。この決定は、全ロシア歴史・文化記念物保護協会の専門家と慎重に協議した上で採択されたもの。現在の建物は前の建物が焼けたあとに1856年に建てられたもので、それ以来数回にわたって小修理が行われたが、1975年、つまり同劇場200年祭の前年に修復工事が施され、5階まである観客席はライトブルーに金色という当初の色彩を取りもどし、ボックス席には深紅色のカーテンが取りつけられた。

ここ数十年間に建物の支持構造の取り替え、インテリアと正面の修復が行われ、大道具室を別の場所に移したあとに大きなリハーサル・ホールが設けられ、空調設備が取りつけられた。

今回の増改築計画は北側、つまり正面入口と反対側の部分を建て増しして、観客から見えない部分のステージを広げ、その上部の階に二つのバレエ・リハーサル・ホール、広いコーラスおよびソリスト用のホール、衣装室、個人用のリハーサル室などを設けようというもの。ステージ、オーケストラピット、客席の音響効果を改良し、照明システムを最新式の電子制御方式に取りかえることも予定されている。

モスクワ放送"宇宙クイズ"の結果

スタニスラフ・ポルトラッキー

軌道科学ステーション・サリュート6号＝ソユーズ宇宙船の飛行は、ソ連宇宙開発のすぐれた成果となった。一九七七年12月10日から一九七八年3月16日までの96日間、ユーリー・ロマネンコとゲオルギー・グレチコの両宇宙飛行士が軌道ステーションで働いた。サリュート6号には輸送宇宙船のソユーズ27号（ウラジーミル・ジャニベコフとオレグ・マカロフ両宇宙飛行士）とソユーズ28号（ソ連の宇宙飛行士アレクセイ・グバレフとチェコスロバキアの宇宙飛行士ウラジーミル・レメクからなる国際乗組員）、自動貨物宇宙船のプログレス1号が到達した。

この飛行に関連してモスクワ放送は国際宇宙クイズを行った。クイズには世界各国から約五五〇〇人が参加した。日本からも四三〇通の回答が寄せられたが、その数は他のどの国からよりも多かった。

クイズの第1問――「地球周回軌道を飛行した最初の宇宙飛行士はだれですか？ それはいつでしたか？」。日本の回答者のほぼ全員がこの問いに正しく答えた。一九六一年4月12日に飛行したソ連市民ユーリー・ガガーリンが世界最初の宇宙飛行士となった。

第2問――「軌道科学ステーション・サリュート6号によるソ連の宇宙実験の特徴はどこにありますか？」

この問いに最も完全な回答を寄せたのはヨシダ・タカシさん（京都市）。ヨシダさんは実験の最重要な特徴は、軌道科学ステーション・サリュート6号が二つの連結ユニットを持つ宇宙ステーションであり、このおかげで二台の宇宙船が同時にドッキングできる軌道ステーションの開発が初めて実現されたことにあったと書いた。だからこれは三台の宇宙船による史上最初のドッキングであった。その結果、軌道実験室の研究員・乗組員の交代、窮境におちいった宇宙飛行士への援助、研究に必要なさまざまな設備の送付の可能性が明らかにされた。さらに実験は、将来、長期利用の超大型軌道科学ステーションを開発する基礎となった。

ヨシダさんは実験終了のおよそ1ヵ月前の2月20日に手紙を出したので、当然その後の出来事を予測することができなかった。

たとえばトヨダ・アキヒロさん（名古屋市）はソ連の宇宙船乗組員にチェコスロバキアの宇宙飛行士が加わったことが実験の重要な意義であったと書いた。このように、宇宙開発には国際協力への道が開かれている。飛行終了後に手紙を出したタナカ・ハジメさん（三島市）は、ソ連の宇宙飛行士ロマネンコとグレチコが宇宙滞在期間の新記録をつくったことを強調した。

第3問――「あなたは宇宙空間の開発が人類にどんな実益をもたらすと思いますか？」

ある回答者はこの問いに論拠を挙げて答え、別の回答者は自分の空想を展開した。

たとえば、先のタナカさんは宇宙空間の開発は人類に巨大な利益をもたらすと考えている。それは、宇宙衛星を利用して気象観測を行い、超遠距離の通信と無線放送を行い、月の鉱物資源を採掘し、宇宙測候所と太陽エネルギーを利用する発電所をつくり、地上で実現できないような分野で実験する可能性である。そのうえ、タナカさんの意見によれば、宇宙へ進出したおかげで、この地球を全人類の共同体と考えられるようになれば、恐らくこのような世界では民族間、国家間の対立が消えるだろう。

テラガイト・マサカズさん（高槻市）の意見によれば、地球上の鉱物資源――石油、石炭、その他が枯渇する時には、目を宇宙に向けなければならないだろう。火星と木星の間にある小惑星帯は鉄やその他の金属の元素を秘めており、宇宙には石炭もある。宇宙で石炭やその他の資源を採掘し、それを地上に運ぶことによって人類は必要な鉱物原料を手に入れるだろう。

クイズの回答審査委員会はヨシダ・タカシさんが最も正しい、完全な回答を寄せたことを認め、彼を日本からの回答者中の優勝者と決定した。ヨシダさんには96日間宇宙飛行をしたモスクワ放送局のペナントが授与される。このペナントには今回の飛行実験に参加した宇宙飛行士6人全員のサインがある。ペナントと一緒に宇宙飛行士たちの写真も贈られる。

優秀な回答を寄せたさらに10人の方たち――エグチ・マサヒロ（大分市）、ヤマタケシタ・ノリマツ（寝屋川市）、ヤマモト・サツキ（京都市）タケモリ・マサユキ（石川県）、テラガイト・マサカズ（高槻市）、イツミ・マサユキ（奈良市）、ヤマガタ・トシヒロ（愛知県）、オノ・マサアキ（茨城県）、トヨダ・アキヒロ（名古屋市）、タナカ・ハジメ（三島市）の皆さんには、ソ連の宇宙飛行士アレクセイ・レオーノフが自分の参加したソ米共同実験「ソユーズ・アポロ」について書いた著書『太陽風』が贈られる。この本には著者自身によるさし絵が入っている。そのほか10人全員にレコード・セットが授与される。

年産三〇〇万tをめざすソ連の稲作

ノーボスチ通信評論員
レフ・ボスクレセンスキー

ソ連の穀物需給バランスで米の占める割合はそう大きくない。一九七七年の穀物生産高一億九五五〇万tのうち、小麦は九二〇〇万tだが、米はわずか二二〇万tであった。耕種作物の作付面積一億二八〇〇万haのうちの約0・4%、つまりわずか五〇万haが稲作面積である。

ソ連の諸民族にとって米が主食だったことは一度もない。ただ中央アジアとザカフカズ地方（後コーカサス）（とくにアゼルバイジャンで）とでは、一応米は重要食品とされていたが、食生活に欠かせないほどの主要なものではなかった。ソ連の他の地域でも米は主に病人用とか乳幼児食にしか使われてこなかった。第2次世界大戦直前のソ連の米の生産高は年間約三〇万t、一九六〇年代初めでさえ六〇万t以下だった。若干の不足分は輸入でカバーされた。

米は自給自足

いまは事情が変わり、米はりっぱに自給自足できる。ここ数年間の米の総収穫高を次に示す（単位一〇〇万t）。

一九六五年	七〇	七五	七六	七七	八〇（計画）
〇・五八	一・二八	二・〇一	二・〇三	二・二	二・八—三

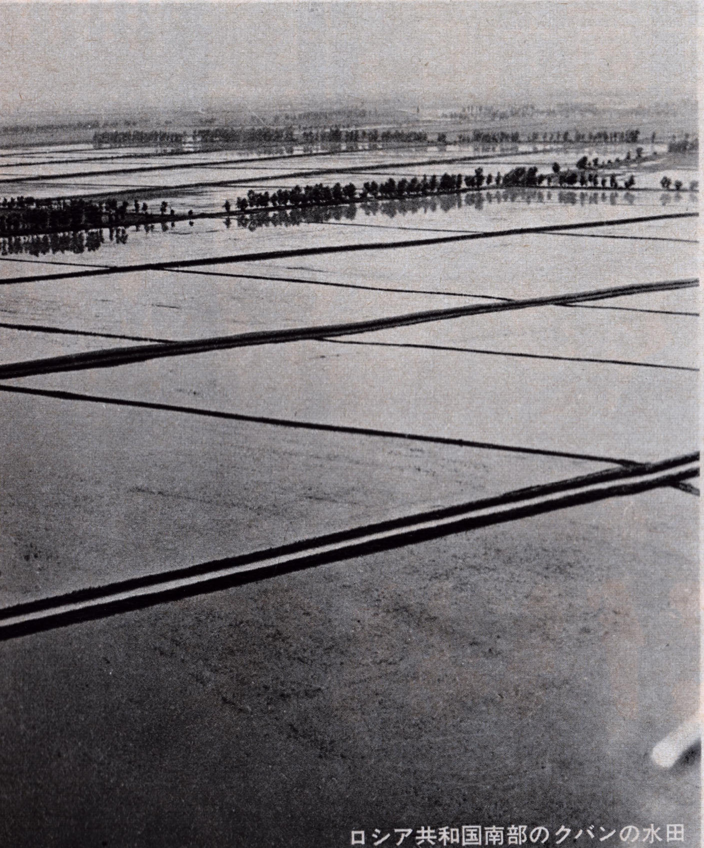
一九六五年からソ連では稲作をも含めたあらゆる農業生産部門を網らする農業振興総合計画が実施され、稲作の基地をつくって米の自給自足をはかることになった。

一九六六—七五年に国はイネの作付地の土地改良に約二五億ルーブル支出し、この10年間にイネの作付面積は二〇万haから五〇万haに増えたが、将来はさらに一〇〇万haまで増えよう。いま作付地の3/4は、一九六五年以後につくられた灌漑施設を備えている。ソ連の稲作地は世界最北にある。中央アジア、アゼルバイジャン、カザフ共和国南部などの伝統的な米どころのほか、いまは北カフカズの山ろく地帯、ボルガ川下流地方や極東でも米が作られている。

クバンの米づくり

とくに注目すべき例はクバン（ふつう、ロシア共和国南部のクラスノダル地方の集約農業地帯はクバン川の名をとってクバンと呼ばれている）。アゾフ海に注ぐクバン川の河洲に、ソ連最大の稲作地がつくられ、ここの灌漑施設の面積は二一万haに及ぶ。この施設は三万kmの用水路、66の大ポンプ・ステーション、自動的に水を供給し、割り当てる総容量三六億立方mの貯水池などを擁する総合施設である。一九七七年のアゾフ海周辺河洲の米の生産量は、ソ連の米の生産量の1/3に当たる六八万tであったが、一九八〇年までには一〇〇万tの大台に達する見込みである。

ソ連の米の平均収量は1ha当たり4t。しかし優秀な専門農場になると10t近い。一九八〇年までにソ連の育種専門家が作り出した倒伏によく耐える良質の新種（1ha当たり収量10t以上）が広く普及しよう。食事時になれば何でもうまいというが、米はソ連人の食卓にどんどん進出している。



ロシア共和国南部のクバンの水田



がい旋アーチの門（1817年）は宮殿の豪華さの一端をうかがわせる。

ロシアの古い美術文化の粋

アルハンゲリスコエ宮殿博物館

ニーナ・マクサコワ　カメラ　A・アレクサンドロフ
P・バラバノフ

モスクワを囲む緑地帯は、古くからモスクワ市民だけでなく、ソ連各地や外国の観光客にも親しまれているレクリエーションの場所だ。モスクワ近郊は、すばらしい自然のほか、いま博物館となっている18—19世紀の邸宅でも名高い。その一つがモスクワの西20kmにあるアルハンゲリスコエの大邸宅・庭園のアンサンブルである。

この最初の所有者は金持ちの公爵ニコライ・ゴリツィン。スウェーデン大使在任中、彼はストックホルムの王室付きの建築家デ・ヘルンに自分の新宮殿の設計を依頼した。この工事量は非常に膨大なものだったので、工事期間は30年にも及んだ（一七八〇年代に完成）。

19世紀初めに新しい持ち主となったニコライ・ユスポフ公爵時代にも宮殿の内装工事が行われたが、ユスポフ公がアルハンゲリスコエを手に入れたのは、自分の絵画、彫刻、陶器の膨大なコレクションと図書館を収めるためだった。

ソビエト政権樹立後、この領地は国有化され、宮殿は歴史・美術博物館に転身し、庭園は自然保護区となった。いま年間五〇万人の内外観光客がアルハンゲリスコエを訪れている。

宮殿に通じる広い道の両側はアカマツの並木で、頭上高く松風の音が響く。アカマツのうしろの奥深いところに黒ずんだトウヒの群れが見え、その中に白い幹のシラカバがちらついて見える。この緑の〝廊下〟を進むと、しだいに建物自体や入口のがい旋アーチや門の鋳鉄の透かし細工が一望のうちに開けてくる。

そして屋根つきの柱廊に囲まれた表玄関に着く。宮殿の建築様式は古典主義。ガラス張りの五つのドアから公園に出られる。公園にはモスクワ川に下りる大階段があり、モスクワ川のかなた遠くに幅の狭い森林帯がうす黒くぼやけて見える。この際限のない広大な眺望が公園を果てしなく広く感じさせる。遠くの木の間隠れに離れの家屋、寺院、あずまやの白い円柱が見える。大理石の彫刻はきちんと順序よく配置されており、公園内の彫刻の数は二〇〇余りにのぼる。アルハンゲリスコエでかつて働いた何百人という無名の農奴の工匠が制作した彫刻の美は、まわりのおだやかな、地味な風景によくとけ込んでいる。

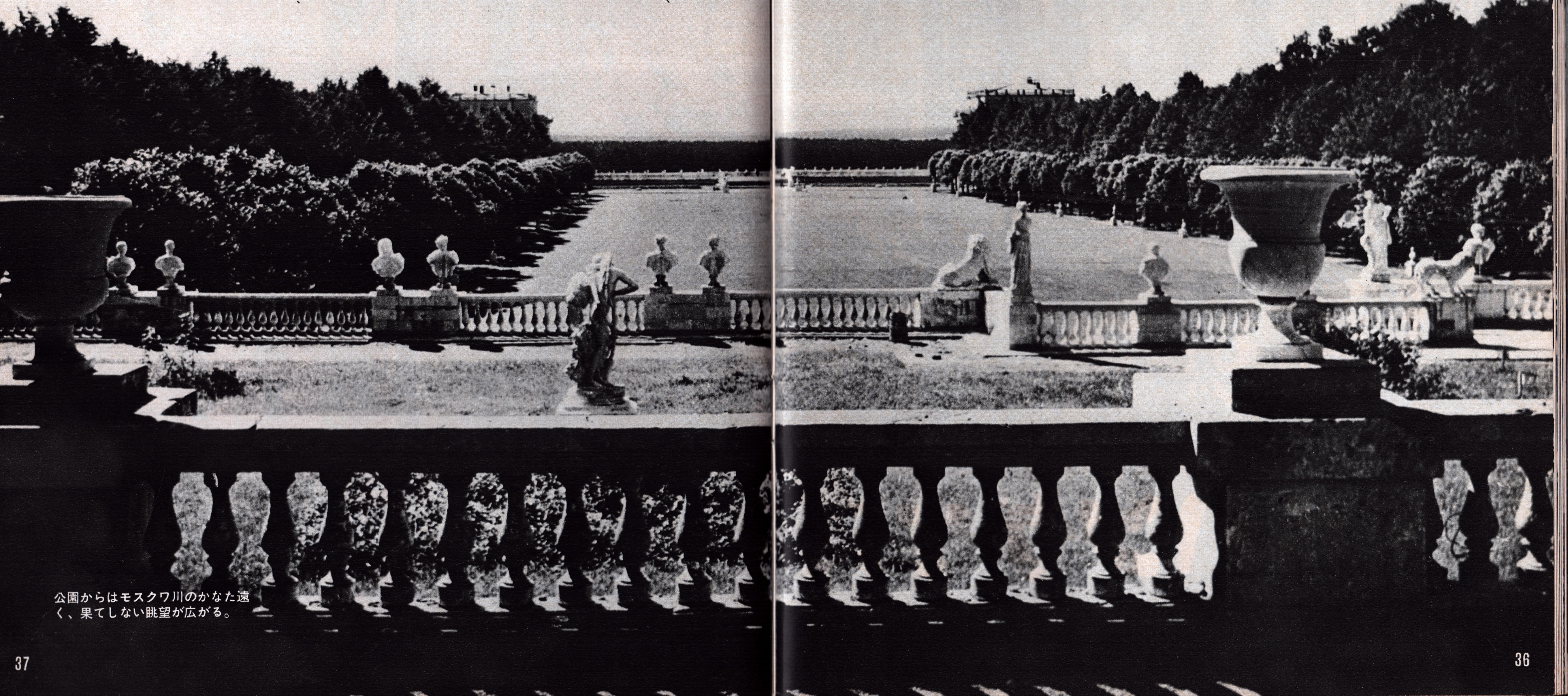
宮殿の内装もいろいろと工夫がこらしてあり、皇帝の間の格式ばった冷たさが美術室と音楽室のリリシズムに替わり、貴賓食堂の華美なオリエンタル・スタイルが古代の間の古典主義的ないかめしさに替わるというぐあいである。

アルハンゲリスコエの主な富は、そのコレクションにあり、博物館には17世紀—19世紀前半の西欧絵画の巨匠の作品が約五〇〇点陳列されている。フランス、イタリア、オランダの三つの部には、各流派の最も重要な傾向を示す絵画が一点ないし数点陳列してあり、ファン・ダイク、ティエポロ、ブシエらの巨匠の作品や古代の彫刻や陶器、ロシア、欧州、東洋の陶器のさまざまなコレクションが見られる。

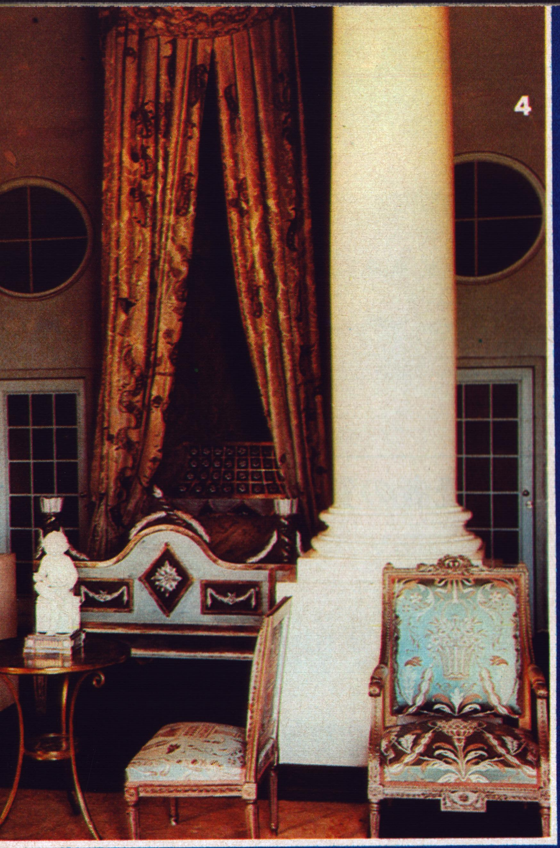
図書のコレクションもなかなか印象深い。アルハンゲリスコエの図書館は、ロシア最大の個人図書館の一つという評判にふさわしく、蔵書数一万六〇〇〇冊。このなかには15—16世紀の西欧の出版物がかなりある。蔵書の内容は当時の知識のほとんど全分野にわたっている。

劇場の建物も残っている。ここの劇団員は農奴のバレリーナ、歌手、楽手であった。ユスポフの劇場は、俳優の参加しない〝舞台背景のスペクタクル〟としても、ロシア全土に知られていた。クラブサン（ピアノに似た有鍵楽器）の演奏と照明の旋回につれて、当時の有名なイタリアの舞台美術家ピエトロ・ゴンザガの手になる舞台背景が次々と現われ、観客を酔わせた。ゴンザガはロシアや欧州でたくさんの背景を書いたが、いまはアルハンゲリスコエに残っているきりである。

……ここにあるのはすべてが古いものなので、修復の専門家がその原形を保存しようとつとめている。たとえば、窓掛けや家具の内張りのどんすに裂け目ができると、色、技巧、絵柄のまったく同じ新しいものと取り替えている。そのどんすは古い形式の特製の手織り機で織られる。ユスポフの遺産相続人たちがほかの邸に持ち去った絵画、彫刻、家具も、アルハンゲリスコエに戻された。宮殿そのものや邸宅付属の教会、公園の柱廊の修復には多大の労力と多額の国費が投じられた。それもみんな、ロシアの美術文化のすばらしい遺産を後代に伝えるためである。（アルハンゲリスコエは地下鉄駅アエロポルトからバスの便があり、月火を除き毎日11—17時開館）



公園からはモスクワ川のかなた遠く、果てしない眺望が広がる。





4　貴賓用寝室

5　2階の図書館



1　ニコライ・ユスポフ公の書斎

2　宮殿の音楽室

3　宮殿の長円の間。内装がすばらしい。





心身障害児の治療と養護

読者の質問に答える

読者の十和弘子さん（大阪府貝塚市）と斉藤和彦さん（埼玉県草加市）からソ連の心身障害児の治療と養護について質問がありました。以下はソ連教育学アカデミー欠陥学研究所長タチヤナ・ウラーソワ教授と本誌記者との一問一答。

ソ連では多くの施設が心身障害児の治療、養護の問題と取り組んでいるが、欠陥学研究所の仕事の基本方向は？

——その方向は大ざっぱにいって医学、心理学、神経生理学の三つに分けられよう。医学面の研究活動とは児童精神病学、神経病理学、眼科学、整形外科学の分野の実験、心理学面の研究とはある種の障害児、たとえば聴覚や視覚の障害児、精神薄弱児の心理学的研究であり、神経生理学面の活動とはさまざまなカテゴリーの児童の脳の機能の調査である。

どうして欠陥学研究所は教育学アカデミーに属しているのか？

——われわれは児童の医学、心理学研究調査とともに、教育学的研究調査もやっている。この教育学的研究調査は、障害児の教育、養護、労働訓練、発達の欠陥の矯正と調整のプロセス全体および教育のさいの児童のいろいろな困難を克服する措置の立案を、科学的に裏付けるのがねらいである。

研究所は特殊学校のカリキュラムや教師用の指導書、教科書や特別の設備さえつくっている。

ソ連には心身障害児用のどのような種類の学校があるか？

——全部で九つの型の学校がある。いずれもみんな（もちろん、いわゆる精神薄弱児の補助学校を除いて）、教育期間はまちまちだが、普通教育学校なみの分量の中等教育ないしは不完全（8年制）中等教育をやっている。補助学校では児童は初等教育を受けている。

児童は普通の課目のほかに、特殊な生産・労働教育も受ける。これは障害児が社会の重荷になってはならぬという配慮よりもむしろ、なにか専門を身につけさせ、それを実地に使えるようにすれば、社会にはるかにうまく適応できるようになり、自分の病気を苦にすることもあまりなくなるだろうと考えてのことだ。このようにして、障害児の社会的地位の回復がはかられている。

盲聾児、重言語障害児、肢体不自由児の学校は全世界にあるが、ソ連にはこのほかに弱視、難聴児の学校がある。われわれは難聴、弱視児を聾児または全盲児と同じクラスで学習させることに断じて反対である。だからわれわれは客観的理由でたとえば難聴者の特殊学校を開設できないところでは、たとえ生徒が2―3名でも別のクラスを設けている。こうして区別すれば、欠陥の矯正、調整を改善できると、われわれは考えている。

いま欠陥学研究所でやっている研究調査のうちで、とくに興味深いものは？

——われわれは聾児の聴覚を伸ばす方法を探求している。聾児は全然人間の言語を聞いたことがないから、特別に教えないと言語障害も加わる。われわれとしては話すだけでなく（これはすでにやっているが）、聞くことも教えたいと思っている。

はたして聞くことができるのか？

——聾児の聴覚については問題にはならないが、肝心なのはわれわれが伸ばそうとつとめている聴覚の残存機能である。いまその点で、ある程度の成功を収めたといえる。つまり学者は言語を聴きとる方法、聴き見る方法を開発して、7年間（4年間は就学前カリキュラムで、3年間は学校のカリキュラムで）先天性聾児グループを教えたあと、このグループを一般の普通学校の3年級に移した。成果は期待以上で、子どもたちは多くのことが聞こえるようになった（もちろん補聴器で）。子どもたちの言語は正常なものとは少しばかり違うが、さきのやり方が子どもたちの〝読唇力〟をつけるのに役立つのはもちろんだ。

特殊学校卒業生の就職問題はどう処理されているか？

——ソ連でもかなり最近まで（一部の外国ではいまも）こうした学校では、カゴ編み、ブラシ製造、マッサージなどといったごく単純な労働しか教えなかったが、かりにも中等教育を終えた者が、たとえ耳が聞こえず、目が見えないにしても、こうした単純な仕事に満足できるわけがないことは、明らかだ。

教育機器や数多くの教育・生産企業のおかげで、われわれの生徒たちは無線工学、電子工学関係などのさまざまな職業を身につけている。われわれは子どもに教えることができる新しい専門をたえず探している。

特殊学校の授業料はだれが払うか？

——治療、扶養、教育費は一切国が負担する。私が「扶養」と言ったのは、こうした学校の大半が寄宿学校だからである。それで食費も、衣服費も国が支払っている。

☆　☆　☆

人間と自然

世界中の草木が見られる ヤルタの植物園

カメラ　V・ブドービン



ニキツキー植物園の本部の建物

きれいに刈り込まれたウバメガシの一種



ニキツキー植物園は黒海に面したクリミア半島の南岸、ヤルタ市から数kmのところにある。植物園の面積は三〇〇ha。一八一二年に不毛の岩山の中に創設された。当時、数百kmも離れたウクライナから黒土が牛車でここへ運ばれ、草木を植えるために整地した場所にばらまかれた。それほど多くない野草のコレクション、数種類の観賞樹と果樹、温室、ぶどう畑――ニキツキー植物園の最初の財産はこれで全部だった。しかし、現在のニキツキー植物園には約三万本の高木や低木、二〇〇〇以上の種と亜種の植物がある。

クリミア南岸の亜熱帯性気候のおかげで、ここではもっと南方の地域――地中海沿岸、東アジア、南アメリカ、その他の植物を風土順化させることができる。

この植物園では、世界各国の植物を一団にまとめて配置するという方針をとっている。たとえばアジアの竹とアメリカのセコイアが隣り合い、レバノンスギが中国産のシュロと並んでいる……

ニキツキー植物園の入場者数は年間六〇万人。といっても、ここは単なる観光名所というわけではない。ニキツキー植物園は何よりもまず学術研究センターであり、14の部と実験室を持ち、広範な研究プログラムを実施している。研究員たちは遠方から取り寄せた植物の風土順化、耐寒性や環境適応能力のテスト、病害虫対策の効果的な方法の探究、新品種の開発などの仕事に従事している。

毎年、数千本の苗木と、種子を入れた数千個の小包がニキツキー植物園から国内や外国へ送り出される。植物園では世界の50の研究機関と種子や文献の交換をしている。



面積300haの園内の一角にある池

▶シダレヤナギ





ここに集められているのは、エキゾチックな花だけではない。普通のスイレンも見られる。



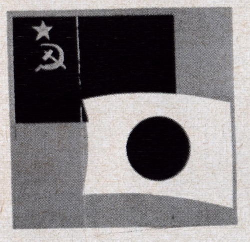
バラ園もある

▶ヒマラヤスギ





第２次大戦中、パルチザンの本拠となったオデッサの洞くつの入口に立つ社会主義協会代表団



社会主義協会代表団の訪ソ

鎌倉孝夫・埼玉大学経済学部助教授を団長とする社会主義協会代表団が、今年の４月29日から５月13日にわたってソ連を訪問した。代表団は10月社会主義革命の揺らんの地レニングラードでメーデー祭典に参加し、黒海の大港湾都市オデッサでは現地の労働者や勤労者の労働条件や生活条件、労働組合や党組織の活動をつぶさに見学した。モスクワでは一行は、労働運動における最近の現象を討議するソ日学術シンポジウムに参加した。

そこで本誌記者は、団長をはじめ、二人の団員の方々にソ連旅行の印象を聞いた。

友好的なソ連国民

高橋　収・社会党岩手県本部書記長

「たくさんの印象の中で特に日ソ両国民の間の協力と友好の問題に触れたいと思います。この問題は、私にとり非常に身近な問題です。というのは、昨年、10月社会主義革命60周年を記念して、名須川溢男さんの著書『ロシア革命と岩手』が出版されましたが、私はこの出版に直接携わったからです。

ソ連で私は、日本国民にたいする友好と尊敬の気持ちがここで十分根をおろしたことを再度確信しました。

たとえば、横浜市と姉妹都市となっているオデッサに私たちは初めて行ったわけですが、到着した次の日には文字通り家に居るのと同じ気分を味わいました。当地のソ日協会支部がわれわれ代表団のために開いてくれた集いが心に残っています。この集いで少女たちが踊ってくれました。その中の一人はキモノを着ていました。博物館の女性館員は、日本の芸術の分野で行った自分の研究について語ってくれました。オデッサで私たちは、オデッサ・横浜間の親善関係の発展になみなみならぬ貢献をした人として飛鳥田一雄氏の名をしばしば聞きました。

日本国民にたいする好意の感情が、ソ連の人々に元来備わっているプロレタリア国際主義の原則から出たものであることをとくに申し述べたいと思います」

新しい世界に強い感銘

吉田　強・社会党長崎総支部委員長

「勤労者連帯の本物の祭典ともいうべきレニングラードのメーデー行進にはいたく感激しました。有名な冬宮前にある壇上には私たちとともにたくさんの外国人が立っていました。行進に参加した人々は、反帝闘争における勤労者の連帯を強めるよう呼びかけたスローガンを掲げていました。私は故郷の長崎のメーデーの集会には何回も参加しましたが、レニングラード勤労者の約百万の行進を見て、労働者階級のゆるがぬ力を特に強く感じました。

私たちは、東京からモスクワに飛んで、インフレや失業がなく、工場がフル操業しており、物価が安定していて、勤労者の生活水準が不断に向上しているまったく新しい世界に出会いました。これは私たちに非常に強い印象を与えました。私たちの地球は大きいと同時に非常に小さい、そしてこの地球を新しい戦火から守るために私たちは一緒に闘わねばならないのだと考えました」



オデッサの市内見物をする一行



オデッサ・オペラ劇場の前で

自分の目で確かめた現実

鎌倉孝夫・団長

「私たちのソ連旅行は、大成功でした。私たちは、多くのことを以前よりもっと深くそしてしっかりと知り、理解しました。代表団員は、年齢、教育、習慣や趣味がみなそれぞれ違います。だからソ連の多くのことにたいしてそれぞれ違った理解の仕方をするのは当然です。しかし、この旅行と、ソ連の現実を知ったことにたいする深い満足感は、私たち全員に共通しています。

学術シンポジウムについて言えば、広い分野の問題についてソ連の学者の観点を知り、自分の意見を述べることができたという点でこのシンポジウムは非常に有益でした。

ソ連共産党とソ連政府によって実行されている政策がソ連国民の物質的、文化的水準の向上に向けられているということは、全団員の一致した最も重要な結論でした。私たちは、社会主義が最も広範な勤労者大衆の利益に合致する公正な社会制度であることを自分の目で確かめました。

私たちは、ソ連の人々が国際主義者であるだけでなく、愛国者でもあるということ、国民が自らの手でつくり出したものを誇りとし、その利益に奉仕している時にこそ初めて本当の愛国心がわき起こってくるものだということを理解しました」

問題点を探る

北の河川の水を南へ流す…

シベリア河川転流プロジェクト技師長　イーゴリ・ゲラルジ

川が逆流しはじめる――昔からこの表現は何か神秘的な状況のもとでしか起こりえない、実現不可能な、現実ばなれしたことを伝える時に使われてきた。にもかかわらず、いまやこの表現はまったく文字通りの意味を持っている――今後数十年間に一部のシベリアの河川の水は中央アジアやカザフスタンの乾燥地帯に達する。

南部乾燥地帯の経済発展を刺激するためのこの壮大な計画について、中央アジアとカザフスタンへシベリアの河川の水を移すプロジェクトの技師長イーゴリ・ゲラルジは次のように語る。



シベリア河川転流プロジェクト

長年の夢の実現へ

一〇〇年以上前にキエフの地理学者Y・デムチェンコがシベリアの河川の水を南部へ移すという構想を発表した時、多くの人の嘲笑を買った。シベリアや欧州部北方の河川の水の一部を南部に回すという第二の構想の誕生はソビエト時代になってから生まれた。いまではこの長年の構想の実現は、ソ連では国家的意義をおびている。「一九七六―一九八〇年度ソ連国民経済発展の基本方向」では「学術調査を実施し、これをもとに、北方とシベリアの河川の水の一部を中央アジア、カザフ共和国、ボルガ川流域に転流させる問題と関連したプロジェクトの研究を行う」と書かれている。

要するに、シベリアと欧州部北方の河川の水の一部を南に移すとか移さないとかいう問題では、もうない。転流問題は、いわば〝冷厳な〟必要性によってあらかじめ決定ずみのことなのである。

ソビエト中央アジアの諸共和国は、高収益農業を発展させるための一連の条件を持っている。輝く太陽、未開拓の土地とそこで働く用意のある幾百万の人々が存在している。ただ一つ、しかし決定的な要素が不足している。それは水だ。水がなければ、太陽は相変わらずこの土地をむだに暖め、砂漠は砂漠のままに終わるだろう。ソ連欧州部南部のステップも北方の水なしにはすまされない。

だからいまや問題は、地球の顔に人類史上このみぞうの手術をどのように行うかにある。河川の水を転流させた場合のあらゆる結果を予想し、これに関係する広大な地域のために最も支障のない、有益な案を選び出すことができるかどうかという問題である。

たとえば、膨大な水量の転送が地球の回転にどのような影響を与えるか？ソ連科学アカデミー地球物理学研究所では最新式の電子技術を用いて調査と複雑な計算を行った。その結果、流量の一部を南へ移しても地球の回転には危険ではないことが分かった。

アカデミーの諸施設だけでなく、カザフスタン、中央アジア、シベリアなど各地の関係省庁、研究所、設計研究所もこの計画の作成に参加している。

複雑な科学的、技術的問題の解決にあたってはいつもそうだが、この場合も専門家の意見が分かれた。ある者はこのような壮大な建設の実現性を疑い、ある者はこの建設から有害な、回復しがたい生態学的結果を予想し、またある者は天文学的な工事費に当惑した。

ツルガイ案

長年の調査の結果、最も有望と見られているのは〝ツルガイ案〟。この案ではシベリアのオビ、イルティシ両河の流量の6%を中央アジアとカザフスタンに移すことを予定している。

設計陣は西シベリアと北カザフスタンを分ける山脈内に自然にできた割れ目――ツルガイ盆地の利用を提案している。オビ川とイルティシ川の水を運ぶ二三〇〇kmの運河はこの盆地を通り、さらに進んで中央アジアのアムダリヤ川とシルダリヤ川の水と合流する。この路線だと、運河の水は取水口の水位よりも一〇〇m余り押し上げるだけでいい。これは8個所のポンプ・ステーションからなるカスケードで実現される。

シベリアの水は、南へ向かう途中で、まだ運河が完成する前からロシア連邦共和国と北カザフスタンの未墾地（一五〇万ha）を灌漑することになる。

年間25立方kmの水の転送がグローバルな結果を何ら引き起こさないことは明らかだが、地方的規模の厄介なことは起こらないだろうか？

たとえばオビ川の下流地方では現在年間二万tの漁獲量があるが、それが若干少なくなる。しかし魚類学者は、南部の新旧の水面や河川では魚獲量は急激に増えると試算した。一〇万tまで増えると予想している。そのほか灌漑される放牧地で営まれる畜産がもたらす三五〇〇tの食肉も結果に含めなければならない。

おそらく専門家の最も強い関心を引いているのは自然環境の保全、北方の動植物界、気候に及ぼす否定的結果についてのおそれだろう。ツルガイ案はこれらの心配を完全に打ち消した。モスクワ大学の学者たちは、オビ川流域における気温の変化が最小限にとどまることを明らかにした。数学者の計算では、シベリアの河川から北極海へ流入する淡水の減少は一万年（！）後に現れる。それとてもわずかな量である。

しかし建設は一本の幹線運河の建設だけにとどまらない。さらにシベリアの水を灌漑される地帯へ運ぶ配水〝動脈〟も必要だ。その総延長は幹線運河の延長――二〇〇〇kmとほぼ同じ位になるが、水の消費量は1/4だけ少なく、1秒間に七五〇立方mである。

さらに数字を少し挙げよう。三六億立方mの土砂を運び、一一〇〇万立方mのコンクリートを打設し、一〇万tの金属構造物を組み立てねばならない。

ペチョラ案

最初に私はシベリアの河川ばかりでなく、欧州部北方の河川もその流量の一部を南へ移すことを述べた。これらの河川の水で、ボルガ川とカスピ海の水位を安定させることが予定されている。ここで認めなければならないのは、〝シベリア案〟（いろいろな案があった）は〝欧州部北方案〟よりも論争や議論を呼び起こさなかったことである。これは当然だ。ソ連の欧州部にとって河川の転流は人口密集地帯の生活への干渉を意味する。だから案は次々に否定され、二つの案だけが生き残っている。

そのうちの一つの案によると、ペチョラ川から水を取ることが予定されている。エネルギー問題的性質を持ったこの計画の長所は、北方の水がボルガ川にある現在の一連の水力発電所をいっそう生産的に稼動させることにある。

しかし、このプロジェクトには重大な欠陥もある。たとえば河川の水を移すための第1期工事分では三三万haの土地を水没させねばならない。そのうちの五〇〇〇haは農地である。昔から農業に従事していたコミ自治共和国の一万六〇〇〇人の住民が他の地区へ移転しなければならないだろう。

北方のタイガ（針葉樹林帯）も被害を被ることになる。コミ自治共和国だけで、二六万haの森林を伐採しなければならない。水利施設工事費にこの地方の林業への投資――四億二〇〇〇万ルーブルが追加になる。これらすべての事情が〝ペチョラ案〟の合目的性を疑問視させている。

〝北方案〟の第2案

第2の案は、年間二五―二七立方kmの同じ水量を約束するが、自然環境にたいする影響はずっと少ない。この案では北西部の河川や湖から水を取ることが予定されている。すなわちオネガ湖から15立方km、カレリアの諸湖から3立方km、オネガ川上流から5立方km、スホナ川から4立方kmの水を取る。この案ならば、第1段階の、オネガ川から5立方kmの水を移す問題を――すでに一九八五年までに解決することができる。

すでに述べたように、欧州部北方とシベリアの河川の水を南部へ移す課題は、何十年にもわたる事業である。この場合は、よく言うように、念には念を入れよ、である。いいかげんなプロジェクトが実行されたりすれば、広大な地域の生態学的均衡に重大な影響を与えることになる。だが環境には決して損害を与えてはならない。

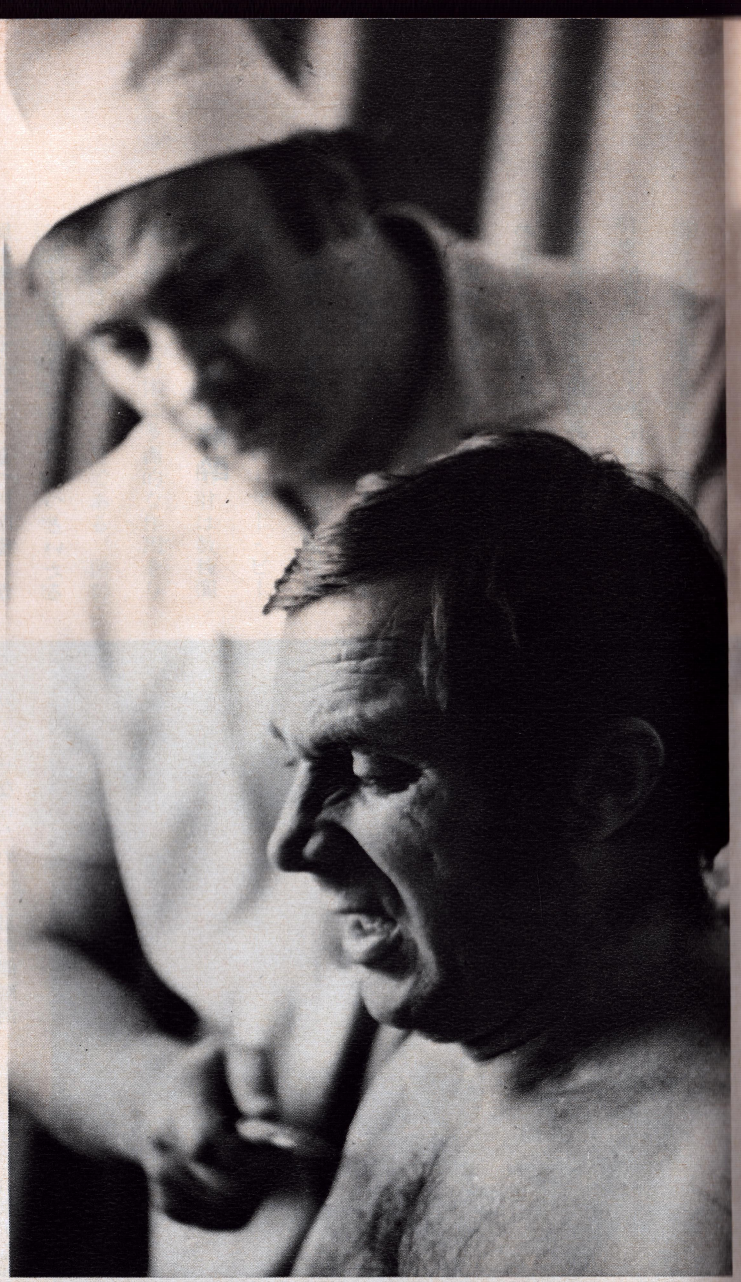
古くて新しいハリ療法

中央反射療法研究所副所長　ステパン・ゾリニコフ　カメラ　V・ボガティリョフ

ハリ療法は現在知られている治療手段のうちで最古のものの一つ。その科学的研究と発展のためにソ連では中央反射療法研究所（モスクワ）が設立されている。ソ連でハリ療法がどのように行われているか、同研究所の副所長ステパン・ゾリニコフ医学博士に語ってもらった。



レニングラード医師研修所のハリ療法研究グループでは、顔のツボに刺したハリが中枢神経系の機能状態に与える影響を電気脳写法で調べている。



薬づけ医療からの出口

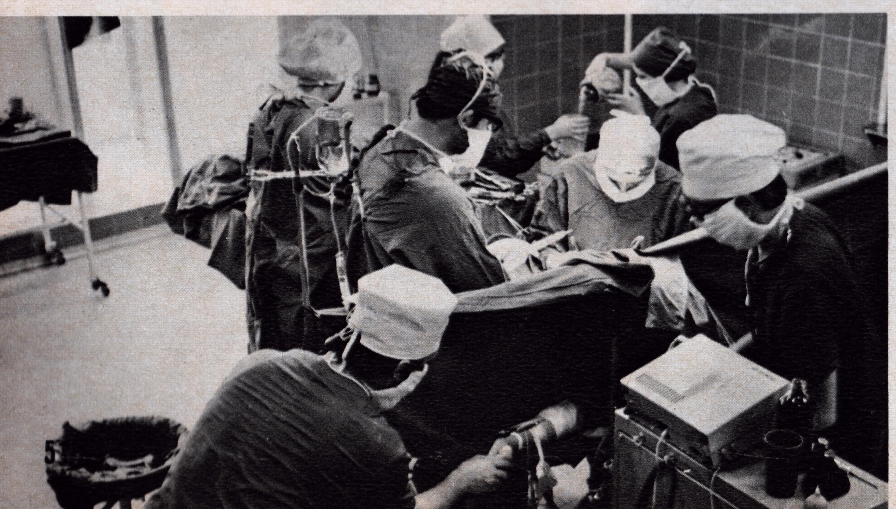
数百年にわたって学者たちはハリ療をめぐる神秘的なベールを取り除き、ハリと生体の相互連関とハリが生体に及ぼす作用の唯物論的説明を見出そうと試みてきた。

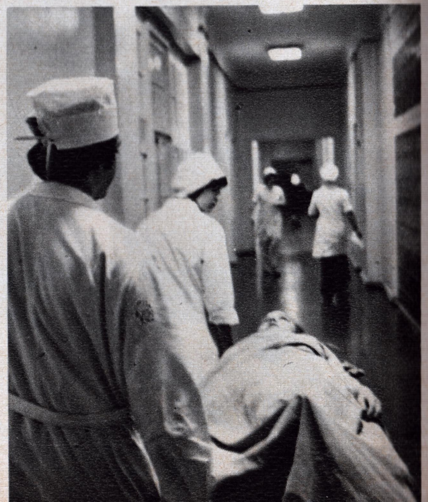
今世紀五〇年代の初めに、ソ連や諸外国の医師の多くは、ハリ療法（または別の言い方をすれば刺鍼（ししん）法）の治療効果の基礎になっているのは生体の応答・反射反応であるという点で意見が一致した。人体にはいわゆるツボが約一〇〇カ所ある。そこをハリで刺激したり、最近では電流の弱い衝撃で、はてはレーザー光線で刺激したりして、医師は多くの場合、内臓の

▶ハリで患者を治療する臨床・実験外科学研究所のビクトル・ツィブリャク医学博士候補。頭痛、三叉神経痛、脊髄神経根炎などのハリによる鎮痛は、大昔から伝わる効果的な方法。

下右　ハリ麻酔を受けて手術室へ向かう。（臨床・実験外科学研究所で）

下左　手術中全身麻酔の一部をハリ麻酔で代行させている（臨床・実験外科学研究所）。









▲モスクワの中央反射療法研究所ではニーナ・オシポワ主任研究員（写真）が中心になって気管支ぜんそく、鼻炎、神経性皮疹をハリ療法で治療する研究をして、成果をあげている。

◀ソ連保健省付属臨床・実験外科学研究所（モスクワ）の術後管理部では手術後の痛みを取り除くためハリ麻酔が用いられている。



▶電気ハリ療法の前の器械調整（中央反射療法研究所で）。電気ハリ器はツボを発見して、ツボに電気刺激を与える。無痛、負荷の調節範囲が広い、ツボの発見が簡単で正確、衛生的、ハリの折れる心配がない、などの長所が多い。

活動を活気づける。つまり、内臓の活動を正常にするわけだ。たとえばアレルギーは現在よく見られる病気だが、専門家の意見によると、地球人口のおよそ15％の人がアレルギー体質になっている。その原因は、強力な薬剤、とくに抗生物質の使用が増えていることにある。だからいまでは薬物療法をしてはいけない人が沢山いる。おそらく反射療法はそういう"薬づけ医療"から脱け出す最良の方法の一つといえるだろう。

副作用のない麻酔

刺鍼法は、現代の麻酔学でも正当な地位を占めている。ハリの主な長所は、手術に必要な麻酔剤の使用を最小限にし、副作用がないことにある。薬を使わないハリ麻酔は、現代麻酔学におけるきわめて将来性のある方向である。

一九七三年にソ連保健省付属全ソ臨床・実験外科学研究所（モスクワ）の学者グループは、手術時と手術後の刺鍼術の影響を研究した。現在では腹腔と胸腔の臓器を手術する時に、従来の麻酔法と組み合わせて、ツボに刺したハリを通じて電気刺激を与える方法が用いられている。このような麻酔法では薬の必要量が著しく減り、呼吸と血液循環が最適水準に維持される。患者にはただ、手術がどのように行われるかを分からせないために少量の催眠剤を与える。

全ソ臨床・実験外科学研究所の専門家は作用の強い薬剤――モルヒネ、プロメドル、パントポンなどの使用をハリによって大幅に減らすことができた。

喫煙癖の"治療"

耳殻は、たとえばヘビー・スモーカーをハリで治療するさいの標的である。

中央反射療法研究所の相談・臨床部では耳殻のツボに刺鍼術を用いて喫煙という悪い習慣を取り除いている。5年から50年までの喫煙歴を持つ患者が医師の観察のもとに置かれた。その結果、5回の施術で70人のうち50人が完全に喫煙をやめ、残りの人もタバコの消費量が1日1―2本に減った。

カザフ国立大学の学者たちはビクトル・イニューシン教授の指導のもとでレーザー反射療法を開発した。この方法では太陽ネオン・レーザー光線が栄養性潰瘍、外傷性多発関節炎、婦人病を治療する。小出力のレーザー・ビームがツボに照射される。照射は数秒間続くが、病気の体に多面的な作用を与えるにはこれだけで十分である。医師にとって魅力的なのは、レーザー・ビームが完全に衛生的なこと、患者にほんの少しの痛覚も呼び起こさないことである。

ソ連の技師たちはハリ療法専門家と協力して、数種類の電気ハリ器を設計した。これらの器械はまずツボを見付け、次に電気刺激によってそのツボに働きかける。処置は事実上無痛のうちに行われる。電気ハリは衛生的で、しかもハリの折れる心配がまったくない。



ハリ療法の発展と普及につれてハリ麻酔医、ハリ小児科医、ハリ婦人科医など、ハリ療法医の専門化は自然の現象。ハリ療法を学ぶために、ソ連各地から専門家が定期的に中央医師研修所（モスクワ）へやってくる。

国内問題

オリンピックまであと2年

―モスクワが抱える問題点―

『今日のソ連邦』評論員
ミハイル・エフィーモフ



大会組織者の苦労

一九八〇年7月19日、モスクワで第22回オリンピック大会が開幕する。あともまだ2年といいたいところだが、もうあと2年しかないと言った方がよいようだ。光陰矢の如し。とくにいまモスクワ大会の組織の仕事にたずさわっている人たちにとっては矢のように月日が流れている。

日本の読者の多くは、夏冬2回日本でのオリンピックを経験されているので、どんなにオリンピックの当日が待ち遠しいものか、よく分かっておられるはずだ。私はしあわせにも東京64、札幌72とモントリオール76の3回のオリンピックを見る機会をえたが、時、ふん囲気、気質、民族的伝統こそ違え、いずれもスポーツ、若さ、平和をたたえるたのしい大きな祭典だった。

周知のとおり、オリンピック大会の組織と実施は、とてもむずかしい仕事で、時にはいろんなごたごたが起こる。大会を開くかどうかで、開催日ぎりぎりまでもめたことさえあった。

こんどの聖火は規定どおり、古代オリンピア山で点火され、ブルガリア、ルーマニアを経て、はじめて社会主義国へ入ることになる。しかしそう決まったことで組織者側は〝無罪放免〟ということにはならず、そのあとの苦労がたいへんだ。しかしソ連の組織者の場合、これまでの大会の組織者側が頭を痛めてきた多くの問題から放免されていると言い切れる。

モスクワでもオリンピックに備えて、たとえば東京の青山通りに劣らない道幅の新しい大通りが〝切り開かれて〟いる。しかし大体に私有というもの、とくに土地の私有がないソ連では、都市の改装の問題は、日本などよりもずっと解決が簡単だ。だからといって、多くの老朽アパートが撤去されたため、宿無しが出るなどということは絶対ない。どの世帯にも、少なくともこれまでのところよりも良い条件の住居が提供される。各人の住居の権利は憲法に定められ、保障されている。

モントリオール・オリンピックのときは開会式が未完成のスタジアムで行われ、オリンピック村の近くの地下鉄駅のエスカレータはすえ付けが間に合わず、巨大な翼手竜の骨格を分解したかのような感じだった。私はそれをこの目で見たが、一九八〇年7月19日が、そんなぶざまなことになるとは思えない。はっきり思い出すが、モントリオール・オリンピックのときカナダの各紙は、スポーツ施設の施工を請け負った業者たちが際限なく値をつり上げ、すべてがあわや御破算になろうとしている、とのパニック的な記事を流したものだ。

モスクワではこんなことはありえない。オリンピックに必要なものは全部モスクワ市の発展マスタープランに入れられ、第10次5ヵ年計画（一九七六―一九八〇）に組み入れられた。だから、かりに第22回オリンピックがほかの国で開催されることになっても、やはりモスクワはオリンピックに必要なものをすっかり備えることになる。オリンピック村しかり、ホテルしかり、プレスセンターしかり（オリンピック後ここへノーボスチ通信社が移る）である。

最後にオリンピック施設の建設工事のふん囲気そのものを知ってもらうために、さる4月22日のレーニン生誕一〇八周年記念の伝統的な全ソ土曜労働のことを書いておこう。この日、オリンピック施設の工事担当者が自分の工事場で無料の労働奉仕をしただけでなく、ソ連スポーツ界の〝全スター〟――ナショナル・チームのメンバーを含めた何千というモスクワ市民も無料で工事を手伝った。

施設の将来の利用問題

スポーツ施設を将来どう利用するかという問題は、これまでオリンピックを開いてきた若干の都市にとっては、重要問題であったが、モスクワではだれも別に気にかけてはいない。モントリオール大会のとき現地の記者たちは心から嘆いてこう言ったものだ――オリンピックのためとあってわざわざ作った最新施設も、やがてはかつての華々しいスポーツの祭典の遺跡として捨て置かれることになるかと思うと残念だと。

ソ連では体育は広く普及しており、だれでもやれるものとなっている。現在ソ連のスポーツ人口は五〇〇〇万人以上。だがオリンピックの年までに五五〇〇万―五七〇〇万人に引き上げるという新しい目標が立てられた。それが実現すると、モスクワ市民の約$\frac{1}{5}$がスポーツをやることになり、スタジアムや体育ホールに閑古鳥が鳴くようなことはなくなろう。

施設工事の問題

ではオリンピック大会の組織者たちの苦労のタネは何か？ それは少なくない。まず第一に建設工事を予定表どおりきちんと進めることだ。組織委員会もあらかじめ注意したとおり、豪華さとか、さまざまな建築効果とかで、人のど胆を抜くつもりはない。モスクワのオリンピック施設の建設の原則は、経済的かつ合理的ということだ。しかしそれでも現存施設はかなり大々的に改装工事が行われているし、新しい施設もどんどん建てられている。工事にたずさわっている組織は多く、これらの組織の仕事をうまくフル回転させ、足並みをそろわせることが、組織委員会の使命である。

客の受け入れ問題

モスクワにくるオリンピック客の受け入れ、ホテルの割り当て、サービスと関連したたくさんの具体的問題も、苦労のタネの一つだ。ざっと計算しても、モスクワの〝空の門〟からだけでも一日約六万人がやってくる。いまその客を受け入れるホテルや青年用バンガローなどが新設されている。またサービス業務全体もオリンピックに向けて鋭意準備中であり、何とかお客からほめ言葉を得たいと思っているのだが、残念ながらいま少しというところだ。

一九七二年のミュンヘン大会以後、安全を守る問題がとくに重視されている。モントリオールのときのように完全武装した兵隊が要所要所に立たなくても、選手、役員や客が絶対に平穏な気持ちでいられることは請け合える。

モスクワ大会の敵の行動

ほかにもいろいろと頭の痛い問題がある。たとえばモスクワ・オリンピックの公然、隠然の敵の行動だ。その敵を大きく二つに分けると、一つは一九八〇年7月19日を「スポーツ世界の終末」の日だと唱えている連中だ。この連中の言い分を聞いていると、哀れな赤ずきんちゃんが灰色のオオカミに食われる童話が頭に浮かんでくる。こんどに限りその犠牲になるのは、哀れな道に迷ったオリンピックということになる。

はっきり請け合っておくが、モスクワではだれもオリンピックの白い旗を赤色に塗り替えようとは思っていない。まただれもモスクワ大会を思想攻勢の手段に使おうなどとは思っていない。それどころか、ソ連は自分の理想に共通するところの多いオリンピズムの理念を非常に尊重している。一九六二年の国際オリンピック委員会第59回総会（モスクワ）の開会式であいさつに立ったL・ブレジネフは次のように述べた。

「国際オリンピック委員会が採決したオリンピック憲章には、諸国民間の信頼と善意をつくり、もっと良くて、もっと平穏な世界をつくるのを促進しようという全世界のスポーツマンの願望が十分にはっきりと表明されている。これらのけだかい目的は、わが国のスポーツマンや全市民にとくに身近なものである」

われわれは第22回オリンピック大会が、オリンピック運動を大きく伸ばすものとなることを信じて疑わない。

もう一つの敵は、自分の覇権主義的野望を遂げるために、オリンピック参加選手の隊列を分裂させ、まず発展途上諸国の選手にいかがわしい〝ボイコット〟戦術をおしつけて、オリンピックの隊列から離脱させようとしている連中である。強調しておきたいが、ソ連は一度もスポーツと政治を混同したことはない。ソ連はつねに〝ピンポン外交〟とは無縁だった。

……一九七六年8月1日の夜ふけの闇に沈んだオリンピック・スタジアムの上に「さようなら、モントリオール！ またモスクワで会いましょう！」の電光文字が浮かんだときのわれわれソ連代表団の大きな感動は、決してわれわれの胸から消えない。あと2年。もうすぐその日がくる。

トピックス

ヘリコプタで運ばれる部落

東シベリア、クラスノヤルスク地方の南部サヤノゴルスク市で、コンテナ住宅と集落全体をそっくり製造する組立式アルミ建物コンビナートの建設が始まった。この企業は近くに出来るシベリア最大のアルミ工場と歩調を合わせて建設されるもので、中心工場の面積だけでも16万3000haになる。

このコンビナートで組み立てられるコンテナ住宅には衛生・技術設備のほか、家具もセットされる。同型の建物にディーゼル発電所と必要な部品、浄化設備が配置される。最高 3.5 t と比較的軽量なので、設置場所までヘリコプタで輸送できる。こういうコンテナ住宅3―4棟で辺地の地質調査員や探鉱試掘作業員用の部落が作られる。

家族を伴った長期生活用のもっと大きな部落の場合は、2階建ての軽量鉄骨パネル住宅で建設される。パネルはアルミ製で、フォームプラスチック製の断熱材が張ってある。このタイプの建物には1室型から3室型までさまざまなフラットが予定されている。コンビナートでは上下水道管に至るまで部落に必要な設備一切をセットにして製造する。コンビナートの年産能力は約40万平方mの予定。

第5回ソ日映画シンポジウム

マリーナ・ルイクリナ







▲日本代表団の団長で、自作の『幸福の黄色いハンカチ』を持って参加した山田洋次監督

▼映画『遠い一本の道』の監督・主演の左　幸子さん(左)と『ねむの木の詩(うた)』がきこえる』の監督・主演の宮城まり子さん

◀発言するアレクサンドル・カラガノフ・ソ連映画人同盟書記

5月15日から22日までモスクワの中央映画会館で、両国の重立った映画人が参加して第5回ソ日映画シンポジウムが行われた。

ソ連側はソ連映画人同盟の二人の書記セルゲイ・ゲラシモフ監督と評論家のアレクサンドル・カラガノフ、監督のワシリー・オルディンスキー、タチヤナ・リオズノワ、アレクサンドル・ミッタ、ニコライ・グベンコ、脚本家のアレクサンドル・ゲリマンその他が参加。

日本側は脚本家としても知られる山田洋次、神山征二郎両監督、評論家でフイルムライブラリー協議会事務局長の清水　晶氏、日本映画復興会議事務局長の山田和夫氏、日本映画撮影監督協会事務局長の町田寛志氏、俳優で監督の宮城まり子氏と左　幸子氏、評論家の瓜生忠夫氏と大野耕世氏らが参加した。

このシンポジウムではソ日両国の映画の上映と上映作品についての討議、現代映画芸術が当面している問題についての自由な意見交換が行われた。

マリーナ・ルイクリナ本誌記者がセルゲイ・ゲラシモフ、山田洋次両監督にインタビューした。

――ソ日映画シンポジウムの主な意義はどこにあると思うか?

S・ゲラシモフ「このようなシンポジウムの第一の価値は、誠実な仕事上の話し合いを通じて、両国映画人が関心を持つ切実な問題や個々の映画作品について意見を交換できる点にある。

日本映画、もちろん、その中の優秀な作品は、われわれに非常に近い。優れた日本映画は常に民主的で、良心的だ。そしてこの民主的な思想は、日本の映画人が通常見せる高度の専門技術によって強められ、大きな社会的、芸術的な力になっている」

――このシンポジウムで触れられた最も重要な問題は何か?

S・ゲラシモフ「基本的な問題になったのは、〃映画と観客〃である。全発言者がこの問題について関心をもって語った。映画館が観客を失っているという事実は、熟考を迫るだけでなく、この事態を改善する方法の探求も要求している」

山田洋次監督「映画は、最も広範な観衆によって理解されなければならない種類の芸術である。同時にそれぞれの作品は、作者の内的世界を伝える完全に個性的な顔立ちを持たなければならない。私は作品の個性と大衆性の合体にこそ映画芸術の権威を高める方法の一つがあると見ている」

シンポジウムの参加者たちは、互いの国の映画に大きな関心を示した。日本の映画人がソ連映画に与えた評価は、彼らが専門技術だけでなく、映画の作者たちの内面的な態度まで本当に理解していることを示している。

ソ連の映画人は、上映された日本映画の中から山田洋次監督の作品『幸福の黄色いハンカチ』を一致して評価した。山田監督はこの作品の中で、観客との非常に密接で、うちとけた触れ合いの形式を見つけ出すことに成功した。この映画では単純なプロットが作者の思想の深さとしっかり結びついている。S・ゲラシモフはこの映画について、「ヒューマンな、芸術性の高い作品だ」と評している。

と同時に、ソ連の映画人は、日本の他の一連の作品が、高い専門技術とともに、あからさまな商業主義的傾向を持っており、それが作品の芸術的価値をそこなっている点を指摘しないわけにはいかなかった。

(カメラ　G・グヌエフ)



開会のあいさつを述べるセルゲイ・ゲラシモフ。その左は山田和夫氏。

olympics-80

近代5種競技のつわものたち

レオニード・ゴリャノフ

5種競技の歴史

古代ギリシャのころからすでに多種競技は主な競技種目の一つで、一九二m、走り幅跳び、円盤投げ、やり投げ、レスリングの5種目から成っていた。オリンピックが復活したとき、5種競技も問題になったが、現代生活の要求に合致するよう、競技内容を変えるべきだという意見が多くの著名なスポーツ関係者から出た。

こうして出現し、生きる権利を与えられたのが"将校5種"(初め近代5種はこう呼ばれた)で、馬術、フェンシング(エペ)、25mのピストル(標的はシルエット)、三〇〇m自由形水泳、四〇〇〇mのクロス・カントリーから成り、出場選手は軍人に限られた。

近代5種が初めて登場したのは、一九一二年のストックホルム・オリンピックである。そのご一九四八年、第14回オリンピック大会のとき国際近代5種連合が創立されたあと、近代5種には軍人に限らずだれでも出場できるようになった。これも、"将校5種"が"近代5種"と名を変えるようになった理由の一つである。競技の実施規則や競技内容はまったく元のままで、選手の成績の判定や順位は特別の採点表にもとづいて行われている。

ソ連選手の登場

近代5種はソ連の最も若いスポーツ種目の一つで、一九四七年にようやく芽を出したが、その後大きく発展し始めるようになったのは、一九五二年からである。ソ連のオリンピック選手にとって記念すべき一九五二年の第15回ヘルシンキ・オリンピック大会で、ソ連の近代5種選手は団体総合で5位、個人で4位に入った。当時はやくも外国の多くの専門家は、これを幸先きのよいデビューと評価した。

4年後の第16回メルボルン・オリンピック大会でソ連の5種競技選手(イーゴリ・ノビコフ、イワン・デリューギン、アレクサンドル・タラーソフ)は団体で優勝、さらに東京(一九六四年)、ミュンヘン(一九七二年)でも団体優勝したが、ローマ(一九六〇年)とメキシコ(一九六八年)ではハンガリーに次いで団体2位となった。個人得点で最初に最高の成績をあげたのは、東京大会で銀メダルを獲得したイーゴリ・ノビコフである。メキシコ、ミュンヘンの大会で銅メダルを獲得したパーベル・レドネフは、モントリオール大会で2位に入った。

モスクワ・オリンピックでの5種競技は大会の見ものとなろう。世界の5種競技選手は、モスクワ大会にひじょうに大きな関心を寄せている。はやくもイギリス、スウェーデン、ハンガリー、ポーランド、米国、イタリア、西ドイツ、チェコスロバキア、ルーマニア、ブルガリア、カナダのチームがこぞってモスクワにくることが確認されている。5種競技には合計40ヵ国以上の選手が出場する見込みである。

モスクワ大会に賭ける

――女子陸上のマリーナ・シドロワに聞く

イーゴリ・オブラスツォフ



女子陸上 200m、400mで好調なマリーナ・シドロワ

「モスクワ・オリンピックの四〇〇mで入賞するには、トラックを50秒以内、もしかすると、49秒以内で一周しなければならない。私はそれをめざしている」と、二〇〇m、四〇〇m競走のソ連チャンピオン、全ソ記録保持者のマリーナ・シドロワ(28歳)はいう。

今年に入ってからシドロワはまだ一度も敗れておらず、まずソ連チャンピオン(室内)となり、ついで欧州選手権大会で四〇〇mの全ソ最高52・42秒を出して優勝、さらに欧米対抗競技でも優勝した。

髪につけたカミツレの花

シドロワは10年あまりも前から活躍している選手だが、国際陸上競技界で頭角をあらわしたのはごく最近のことだ。私が彼女のデビュー当時を思い出しながら「きみはいつも髪にカミツレの花をつけて出場しているが、お守りなの?」とたずねると、「私が初めて競技に出た少女のころ、最初のコーチだった母が、私の髪にカミツレの花を留めてくれてから、ずっとこの造花のカミツレとは別れられなくなっている」という答えが返ってきた。「母はかつては短距離走者で、いまはレニングラードで若い選手を養成しています」

シドロワは過去をふり返って「二〇〇、四〇〇mの選手になる前に水泳、新体操、体操競技をやった。しかし遺伝のせいか、16歳でジュニア女子80m障害のソ連チャンピオンになった」と言う。

ところで、オリンピックの成績はどうだったか、ときくと、マリーナは表情を暗くした。「ミュンヘン・オリンピックに出場して、四〇〇mリレーで5位。お恥ずかしい成績だった。個人競技の成績はもっとだめだった。とても神経質になっており隣コースの"スター選手"を見てすっかり上がってしまった。モントリオール・オリンピックでの成績はもっと悪かった。モントリオール大会前の二〇〇m競技では全ソ記録の22・72秒を出し、その一年前の一〇〇m、二〇〇m競走の世界選手権大会では優勝するというぐあいに、万事順調だったのに、モントリオールに着いてまもなく、ひざを痛めて、不本意な成績に終わった」

五輪の不振を乗り越えて

シドロワはそんな危機をどう乗り越えたかについては語らなかった。そこでコーチのゾーヤ・ペトロフに聞いた。コーチとシドロワは思い切った方法、つまりそれまで一度も走らなかった四〇〇mを走ることにした。

彼女は昨年夏のソ連選手権大会で再デビューし、51・18秒の全ソ新記録で優勝して、センセーションを呼んだ。まもなく、シドロワは自己記録を50・98秒に更新し、一九七七年の世界第5位になった。今年に入ってからの成績は前に述べた。

今度こそ3度目の正直を

「2年後のモスクワ・オリンピックにたいする抱負は?」と聞くと、四〇〇mを50—49秒で走ることだと言い、さらにこう付け加えた。「今度のオリンピックでは過去の大会で失敗した分を取りもどす意気込みでがんばるつもり。メダルをとるには、ポーランドのイレナ・シェビンスカ選手をはじめ、マリタ・コフらのドイツ民主共和国の選手たちにも勝たねばならない。オリンピックの開幕までに50秒の心理的障壁を恐れない新人選手たちが現れるのを期待したいが、そのためには、練習量をぐんと増やし、できるだけ頻繁に大きな競技会に出ることが必要です」

スポーツ

サーブルの金メダルへの道

タチヤナ・コルチャコワ
カメラ　D・ドンスコイ



国際フェンシング連盟のピエール・フェリ会長から金メダルを受けるビクトル・クロボプスコフ（モントリオール・オリンピックで）



少年たちにけいこをつけるオリンピック・チャンピオン

マリア・クロボプスコワは朝、工場へ行くため、急いで家を出てきた。家ではラジオのスポーツ・ニュースを聴いている時間がなかった。勤務先の織物工場の門のところに大きな横幕がかかっているのを見て、驚いた。きょうはいったい何の祝日だったかしら？しかし、もっと近づいて、幕に書かれていることが分かったとき、彼女はうれしさのあまり泣き出した。赤い布地には大きな字で「オリンピック・チャンピオンのお母さん、おめでとう！」と書いてあったのだ。モントリオール・オリンピックのヒーローの一人、フェンシング・サーブル個人で優勝したビクトル・クロボプスコフの母親が働いていることを、工場ではみんなが自慢にしていた…

マリア・クロボプスコワは、13歳の息子ビクトルがある日、家へ駆けこんでくるなり、「ママ、ぼく今度からフェンシングをするんだ！」と叫んだときのことを思い出した。

毎日、夕方になると、ビクトルは少年スポーツ学校へ出かけ、暗くなってから戻ってきた。その後、長い時間、学校の勉強に取り組んでいた。そして体育大学に進学し、今では卒業したら、大学院に進むと言っていることも母親は思い出していた。

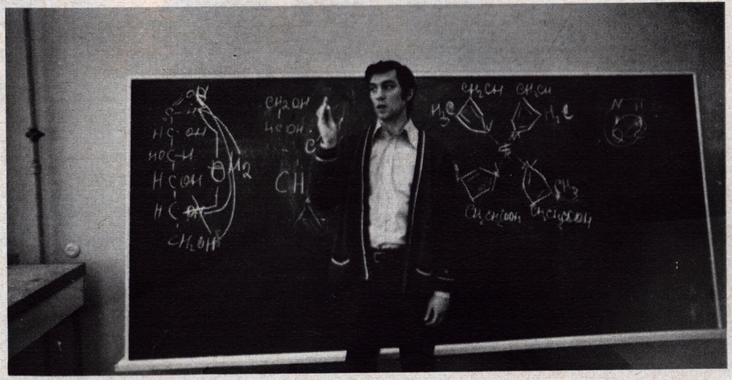
……最初のうち、ビクトル・クロボプスコフは有能だが、成績にむらがある選手と見られていた。20歳で初めて、本来ならもっと早くなれたソ連ジュニア・チャンピオンの座についた。

その一九六八年に、ビクトルの生活に決定的役割をはたす出会いが訪れた。ビクトルは世界選手権を前にしたシニア・チームの合宿練習へ〝スパーリング〟の相手として連れて行かれた。当時、ソ連代表選手の座をめざして、マルク・ラキタ、ビクトル・シジャク、ウラジーミル・ナズルイモフ、エドアルド・ビノクーロフなど世界選手権やオリンピックで一度ならず金メダルを獲得したベテラン選手たちがしのぎを削っていた。ナショナル・チームのリーダーと目されていたラキタ選手のコーチが有名なダビド・ティシレルだった。

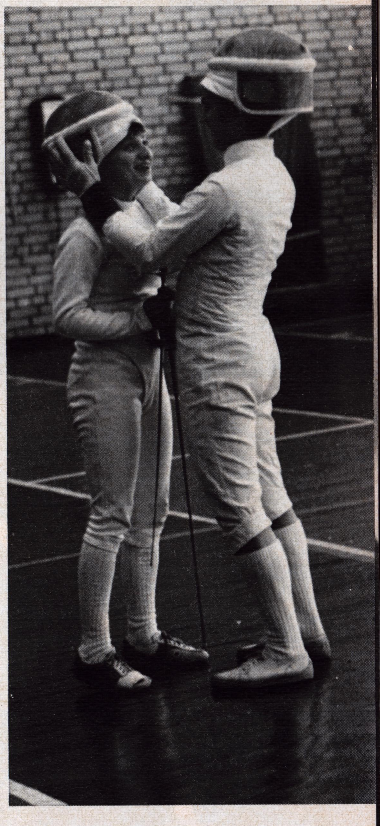
そのティシレル・コーチが、若いクロボプスコフの練習を少し見てやってくれと頼まれた。ティシレルはビクトルに基本的な型をやらせたあと、全然なっていないと極言した。しかし、これは教育的な配慮から出た言葉だった。ティシレルはビクトルの素質を認め、その名前を胸に刻んだ。

二人が再会したのは半年後で、ビクトルがロンドンのジュニア世界選手権で金メダルを獲得したあとだった。ティシレルはビクトルを弟子に加えた。

それまでのビクトルにはフェンシン



体育大学の授業で



妻のターニャもフェンシングの選手

グの試合というのは剣と根性の勝負だったが、今度は一つ一つの試合を構想の勝負と考えるようになった。ティシレルは闘いを創造し、かろうじて認められるような徴候から相手の次の行動を察知し、瞬間的に正しい解決法を見つけることを教えた。

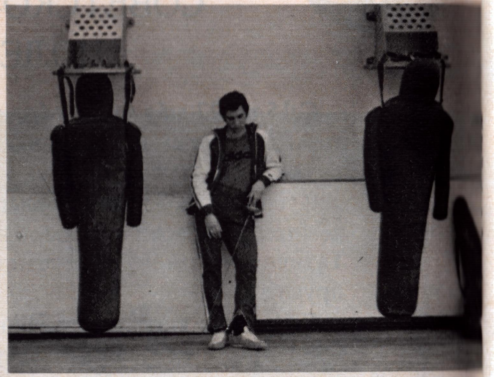
最初のうち、ビクトルはティシレルの第一の弟子ラキタの相手役に甘んじなければならなかった。初めはラキタもビクトルを簡単に料理できたが、やがてこの後輩に公式試合でも負けるようになった。

ビクトル・クロボプスコフのフェンシング界での一本立ちは一九七二年から始まった。すでに世界選手権や国際大会で入賞し、サーブルの正統派ハンガリーの選手、情熱的な戦法のイタリアの選手、ねばり強いルーマニアの選手を何回となく破ってはいたが、ソ連の一流選手たちにはまだ勝てなかった。

このころ、ダビド・ティシレルがコーチの仕事をやめ、マルク・ラキタがビクトルのコーチになった。



ダビド・ティシレル・モスクワ体育大学フェンシング講座主任はクロボプスコフの恩師。



一九七六年のモントリオール・オリンピック。サーブル個人の決勝に勝ち進んだのはソ連のビクトル・シジャク、ウラジーミル・ナズルイモフ、そしてわがビクトル・クロボプスコフ、それにイタリア選手2名とルーマニア選手1名だった。ソ連の3選手は結局だれにも負けなかったが、ビクトル・クロボプスコフがついに2人の先輩からも勝利を収めた。

こうしてソ連の3選手はそろってオリンピックの表彰台に上がった。1位クロボプスコフ、2位ナズルイモフ、3位シジャク。フェンシングのある種目で一国の選手がメダルを独占したのはこれが初めてのことだった。

さらにかれらはサーブルの団体戦でもその力を証明した。決勝戦でイタリア・チームを破ったソ連チームの勝利は、モントリオールでの最も見事な勝利の一つだった。ビクトル・クロボプスコフは個人戦、団体戦と2回オリンピック・チャンピオンになった。

このオリンピックのあと、ビクトルはナショナル・チームの新人から一転して最も経験のある選手になってしまった。ソ連チームのメンバーが一変してしまったのだ。ビクトルは後輩たちの指導に力を入れている。かれはこの後輩たちとともに一九八〇年のモスクワでオリンピック・チャンピオンの座を守ることになっている。妻のターニャも、夫のそばで練習に励んでいる。



現在のコーチ、マルク・ラキタ（元世界チャンピオン）と練習の準備

СОВЕТСКО-ЯПОНСКИЙ КИНОСИМПОЗИУМ: ПОЛЕЗНЫЙ ОБМЕН МНЕНИЯМИ

С 15 по 22 ма́я э́того го́да в Центра́льном До́ме кино́ в Москве́ проходи́л V симпо́зиум сове́тских и япо́нских кинематографи́стов с уча́стием веду́щих де́ятелей кино́ двух стран.

В соста́в сове́тской делега́ции входи́ли Секретари́ Сою́за кинематографи́стов СССР режиссёр Серге́й Гера́симов и кри́тик Алекса́ндр Карага́нов, режиссёры Васи́лий Орды́нский, Татья́на Лиозно́ва, Алекса́ндр Ми́тта, Никола́й Губе́нко, сценари́ст Алекса́ндр Ге́льман и други́е.

Япо́нскую кинематогра́фию представля́ли режиссёры и сценари́сты Ямада Ёдзи и Кояма Сэйдзиро, Генера́льный секрета́рь Сове́та япо́нской Синемате́ки Симидзу Акира, Генера́льный секрета́рь Конгре́сса за возрожде́ние япо́нского кино́ Ямада Кадзуо, Генера́льный секрета́рь Общества кинооперáторов Япо́нии Матида Хироси, актри́сы и режиссёры Мияги Марико и Хидари Сатико, кри́тики Уриу Тадао и Оно Косэй.

Програ́мма симпо́зиума включа́ла просмо́тр и обсужде́ние фи́льмов двух стран, а та́кже свобо́дный обме́н мне́ниями о насу́щных пробле́мах совреме́нного киноиску́сства.

Корреспонде́нт журна́ла Мари́на Ры́клина попроси́ла Серге́я Гера́симова и Ямада Ёдзи отве́тить на не́сколько вопро́сов:

— В чём вы ви́дите основно́е значе́ние сове́тско-япо́нских киносимпо́зиумов?

— Основно́е досто́инство таки́х симпо́зиумов, — сказа́л Серге́й Гера́симов, — э́то и́скренний делово́й разгово́р, возмо́жность обменя́ться мне́ниями по насу́щным пробле́мам, волну́ющим кинематографи́стов обе́их стран, по по́воду отде́льных фи́льмов. Япо́нская кинематогра́фия, коне́чно, в лу́чшем ее проявле́нии, — о́чень близка́ нам. Лу́чшие япо́нские фи́льмы всегда́ демократи́чные, че́стные. А демократи́ческое нача́ло; помно́женное на высо́кое профессиона́льное мастерство́, како́е обы́чно демонстри́руют япо́нские мастера́ кино́, представля́ет собо́й большу́ю обще́ственную и худо́жественную си́лу.

— Каки́е наибо́лее ва́жные вопро́сы затра́гивались на э́том симпо́зиуме?

— Основно́й вопро́с — э́то «кино́ и зри́тель», — продолжа́ет Серге́й Гера́симов. — Об э́той пробле́ме заинтересо́ванно говори́ли все выступа́ющие. Тот факт, что кинемато́граф теря́ет зри́теля, заставля́ет не то́лько заду́маться, но и найти́ пути́ для исправле́ния э́того положе́ния.

— Кино́ — э́то тако́й вид иску́сства, кото́рый до́лжен быть поня́тен са́мой широ́кой аудито́рии, — отме́тил Ямада Ёдзи. — В то же вре́мя ка́ждая рабо́та должна́ име́ть абсолю́тно индивидуа́льные черты́, передаю́щие вну́тренний мир а́второв. Именно в тако́м синте́зе индивидуа́льности и всео́бщей досту́пности фи́льмов я ви́жу оди́н из путе́й повыше́ния авторите́та киноиску́сства.

Уча́стники симпо́зиума прояви́ли большо́й интере́с к фи́льмам свои́х колле́г. Оце́нки, кото́рые япо́нские кинематографи́сты да́ли сове́тским карти́нам, свиде́тельствуют о серьёзном понима́нии и́ми не то́лько профессиона́льного мастерства́, но и вну́треннего мироощуще́ния их а́второв.

Сове́тские кинематографи́сты единоду́шно отме́тили из япо́нских фи́льмов рабо́ту Ямада Ёдзи «Жёлтый плато́к сча́стья». В ней режиссёру удало́сь найти́ о́чень те́сную непринуждённую фо́рму обще́ния со зри́телем. В фи́льме гармони́чно сочета́ется просто́й сюже́т с глубино́й а́вторской мы́сли. «Это — гума́нный высокохудо́жественный фильм», — подчеркну́л Серге́й Гера́симов.

В то же вре́мя сове́тские кинематографи́сты не могли́ не отме́тить, что ряд други́х фи́льмов, наряду́ с высо́ким профессионали́змом, име́ет я́вную комме́рческую напра́вленность, что отрица́тельно ска́зывается на их худо́жественных досто́инствах.

本号のテキストは，56ページに掲載の「第5回ソ日映画シンポジウム」の全文です。スペースの関係で〔注〕は省略しました。

イリフ＝ペトロフ

文芸批評家　エブゲニー・シードロフ

ソ連の有名な諷刺作家イリヤ・イリフ（一八九七―一九三七）とエブゲニー・ペトロフ（一九〇三―一九四二）はいつも、「二人でどうやって書くのですか？」と質問されました。二人は笑って答えるのでした――「とにかく二人で書くんです。ゴンクール兄弟のように。エドモンが編集部を駆け回り、知人に盗まれないように、ジュールが原稿を見張ってる、というわけですよ」

イリフとペトロフの二つの長編――『12の椅子』（一九二八）と『金の子牛』（一九三一）は、作者をソビエト・ユーモア文学の巨匠の地位に押し上げ、その名を世界に広めました。これらの作品は多くの言葉に翻訳され、いくつかの国では映画にもなりました。これらの作品は、時とともに古びるということはないでしょう。なぜなら、そのユーモアは、特定な時代の枠を越え出ているからです。人間一般に共通するものをたくさん含んでいるそのユーモアは、民族や世代の異なる読者をも笑わせずにはおきません。二人が生み出した多くのせりふや言い回しは、人々の日常の言葉に取り入れられ、あるいは警句となり、そのうちのいくつかは慣用語にさえなっています。

イリフとペトロフの作品に描かれている風俗は、遠い過去のものとなりましたが、凡俗さや貪欲や小市民根性を笑いとばすユーモアは、生きつづけています。

イリフ（本名イリヤ・アルノリドビチ・ファインジリベルグ）はオデッサで生まれ、育ちました。ペトロフ（本名エブゲニー・ペトロビチ・カターエフ）もまた、オデッサで少年時代と青年時代をすごしました。しかし二人が知り合ったのは、一九二五年のモスクワでのことでした。イリフは鉄道員の新聞『グドーク』（汽笛）で働いており、ペトロフは諷刺雑誌『クラスヌイ・ペーレツ』（トウガラシ）で働いていました。二人の短編やコントは、読者に大変な人気がありました。



3人組の画家ククルイニクスイは2人組の作家イリフ＝ペトロフと親しかった。写真左からM・クプリヤノフ、I・イリフ、N・ソコロフ、E・ペトロフ、P・クルイロフ（1934年）

ロシア・ソビエト文学のアンソロジー

冗談がきっかけ

あるとき、作家ワレンチン・カターエフ（ペトロフの実兄）が冗談半分に、イリフとペトロフに創作コンビナートを開かないか、と提案しました。「私が大デュマで、きみたちは私の召使いだ。私がきみたちにテーマを与え、きみたちが書き、そのあと私がそれを直す。きみたちの原稿に2度ほど目を通して、名人の手を加えれば、出来上がりというわけさ……」

こう言ってカターエフはその場で、12脚の同じ型の椅子の一つに隠された宝物を探す話を、思いつくまま語ったのです。話は気に入りました。そしてこの冗談は、期せずして、重大な結果をもたらしました。イリフはペトロフに、いっしょに書こうと申し出ました。

「どうやっていっしょに？それぞれの頭で、何を？」。

「いや」とイリフが言いました。「いっしょに書いてみよう。同時に、一行一行をいっしょに。分かるかい？一方

が書いているあいだ、他方が隣に座っている。共同で、いっしょにつくるんだよ」
10年のあいだ、イリフとペトロフは離れることなく、いっしょに仕事をしました。二人は、二人をよく知っている作家が表現したところによれば、互いの中に入り込んでいるかのようでした。彼らは影響を及ぼし合いながら、互いを補っていました。イリフの諷刺的な冷笑とグロテスクへの性向が、ペトロフの陽気で茶目っ気な笑いと結合していました。

ソビエト文学にあっては、一九二〇年代末に諷刺とユーモアが最盛期を迎えました。それには、客観的な歴史的根拠がありました。それは、ソ連ではネップ（新経済政策）の時代だったからです。新しい生活を始めるには、一時的に資本主義に譲歩しなければなりませんでした。

思想の革命的解放と息を吹き返しかけていた小ブルジョアジーへの激しい憎悪、階級的正義への渇望と官僚主義や蒙昧やペテン等々、妥協など考えも及ばない悪業――これが、イリフとペトロフによって代表される若きソビエト諷刺文学を養っていたのです。

イリフとペトロフは『12の椅子』の中で、二〇年代後半のロシアの生活の情景を、皮肉たっぷりに、広範に描こうと考えました。姿を消した宝物を二人の主人公が追いかけるという、波乱万丈の古典的な題材は、この芸術的課題の解決にはうってつけでした。この長編は、半年たらずという速さで書かれました。主人公の一人――〃高潔な〃ペテン師オスタップ・ベンデルは、オー・ヘンリーやマーク・トウェーンの主人公たちと並べても、遜色ありません。

不滅の形象 オスタップ・ベンデル

オスタップ・ベンデルは、イリフとペトロフの最高の芸術的達成です。物語の最後で彼は、競争相手でロシアの田舎町のかつての貴族団長ボロビヤニノフにのどを切られて死にますが、イリフとペトロフは、彼を再び〃生き返らせ〃て、次の作品――『金の子牛』の主人公に据えなければなりませんでした。オスタップ・ベンデルが読者にあまりにも人気があったので、作者といえども彼の生命を奪うことはできなかったのです。

ソ連の有名な批評家ウラジーミル・サパクの次の言葉が、オスタップ・ベンデルの形象の本質をもっとも正確に指摘しているように思われます。

「オスタップ・ベンデルは、肯定的な役割を果たす否定的な主人公である。物のリアルな価値を見ぬき、俗悪にすばやく反応する能力、投げやりな人間や官僚主義者、強欲者や間抜けにたいする完璧な反応、言葉と行動による批判のこの能力、あえて言えば、実際に嘲笑されるに値するすべてのものを嘲笑し、からかい、翻弄するこの才能が、小説の中でオスタップ・ベンデルが身につけている膨大な肯定的持ち分である」

マルクスは、人類は笑いながら自分の過去と訣別する、と書いています。イリフとペトロフのこっけいな作品は、資本主義の時代との別離であり、そのしつこい欠陥の憤然たる否定です。労なくして富を得ようというベンデルの夢は、ソビエト生活の現実にぶつかって、こわれます。

「ぼくはモンテ・クリスト伯にはなれなかった」と主人公は『金の子牛』の最後で、苦笑しながら言います。

『12の椅子』と『金の子牛』の読者のまえには、口では社会主義を認めていながら、実際には新しい生活の建設を妨げている俗物やペテン師や官僚など、命脈つきた諸タイプの一大絵巻がくり広げられます。

イリフとペトロフの作品は必ずしもみんなに受け入れられ、正当に評価されたわけではありませんでした。社会主義の諸条件のもとでの諷刺の必要性を否定する文学活動家もいたからです。そのような活動家についてイリフとペトロフは『金の子牛』の序文の中で、次のように痛烈に、寸鉄をこめて書いています。

「『おうかがいしますが』とソビエト政権をイギリスよりは少しおそく、ドイツよりはちょっぴりはやく承認した、ある厳格な市民が私たちに質問した。『おうかがいしますが、あなた方はなぜ、こっけいに書くのですか？ 再建期に笑いとは何ごとです？ あなた方は気でも違ったのですか？』

こう言うと彼は長いこと、腹立たしそうに、このご時世に笑いは有害である、と私たちを説得した。

『笑うなんて、罪ですぞ！』と彼は言った。『そうです、笑ってはいけないのです！ 微笑さえ、いけないのです！ この新しい生活を見れば、変動を見れば、私は笑いたくなどない、祈りたい！』

『しかし、私たちはただ笑っているのではありません！』と私たちは反論した。『私たちの目的は、再建期を理解していない人々を皮肉ることなのです』」

一九三五年から一九三六年にかけての冬、イリフとペトロフはアメリカ合衆国を旅行しました。その結果、ルポルタージュ風の作品『一階建てのアメリカ』が生まれました。この作品はソ連ばかりでなくアメリカでも、大きな関心を持って迎えられました。

一九三七年に、イリヤ・イリフは肺結核で亡くなりました。ペトロフもイリフ亡きあと、あまり長くは生きませんでした。ソビエト国民がファシズムとたたかった戦争の最初の日（一九四一年）から、ペトロフは従軍記者となりましたが、一九四二年7月、任務から帰る途中、飛行機事故で亡くなりました。

本号では『12の椅子』の一部をご紹介します。腹をすかせた一文なしのオスタップ・ベンデルとイポリット・ボロビヤニノフは、ボルガ沿岸のかつての郡役場所在都市ワシュキへやって来ました。ここで地元のチェス愛好家を手玉に取るのですが……。

〔長編抜粋〕

12の椅子

イリフ＝ペトロフ
山田 はじめ 訳

金ぶちのメガネをかけ、汚れた、ペンキのしみだらけの半長靴をはいた、背の高い、やせた老人が、朝からワシュキの町中を歩きまわって、家々の壁に手書きのポスターを貼っていた。

一九二七年6月22日
『ボール紙製造人』クラブにて
講演
「効果的な初手について」
そのあと
一六〇人を相手に、チェスの
同時対局
グランドマスター（名人）
O・ベンデル
手合わせ料――50コペイカ
入場料――20コペイカ
開場 午後6時ちょうど
担当 K・ミヘリソン

当のグランドマスターも、時間を無駄にはしていなかった。3ルーブルでクラブを借り切ると、彼はなぜか養馬局の廊下にあるチェス部へすっ飛んで行った。

チェス部には、片目の男が座っていた。

「グランドマスターのO・ベンデルです」と、机に座りながらオスタップは言った。「あなた方のところで、同時対局を行います」

ワシュキのチェス打ちの片方だけの目は、自然が許す限界まで見開かれた。

「ただいま、グランドマスター様！」と片目の男は叫んだ。「どうぞ、お座り下さい。ただいま」

こう言うと、片目の男は走り去った。オスタップはチェス部の部屋を見まわした。壁には競走馬の写真がかかっており、机の上には『一九二五年のワシュキ市チェス部の成果』と題する、ほこりだらけの帳簿がのっていた。

片目の男は、さまざまな年齢の男たちを1ダースほど連れて、戻って来た。

彼らは順番に挨拶して、姓を名乗り、うやうやしくグランドマスターの手を握った。

「カザンへ行く通りがかりでしてね」とオスタップは、ぽつりと言った。「もちろん、もちろん、今夕の対局にはおいで下さい。だがいまは、無礼講で失礼しますよ。カルルスバードの試合で疲れてるんです」

ワシュキのチェス打ちたちは、孝行息子のようにオスタップの言うことをきいていた。オスタップはいい気分だった。彼は、新しい力とチェスの考えがあふれて来るのを感じた。

「チェスの考え方がどんなに長足の進歩をとげたか、信じてもらえないでしょうね」と彼は言った。「いいですか、ラスケルなどは月並みになり果てて、相手にできなくなりましたね。やっこさんは敵をタバコで煙ぜめにするんですよ。いやがるように、わざと安タバコを吸って。チェス界は大揺れですよ」

グランドマスターは、地方のテーマに移った。

「なぜ田舎には、頭の遊びがないのです？ たとえば、このチェス部ですよ。よりによってチェス部なんて名前は。退屈です、色気がない！ なぜ、実際のところ、美しい、真にチェス的な名をつけないんですか？ そうすれば、会員がわんさと押しかけるでしょうに。たとえば『フォー・ナイト（四桂馬）チェス・クラブ』なんてつけたらどうでしょう。すてきじゃないですか！ 耳ざわりもいい！」

このアイデアは当たった。

「まったく、『フォー・ナイト・クラブ』と改名しちゃならんという法もない」とワシュキの連中が言った。

チェス部の事務局員がその場に集まっていたので、オスタップは名誉議長となって、簡単な会議を組織した。席上、チェス部は万場一致で『フォー・ナイト・チェス・クラブ』と改名された。グランドマスターはボール紙に、4頭の馬（ナイト）の絵としかるべき文句の入った看板を、上手にこしらえた。

この重要な行事は、ワシュキにおけるチェスの大繁栄を約束するものだった。

「チェス！」とオスタップは言った。「みなさん、チェスとは一体何でしょう？ それは、文化を押し進めるばか

りでなく、経済をも押し進めます！　みなさん、あなた方の『フォー・ナイト・チェス・クラブ』の仕事が正しく行われれば、ワシュキ市をすっかり変えることができるでしょう」

オスタップは、昨日からまだ何も食べていなかった。だから、彼の雄弁も尋常ではなかった。

「そうです！」と彼は叫んだ。「チェスは、国を豊かにするのです！　もし私の計画にご賛同いただけますなら、ボルガの船着き場まで、大理石の階段が通じるでしょう！　ワシュキは、近隣10県の中心地となるでしょう！　あなた方はかつて、ゼメリング市のことを聞きましたか？　聞いたことはありませんね。ところが、いまでは、このまちは豊かで、有名です。それは、ただこのまちで国際試合が行われたというだけの理由です。したがって私は、ワシュキでも国際チェス大会を行う必要があると申し上げているのです」

「どうやって？」とみんなが叫んだ。

「むずかしいことではありません」とグランドマスターは答えた。「私の個人的なコネとあなた方の創意――これが、ワシュキ国際チェス大会を組織するのに必要かつ十分なものです。考えてもみて下さい。『一九二七年国際ワシュキ大会』の響きのいいことを。ホゼ・ラウル・カパブランカ、エマヌエル・ラスケル、アリョーヒン、ニムツォビチ、レチ、ルビンシュテイン、マロッチ、タラシ、ウィドマル、グリゴリエフ等々のチェスの名人がやって来ます。そのほか、私も必ず参加しましょう！」

「だが、資金が！」とワシュキの人々は呻いた。「みんなにカネを払わなければならない！　大変な額です！　どこから調達するんですか？」

「すべてはがっちり計算してあります。寄付がよせられます」とベンデルは言った。

「そんなおそろしい大金を、わしらのだれが払うというんです？　ワシュキの者が……」

「ワシュキの者ですって！　ワシュキの人々は払わなくていいんです。ワシュキの人々は、受け取るんですよ！　ワシきわめて簡単なことです。このような大物グランドマスターたちが参加する大会なら、全世界のチェス愛好家がやって来るでしょう。何十万もの人々がワシュキに押し寄せるのです……」

ワシュキの愛好家たちのまえには、目のくらむような未来図が展開された。部屋が大きくさえなった。その代わりに、ガラス張りの33階建てのチェス宮殿が青空にそびえ立った。そのすべてのホール、すべての部屋、さらには弾丸のように走りまわるエレベータの中でさえ、思案顔の人々が、孔雀石を象眼した盤に向かって、チェスをさしていた……

「ご心配はいりません」とオスタップは言った。「私の計画は、あなた方のまちに生産力の前代未聞の繁栄を保証します。大会が終わって、お客たちがみんな帰ってしまったときのことを考えてもみて下さい。モスクワの住民は、あなた方のこのすばらしいまちに殺到します。首都は、自動的にワシュキに移ります。政府がここへやって来ます。ワシュキはニュー・モスクワと改名され、モスクワはオールド・ワシュキと改名されます。レニングラードやハリコフの住民は歯ぎしりしますが、どうすることもできません。ニュー・モスクワはヨーロッパで一番の、やがては世界中で一番の、みやびやかな中心地となるでしょう」

「世界中で一番の!!」頭がぼうっとなったワシュキの人々が呻いた。

「そうです！　そのうち、宇宙で一番になるでしょう。地方都市を地球の首都に変えたチェスは、応用科学に変わり、惑星間交流の手段を発明するでしょう。ワシュキから、火星や木星や海王星へ、信号が発信されるでしょう。金星との連絡は、ルイビンスクから隣のヤロスラブリへ行くほど簡単に行われます。さらに、8年もたてば、宇宙史上最初の惑星間チェス会議がワシュキで開かれるかもしれません！」

オスタップはその見事なひたいを拭った。彼はチェスのナイトの馬を焼き肉にして食べたいほど、腹ぺこだった。

「まったく」と片目の男が、熱に浮かされたような目つきで、ほこりだらけの部屋を見まわしながら言った。「だが実際のところ、どうやってその方策を実現――いわば基礎固めしたらいいものでしょう？」

居合わせた人々は、身をのり出すようにしてグランドマスターを見た。

「くり返しますが、まったくのところ事態は、もっぱらあなた方の創意にかかっているのです。くり返しますが、開催にかんしては私がすべて引き受けます。電報代を別にすれば、費用はいっさいかかりません」

片目の男が仲間をつついてきいた。

「どうだい、何か言うことは？」

「やりましょう！　やりましょう！」とワシュキの人々は叫んだ。

「で、その電報代には……どれほど必要なんでしょうか？」

「まったく取るに足らん額ですよ」とオスタップは言った。「一〇〇ルーブルです」

「われわれの金庫には21ルーブル16コペイカしかありません。もちろん、これではだいぶ足りないことは分かっていますが……」

だが、グランドマスターは鷹揚な組織者だった。

「いいでしょう」と彼は言った。「そこから20ルーブル下さい」

「でも、足りるんですか？」と片目の男がきいた。

「当面の電報代には足りますよ。そのうちに寄付が集まり出して、カネの使い道に困るようになるでしょう」

カネをよそ行きの緑色の背広にしまうと、グランドマスターは一同に自分の講演のことと一六〇人同時対局のことをもう一度思い出させて、では夕方まで、と愛想よく別れを告げ、イポリット・マトベーエビチ・ボロビヤニノフと会うためにクラブへ向かった。

「わしは腹ぺこだよ」とボロビヤニノフは大げさな声で言った。

彼はもう受付けに座っていたが、まだ1コペイカも集まっておらず、1斤のパンさえ買うことができなかったのだ。彼のまえには料金を入れるための、針金で編んだ緑色のカゴが置いてあった。この種のカゴは、中流の家庭ではナイフやフォーク入れに使われている。

「ねえ、ボロビヤニノフさん、1時間半ほど受付けを中断して、食事でもしに行きましょう！　歩きながら、事情をかいつまんで話しますよ。ところで、あなたはヒゲをそって、身ぎれいにする必要がありますね。まるで浮浪人のようですよ。グランドマスターの知り合いに、こんな怪しげな人がいてはいけませんから」

「切符は1枚も売れていない」とイ・ポリット・マトベーエビチが言った。



「大したことありません。夕方には押し寄せて来ますよ。すでに国際チェス大会の開催のために、市は私に20ルーブル寄付してくれました」

「じゃ、なぜ同時対局なんかやる必要がある？」とボロビヤニノフが言った。

「こてんこてんにやられかねないというのに。20ルーブルあれば、いますぐ汽船に乗れる」

「そんな愚にもつかないことを、空っ腹に聞かせてはいけませんよ。脳にも悪い影響を与えます。なるほど、20ルーブルあれば、出発できるでしょう。でも、食事のカネは？　だれもビタミンをタダで売ってはくれません。そのかわり、お人よしのワシュキ市民から、講演と手合わせ料を30ルーブルせしめることができるんですよ」

「こてんぱあだよ！」ボロビヤニノフは悲しそうに言った。

「もちろん、危険はあります。袋だたきにあうかもしれません。でも、ぼくには一つ考えがあるんです。どんな事態になっても、あなたを救える考えです。しかし、それはあとで話します。いまはまず、地方料理をたのしみましょう」

夕方の6時まえに、満腹して、ヒゲをそった、オーデコロンをぷんぷんさせたグランドマスターは『ボール紙製造人』クラブの受付けに入った。

これまた満腹して、ヒゲをそったボロビヤニノフが、威勢よく入場券を売っていた。

「どんな様子です？」小声でグランドマスターがたずねた。

「入場者が30人、試合参加者が20人」とボロビヤニノフが答えた。

「16ルーブルか。少ない、少ない！」

「どうだい、ベンデル、あの行列は！　まちがいなく、こてんぱあだぞ」

「そんなこと、気にしないで！　商売に身を入れて下さい！」

1時間後。受付けには35ルーブル集まった。人々はホールで興奮していた。

「窓口を閉めて！　おカネをぼくに下さい！」とベンデルが言った。「さあて、と。あなたに5ルーブルあげます。船着場へ行って、2時間ほどボートを借りて、倉庫の少し下の岸のところでぼくを待ってて下さい。二人で夜の船遊びをしましょう。ぼくのことなら、ご心配なく。今日は調子がいいんですよ」

グランドマスターはホールへ入って行った。彼は壮快で、第1手をe2―

長編抜粋『12の椅子』

e4と打っても決して窮地に陥ることのないのをよく知っていた。なるほど、その先の手はどうなるか皆目分からなかったが、そんなことは偉大な策士には何の妨げにもならなかった。彼は、どんな絶望的な土壇場からでも逃れることのできる、まったく突拍子もない方法を用意していた。

　グランドマスターは拍手で迎えられた。さほど大きくないクラブのホールには、色とりどりの旗がかかっていた。

　オスタップはおじぎをして、身に余る拍手を辞するかのように両手を前に出し、演壇にのぼった。

「みなさん！」と彼はすばらしい声で言った。「同志であり、チェスの兄弟であるみなさん。私の講演のテーマは、効果的な初手の構想であります。みなさん、初手とは何か、構想とは何か？　初手とは、みなさん、〈Quasi una fantasia〉であります。しかるに、みなさん、構想とは何でありましょう？　構想とは、みなさん、論理的なチェスという形式に包まれた、人間の思想であります。取るに足らぬ勢力で、全局面を支配することもできます。すべては、それぞれの個人にかかっているのです。たとえば、3列目の、ほら、そこに、髪のブロンドの方がいますね。あの方はチェスが上手だとしましょう」

　3列目のブロンドの男は、顔を赤くした。

「一方、あのブリュネットの方は下手だとしましょう」

　みんなは振り返って、やはりブリュネットの男を見た。

「これは、どういうことでしょうか、みなさん？　ブロンドの方は上手で、ブリュネットの方は上手でない。それぞれが各自でチェッカー――いや、つまりチェスの練習をたえず行わなければ、どんな講義をしてもこの力関係を変えることはできません。それでは、みなさん、こんどはわれらが尊敬するグランドマスターのカパブランカ、ラスケル、グリゴリエフの実践から、いくつかの教訓的な物語をお話ししましょう」

　オスタップは聴衆にいくつかの古くさいアネクドートを物語って、講演を終えた。

　講演があまり短かったので、みんなはいくぶん驚いた。片目の男は、その一つだけの目をグランドマスターから離さなかった。

　しかし、同時対局が始まったので、片目の男のますます増大する疑惑は抑えられた。彼はみんなといっしょに、机をコの字形に並べた。グランドマスターを相手に、30人のチェス愛好者が陣どった。彼らの多くは、すっかり上がってしまい、せめて22手までは負けまいと、ひっきりなしにチェスの教科書をのぞき込んでは、複雑な手を頭にたたきこもうとしていた。

　オスタップは、三方から自分を取り囲んでいる〝黒〟の軍勢と閉まっているドアにちらっと目を走らせると、大胆に仕事に取りかかった。彼は、一番手前の盤に座っている片目の男に近づくと、ポーンをe2からe4へ動かした。

　片目の男はたちまち両手で耳をつかんで、必死に考え始めた。チェス愛好家たちのあいだに、ささやきが起こった。

「グランドマスターはe2―e4だぞ」

　オスタップはすべての相手に、ほかの初手の形をいっさい使わなかった。残りの29の盤にも同じように、ポーンのe2―e4で臨んだのである。愛好家たちは次々に、髪をつかみ、興奮した思索に没頭していった。見物客たちは、グランドマスターを目で追った。市でただ一人のアマチュア・カメラマンが椅子にのぼって、マグネシウムをたこうとしていた。オスタップは腹立たしそうに手を振ると、盤に沿って歩くのを中断して、大声でどなった。

「カメラマンを退場させたまえ！　思考のじゃまになる！」

〈何だってこんな田舎まちに写真を残せるものか。民警とかかわりになりたくないからな〉と彼は腹の中で決めた。

　愛好家たちは怒ってシーシーと制して、カメラマンの試みをやめさせた。それだけではおさまらず、カメラマンは部屋から追い出されてしまった。

　3手目になると、グランドマスターは18のスペイン陣形を組み、残りの12の盤では黒の軍勢が、古くさい手ではあるが、かなり確実なフィリドルの防御を敷いていることが明らかになった。もしオスタップが、自分がこんなにもしぶとい防御に出くわしていると知ったら、びっくり仰天したことだろう。ところが、偉大な策士がチェスを打つのは、これが生まれて2度目だったのである。

　最初のうちは、愛好家たち、中でも片目の男は、恐慌に陥った。グランドマスターの技量は、疑いもなかった。

　ワシュキの後れた愛好家たちを腹の中で無条件に愚弄しながら、グランドマスターは異常なまでの軽々しさで、ポーンや大事な駒、大事でない駒を見境なく犠牲にしていった。講演のときに軽口の対象にしたブリュネットには、クイーンさえ取られてしまった。ブリュネットは驚愕して、たちまち降参しようとしたが、恐るべき意志の力で、かろうじて試合を続けていた。

　晴天のへきれきは5分後に鳴りひびいた。

「王手！」と、死ぬほど動転したブリュネットが口走った。「王手です、グランドマスター」

長編抜粋『12の椅子』

　オスタップは情勢を分析し、ブリュネットの勝利を大げさに祝福した。愛好家たちのあいだに、どよめきが走った。

〈どろんを決める時分だ〉とオスタップは、机のあいだを静かに歩きまわりながら、駒をぞんざいに動かして、考えた。

「駒の動かし方をまちがえましたよ、グランドマスター」と片目の男が、鼻息をうかがうように言った。「ナイトはそんなふうに動きません」

「いや、失敬、失敬」とグランドマスターは答えた。「講演のあとなので、いくらか疲れているんです」

　それにつづく10分のあいだに、グランドマスターはさらに10人に負けた。

　驚きの叫びがクラブの部屋にひびいた。不穏な空気がつのった。オスタップはたてつづけに15局を失い、まもなく、さらに3局失った。ただ一人残っているのは、片目の男だった。彼は試合の初めに、恐慌のあまり多くのまちがいをやらかして、いま、勝利の終局に向かって苦心して試合を進めているところだった。オスタップは、周囲の目に気づかれないように、盤から黒のルークを盗み、それをポケットに隠した。

　人々は二人のまわりにつめ寄った。

「たったいままで、ここに私のルークがあったんだ！」と周囲を見まわして片目の男が叫んだ。「ところが、いまはもうない！」

「ないということは、つまり、なかったということさ！」とオスタップが乱暴に答えた。

「何ですって、なかったですと？　私ははっきり覚えています！」

「きまってるじゃないか、なかったんだよ！」

「じゃ、どこへ行ったんです？　あなたが取ったんですか？」

「取りましたよ」

「いつです？　何手目にですか？」

「ルークのことで、私に難くせをつけるのかね？　降参なら降参と言いたまえ！」

「そんなばかな！」片目の男はどなり出した。「私のルークを返して下さい」

「降参したまえ、降参したまえ、何というイタチごっこ！」

「ルークを返しなさい！」

　この言葉で、ぐずぐずしていたら死も同然だと悟ると、グランドマスターは駒をすくって、それを片目の男の顔に投げつけた。

「みなさん！」と片目の男は大声で叫んだ。「見て下さい！　愛好家が乱暴されています！」

　ワシュキ市のチェス打ちは呆然となった。

　貴重な時間を無駄にせず、オスタップはチェス盤をランプに投げつけると、あたりを包んだ闇の中で、だれかのあごやおでこにぶつかりながら、通りへ駆け出した。

（さし絵　ククルイニクスイ）



ソ連の白内障手術法、日本で反響呼ぶ

――フョードロフ教授の来日

V・タラネンコ

テレビ朝日のモーニングショーに出演したフョードロフ教授（右から3人目）（写真＝テレビ朝日提供）



日本のテレビでは眼鏡のコマーシャルが、日に何回も流されている。それほど眼鏡は多数の人々の生活と密着しており、どんどん美しく、良くなっている。スポーツ選手用として特別に軽い眼鏡もつくられた。だが目の悪い人は、眼鏡がなければどうにもならないのだろうか?

本誌一九七七年7号で『白内障手術の権威フョードロフ教授』と題して重度の眼病、白内障から人々を救う人工水晶体について紹介した。

5月27日から6月6日までこのソ連の白内障手術の権威スビャトスラフ・フョードロフ教授が、イスクラ産業の招待で日本に滞在した。来日前、教授はフィリピンで眼外科学の新しい成果である人工水晶体を公開して、一連の手術をみごとに行ってきた。

フョードロフ教授の日本滞在は専門家ばかりでなく、一般にも大きな反響を呼んだ。朝日、読売、桐生タイムスなどの各紙が教授の治療法を紹介した。テレビ朝日も、6月5日のモーニングショーに教授を招いた。その翌日、筆者は同テレビ局の三浦甲子二・常務取締役にたまたま会ったので番組の反響について聞くと、同氏は、視聴者から電話でたくさんの問合せがあったので、通話料金をソ連大使館に請求したいくらいだ、と冗談をとばした。

ではいったい、フョードロフ教授の新しい方法とはなんであろうか? 教授に直接語ってもらった。

「日本を含む多くの国々で大多数の人々、特に初老の人たちが水晶体の混濁になやんでいます。この混濁現象は、外傷によってもよく起きます。

二〇〇年前から水晶体の摘出手術が始められました。この手術の後では、わずかに2—3%の視力しか残りません。何分水晶体は19ジオプトリーもある強度のレンズだからです。

視力の低下をおぎなうために眼鏡が使われているのですが、眼鏡の欠点はまず眼鏡をかけると人間の視野が正常時の約二四〇度からわずか40—60度になること、第二に見るものを35%も拡大してしまうことです。人々は、方向を定めるのが困難になり、目測が正しくできなくなり、これに付随したたくさんの障害が起こってきます。

一九四〇年代から人工水晶体の問題が研究されるようになり、人工水晶体にプラスチックを利用するという考えが出てきました。しかし初期の手術はその80%が不成功に終わり、眼科医の多くはこの新しい方法を敬遠しました」

――いつ頃から教授はこの問題の研究を始めたのですか、またどのようにこの考えを発展させたのでしょうか?

「私がこの問題の研究を始めたのは一九五八年からで、ロストフ医科大学を卒業してからです。一九六三年に原型ができあがり、一九六六年に水晶体が完成しました。現在使われているのは、この水晶体を多少改良したものです。モデルの活発な探求が8年間も続けられました。私たちは、世界中のあらゆる人工水晶体のモデルをすべて試して見ましたが、どれも大きな欠陥をもっていたので、すべて否定せざるをえませんでした。これらの水晶体を患者に移植するとひんぱんに副症状を起こし、視覚をそこなったのです。

長い間の研究で、ソ連の人工衛星にあやかってアメリカ人が〝スプートニク・レンズ〟と呼んだ新しいモデルが完成しました」

――あなたの発明した水晶体は、何で出来ていますか?

「この水晶体は、有機ガラスと支持材である特殊なナイロンから出来ています。その重さは、1ミリグラム以下なので、眼繊維に負担をかけるようなことはありません。この水晶体は、眼の内部にしっかり固定されます。また光学特性が良く、そして最も重要なことは、各患者個人個人に合わせて作ることができることです」

――この水晶体は、他国製のものとどう違いますか?

「ソ連をはじめ、米国、イギリス、オランダなどで水晶体が製造されていますが、型の点で言うならば、ソ連型とオランダ型の二種類だけです。米国とイギリスのものはソ連型です。しかしライセンスなしで製造しているので、しかしわれわれのシステムの水晶体の優先権にかんする問題が近々解決されるでしょう」

――あなたの方法は世界でどの程度普及していますか?

「世界全体では三五〇万人が白内障を患っています。患者の半数がこのような治療を必要としています。毎年世界で七万五〇〇〇例までの手術が行われています。ソ連では五五〇〇例のこのような手術が行われました。

2、3年前にこの方法は米国で広く用いられるようになりました。この1年間だけで米国で四万五〇〇〇例の手術が行われましたが、そのうち八〇〇〇例の手術で私たちの開発した水晶体が使われました。

たとえば、米国では3年前にこの方法を支持するキャンペーンが展開されました。米国の教育厚生省はすべての州でこのような手術をすることを許可しないわけにはいきませんでした。

ソ連の医師の援助を得て、インド、ポーランド、ドイツ民主共和国、ハンガリー、ユーゴスラビアでもこの方法が導入されました。まもなく私たちの病院はルーマニアへ五〇〇個の人工水晶体を送ります。

現在この手術は、患者の98%に良い視力を回復させるほどの水準に達しました。私たちは新しい方法がすでに市民権をかちとり、ますます広範に医学界を征服しつつあると言えます」

――手術はどのように行われるのですか?

「手術そのものはたいして複雑ではなく、患者は手術中に少しも痛みを感じません。外科医は特殊なピンセットで水晶体を除去してから、30—40秒間で水晶体の固定環が虹彩に引っかかるように水晶体をはめます。このような手術のために医師はスーパーマンである必要はないし、超複雑な器具を必要としません。肝心なことは、目に異物を入れると余病を引き起こすかもしれないという心理的障壁を克服することです。数千人の患者にたいする12年の観察経験が、この人工水晶体は光学的特性を失わず、視力を弱めず、周囲の組織を傷つけないことを証明しました。

私はこのような手術を行うための半自動的装置が近い将来に開発されるものと思います」

私は、この記事の資料としてこの分野の日本の手術例を知りたかったが、イスクラ産業の副社長斎藤肇さんは次のように答えてくれた。

「毎年日本では約二〇万人の患者がこのような手術を必要としています。フョードロフ教授の方法で約八〇〇〇例の手術が行われました。私たちはフョードロフ教授を日本へ招待して、この新しい方法を日本の専門家にできるだけ広く紹介したかったのです。日本に滞在中にフョードロフ教授の指導のもとで数人の日本の医師が8例の手術を無事行いました。教授から贈られた20個の水晶体を私たちは研究用に日本の指導的な眼科医――早野三郎・岐阜大学医学部眼外科教授、百瀬皚・桐生眼科クリニック院長、三宅謙作・三宅眼科病院院長に手渡しました。近い将来、人工水晶体は、ソ連から輸入し、日本で高い評価を得た小児マヒ予防ワクチンや抗ガン剤フトラフールのように、多くの日本の患者に良い視力を取りもどしてくれるでしょう」

さて、フョードロフ教授に最後の質問をしてみよう。

――日本の専門家との会合から受けた印象について話してください。

「私は8例の手術に立ち合いました。術後すぐに患者は30%の視力をとりもどしました。百瀬院長の所で私はソ連の人工水晶体をはめこんだ15人の患者を診察しました。結果はすばらしいものでした。患者全員が一〇〇%の視力を得たのです。このような手術を行うためには、優秀な顕微鏡、特殊な器械、特殊な手術台、超音波装置、医師の熟練が必要です。日本の医師は先進的な技術を持ち、優秀な顕微鏡、すぐれた殺菌設備があります。ですが最も肝心なことは、新しい手術をしようという医師たちの熱意です。

私たちは幾人かの日本の専門家と会い、日本の医師団が私たちの病院を訪れ、実際にソ連の医師の仕事を見たり実習を行ったりすることについて合意を見ました。私たちはこのような手術に必要な設備や器械を供給する用意があります。ソ連製の超音波装置があれば、専門家たちは自分で水晶体のパラメーターを計算し、それをそれぞれの患者に合わせて調節することができます。そうすればすでに術後5日目に患者は50%の視力をとりもどし、しばらくして完全な視力が回復されます。もちろんそれぞれの患者の手術の結果には相違がみられますが、患者は年齢にかかわりなく良い視力を得られると、確信を持って言うことができます」

生きがいのある老年とは？

アラ・ベリャコワ

カメラ V・ラグランジ



金婚式を祝うアレクサンドルとオリガのパンフィリョーノク夫妻。夫はクリーニング工場の職長、妻は倉庫番を引退して年金生活に入ってからもうかなりの歳月がたった。

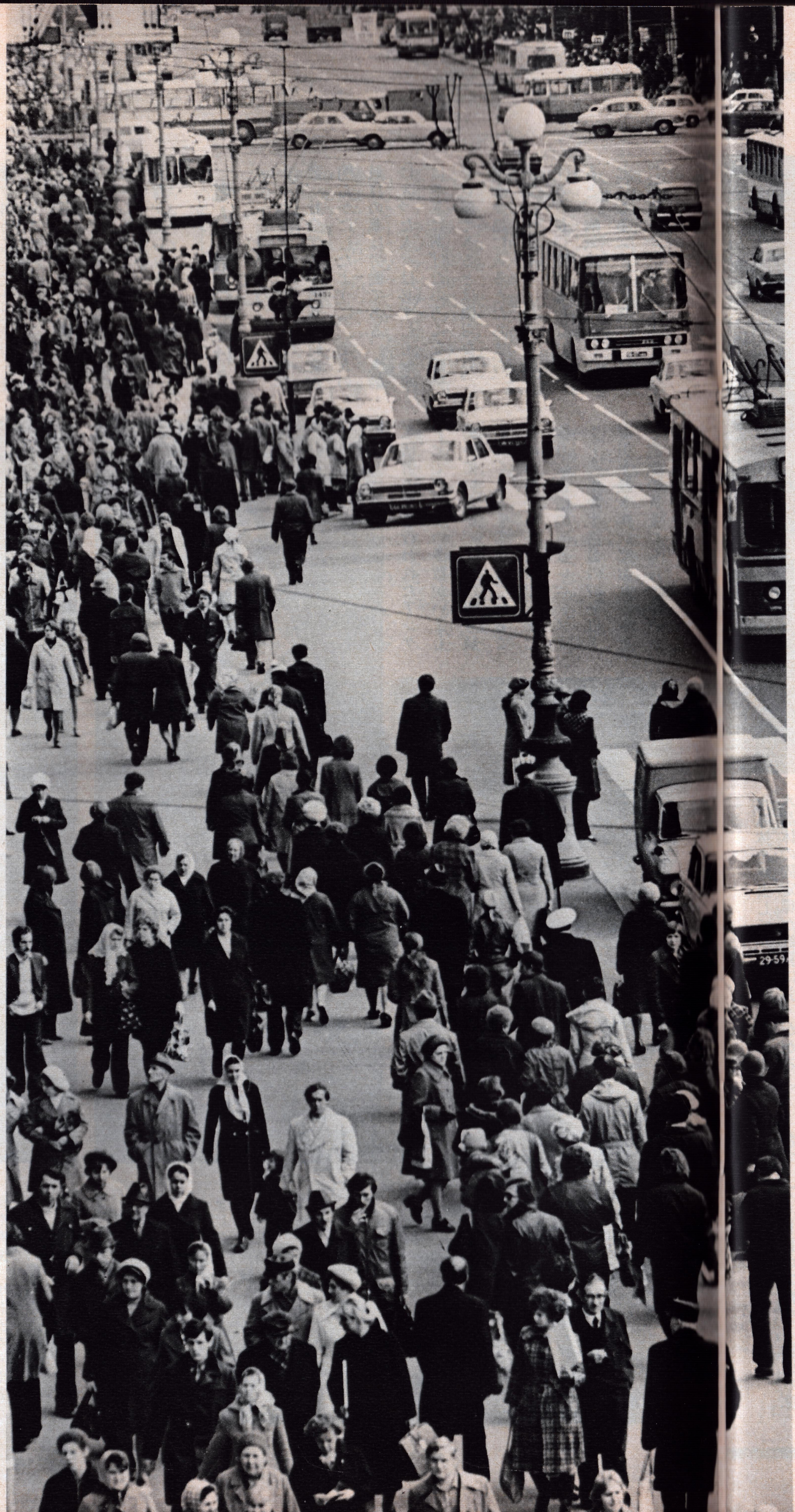
「みんな長生きしたいとは思うが、老人になりたいとは思わない……」

今日この警句は大きな社会的、道徳的問題になっている。ソビエト政権の60年間に平均寿命は32歳から70歳に伸びた。ソ連第2の都市レニングラード（人口およそ四五〇万人）では、5人に1人が年金生活者である。年金生活者を老人ときめつけるのは具合が悪い。55—60歳（男女の年金支給開始年齢）ではまだまだ先が長い。また職種や勤務地の関係で、もっと早く年金生活に入る人もかなりいる。たとえば、有害作業に従事している人の年金支給開始年齢は普通より5年早い。バレリーナは20年勤めると、36歳から年金がもらえる。

ソ連憲法は年金は老齢ではなくて、年齢によって、与えられると定めている。いいかえれば、年金生活に入ることは、いわば人生の役割の交代である。それでもやはり、人は目ざましをかける必要のないその日から、正確にはその朝から——人生の転機がやって来たとしみじみ感じる。人

人はこの転機をさまざまにのり越え、体験し、何十という問題にぶつかる。今後どのように暮らせばよいだろうか？

「問題はいかに暮らすかであって、生きながらえることではない」——と長年、老人の心理研究にたずさわってきた



レニングラードでは市民の5人に1人が年金生活者…

レニングラード大学のマリア・アレクサンドロワ助教授は言う。

年金生活に入るさい、人はまず〝心理的な壁〟をのり越える、と彼女は考える。老齢に入ったときの主な敵は、孤独であり、社会的に役立つ活動の場がないことであり、生活のリズムの狂いから肉体的な安静を求めたい気持ちになることである。つまりこれらにうちかつことで、積極的な長寿がえられるのである。

老人の最良の薬は？

レニングラードの老人病学者、社会学者の多数の研究が明らかにしたように、老人の最良の薬は労働である。老齢に入った人々は必ずしも無事にさきにあげたいろんな障壁を克服できるとは限らない。年金生活に入るとたちまち、病気にかかるし、活力も低下する。長い間何もしないでいると、病気になったような感じになる（とくに男）。

最近レニングラードの年金生活者の間で行われたアンケートで、男女の多数がいまも働いているか、または引き続き働くことを希望していることがわかった。健康で、まだ体力に自信のあるレニングラードの年金生活者の27％以上が引き続き働いており、年金と追加の賃金をもらっている。



少年たちはみな、この勇敢な老船長のようになることを夢見ている。



ガリーナ・ポクルイシキナにはまだ〝年金生活者〟という言葉は似合わない。バレリーナだった彼女は、希望すれば、40歳以前に年金生活に入ることもできた。

この調査でわかったことだが、年金生活者が働いているのは物質的原因よりもむしろ社会的・心理的原因の場合が多く、社会的・心理的原因が$\frac{2}{3}$を占めている。それでもやはり金銭的刺激は無視できない。たとえば工業企業の職長や班長、サービス・商業、その他の部門の従業員で、年金支給後も働くことに同意した人々には、賃金のいかんにかかわりなく、年金は全額支払われている。

レニングラードでは、たとえば生活サービス業従業員の$\frac{4}{10}$が年金と賃金の両方をもらっている。なぜそういうことが可能になっているのか？　都市は労働力を必要としており、それぞれの工場には求人広告が掲示してある。それと同時にサービス産業もどんどん拡大している。当然のことだが、若い人は工作機械の仕事をしたがる。だが年金生活者なら売店で新聞や花を売ることができる。たとえば、レニングラード市民のウラジーミル・ラジケビチは年金をもらうようになってから新聞や雑誌を売店で売っている。彼の元の職業は建設工。だが64歳ではおいそれと建設場へ出かけては行けない。

サービス業がレニングラードの年金生活者にとくに人気があるのは、三つの理由による。まず職場が家から近いこと、一日中いろんな人と交際できること、年金が全額給付されることだ。

しかし腕のよい専門家になると、どんな仕事でもよいというわけにはいかない。そしてどの工場の指導者も、当然のことだが、豊富な経験と高度の技能資格を持ったベテランを自分の所においておきたいと思っている。

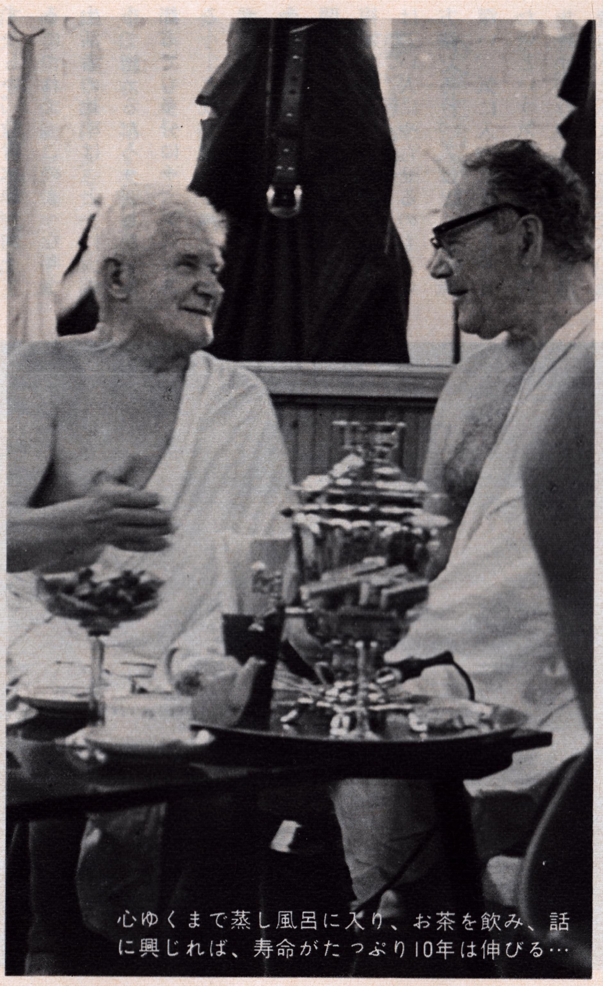
では働いている年金生活者の効率はどうか？　実のところ、彼らの大多数の生産量はノルマを上回ってさえいる。熟練のたまものにほかならない。

もう一つあげておきたいのは、若者を養成する先生格として、年金生活者がさかんに誘致されていることだ。

レニングラードの「エレクトロシーラ」工場で興味深い企画を出した年金生活者のステパン・ビチェンコは、第2次世界大戦に参加し、大佐で退役した。多額の年金をもらってはいたものの、遊んではいたくなかった。ビチェンコは若いころやったことのある仕上げ工として工場へ働きに出た。彼の行動は多くの人を驚かせた。なにも胸に勲章をいっぱいつけた大佐殿が労働者にならなくてもという声があったが、ビチェンコは風評を気にせず、さらに幾人かの同じ年輩の退役軍人を工場で働くよう説得した。こうしてエレクトロシーラ工場では、旧軍人からなる仕上げ作業班が生まれた。

いまは主婦役に専念する元経理部員のエブゲニア・カリニチェンコ





心ゆくまで蒸し風呂に入り、お茶を飲み、話に興じれば、寿命がたっぷり10年は伸びる…



老人には静かに芸術を楽しむ時間が十分にある。有名なこのロシア美術館でも年金生活者をいつも沢山見かける。

しかしビチェンコが有名になったのは、そのためではなく、まともに働かないいわゆる〃厄介者〃の少年少女を自分の班に引き受けたためである。ビチェンコは工場の在職期間にこのような若者を一〇〇人以上も世話し、自分の子供のように扱って、仕上げ工の仕事だけでなく、道徳の規範や、誠実、責任感、親切心をも教えた。多くの経験のある労働者がステパン・ビチェンコにならった。現在このような若者のための教師はレニングラードに数万人もいる。

ステパン・ビチェンコはその功により、ソ連最高の労働勲功章ともいうべき社会主義労働英雄の称号を受けた。

しかし健康状態により工場で働くことができないか、または労働時間をまるまる全部働くことができない人はどうしたらよいか？ レニングラードではこのような人々は自宅作業をやっている。

レニングラードの縫製合同「トリブーナ」は、ミシンや材料を提供して家庭で仕事をさせるやり方を真先に採用した。さまざまな縫製工場、メリヤス工場、修理工場などがその例にならった。しかし主にこれは女性の仕事だ。男は水泳着や子供のシャツを縫うことなどしないから、男の自宅での仕事には何がむいているだろうか？

市の社会保障部は労働資源利用局とともに実験をやった。レニングラードの光学機械合同には年金生活者の特別部が設けられた。彼らには複雑な設備がいらず、まったく家でできるさまざまな種類の仕事が提供された。20人の年金生活者で、8人の健康な若い労働者が浮くことがわかった。市全体ではどえらい労働力が浮くことになる。そこでレニングラードの各企業長あてに、各企業に自宅でできる仕事があるかどうかを調査するアンケートが送られた。市の職業紹介所はその回答をとりまとめた。このような職業紹介所は年金生活者にその職業、健康状態、居住地に応じたさまざまな仕事を紹介している。

しかしウラジーミル・トロポフ・レニングラード市ソビエト執行委員会社会保障副部長が言うように、ある問題が片付けば、また新しい問題が出てくるというありさまだ。元技術者や文科系の仕事をしてきた人々に職を提供することはいまの所簡単ではなく、その人たちに創造的な喜びを感じる仕事を見付けることはむずかしい。教育水準が向上するにつれて、このような年金生活者の比率は、とくに大都市で増えるだろう。しかし大都市でも多分にチャンスはある——とウラジーミル・トロポフは見ている。たとえば年金生活をしている建築家に手間のかからぬ設計をまかせて、複雑で根気のいる設計のほうは若い人にやらせるのもよい方法だろう。人はとくに興味深い、気に入った仕事をやりたいという気持ちを一生涯持ち続けるものだが、年金生活者もさまざまな方法でその気持ちを実現しようと努めている。

多くの年輩のレニングラード市民は無報酬で、単なる仕事への愛着から働いている。年金生活をしている元教師は成績のよくない生徒の勉強を積極的に助けている。有志の家庭教師は夜、アパートのクラブにそのような児童を集め、予習復習の手助けをしたり、外国語を教えたりしている。

年金生活をしている医者の多くは豊富な経験を利用して積極的に患者の相談に応じ、居住地ごとに〃健康相談室〃を設置して、そこで講演をしたり、自分の団地の住民にいろいろ助言をしている。

レニングラードでは外科医のエレナ・ウソリツェワの名前は有名だ。彼女は90歳近いが、自分で設立した市の手関節外科センターで定期的に患者を診察し、ボランティア活動を続けている。

もちろん、初老の人々にあらゆる種類の活動が有益であるというわけではない。だから現在、レニングラードの専門の研究所は働く年金生活者の最適の労働・休息条件をまとめている。これは働く未成年者にいろんな特典が定められているのと同じだ。

社会的な孤立を克服するために

外国の多くの専門家は、年金生活に入ると人間はいやでも社会的に孤立するようになると考えている。われわれはこの点では外国の専門家よりも楽観的である。たとえば労働者が年金をもらうことになって退職するさい、記念品を贈るだけでなく、工場の通行許可証を引き上げないでおく。レニングラードの大企業には年金生活者で構成される〃引退従業員評議会〃がある。こうした引退者は企業にとってうれしいお客だ。祝日には彼らは招待され、労働組合は割引（または無料）の休息の家、サナトリウム利用券を支給する。

年金生活者は家族のほかに交際の場があるか？ その可能性は少なくない。居住地ごとの住宅管理部には、〃住宅委員会〃やさまざまな社会的委員会がある。それらは大半が年金生活者で構成されている。小中学校の父母委員会では、おじいさんとおばあさんは先生の主要な助手役をつとめている。

年金生活者はどこで暮らすか？

これは単に住宅の問題だけでなく、交際の問題でもある。家族、子供、孫がおれば好都合で、この問題は自然に解決する。しかしレニングラードでは現在、第2次世界大戦中にドイツ軍による九〇〇日間の封鎖を体験した世代が老年に入っている。この戦争はまるまる一世代を奪い取り、若い芽の出る余地を摘んだ。

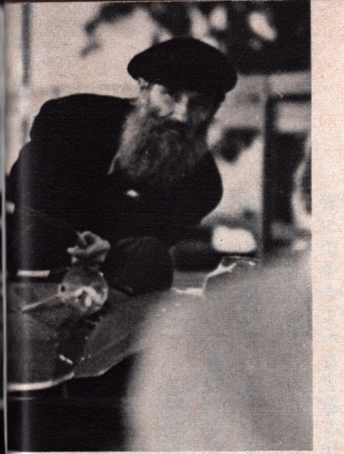
年金生活者の調査やアンケートの結果によると、ひとり暮らしの老人の多くは老人ホームよりも、自分の住居にいたいと思っている。そもそも老人ホームは主に特別な医療を必要とする病人を収容することになっているからだ。そのほか、大多数の人々は老人



公園や競技場など、至るところで見かける年金生活者の〃健康グループ〃









レニングラード市ソビエト執行委員会に付属して設けられているボランティアの商業委員会。委員のほとんどは年金生活者。

老いも若きも、こういう遊びはきらいではない。

ドミトリー・マクシメンコ（左）も、年は取っても積極的に生活すべきだと考えている一人。若いころから海が好きだったので、72歳の今もヨット・レースに出場している。

が一個所に集まって暮らすことに反対している。これは当然だ。老人は若い人々と一緒に生活したいし、若い人々にとってもその方が有益だ。一人暮らしの老人には普通のアパートのいくつかの階が適切である。こうしたことを考慮に入れた案が最適のものとされている。

だが何にでも例外はある。レニングラードには19世紀に有名なロシアの女優マリア・サービナが設立した〃引退舞台人ホーム〃があるが、ここはその例外の一つである。現在美しい公園には古い建物とならんで、樹齢一〇〇年のボダイ樹の間に10棟の寝室用建物、食堂、診察室、図書館がある。

この〃ホーム〃の維持費は全ロシア演劇協会（化粧品工場やその他の財源を持っている）が負担。入居者は元俳優、音楽家、プロンプター（黒子）、衣装方などで、それぞれテレビ付きの個室に入っている。食事や薬は無料。また特別の洋裁店で好みの服を注文できる。しかも〃好みに合った〃という概念は〃懐具合に合った〃という概念と衝突しない。協会が支出を補償するからだ。

しかしこのホームの一番肝心なものは、演劇にたいする情熱と交流のムードである。だからここを訪れる芸術家はあとをたたない。たとえば有名な米国の画家ロックウエル・ケント、著名なイタリアの俳優、劇作家のエドアルド・ド・フィリッポがここを訪問した。

老舞台人はそれぞれ力に応じて、市のアマチュア演劇サークルを指導したり、経験を若い人たちに伝えたり、回想録を書いたりしている。

特典はふえる

老人は特別な配慮と注意を必要とする。ソ連保健省の最近の省令によると、老人病学と老人学分野の医師と中級医療要員が特別に養成される予定である。しかし老人を治療するのは医学だけではない。老人には日常の暮らしをらくにし、余暇を充実させることが必要だ。ほんのありふれたこと、たとえば商店、薬局、クリーニング店に行くことなどが、とくに孤独の老人にはなかなか大儀な場合がある。

一九七六年11月に年金生活者へのサービス改善にかんするレニングラード市執行委員会の特別な決定が採択された。

現在レニングラードの多くの商店のショーウインドーで「年金生活者後援の店」と書いた掲示が見うけられる。ここでは老人のために商品の無料配達などが行われている。年金生活者の年金も自宅へ直送されている。

市文化局はとくに老人の休息の問題を検討している。耳や目の衰えた人のための映画館もあり、劇場にはイヤホーンの付いたイスが備えてある。多くの住宅管理部に付属してスポーツ〃健康グループ〃が開設されている。年金生活者はレニングラードの文化会館と文化の家のさまざまなサークルでたのしくサークル活動をやっている。

しかし、もちろん問題は多い。

若者に職業指導が必要なのと同じく、老齢期にも新しい種類の活動への切り替えが必要だ、とレニングラードの学者は考えている。そのための相談所の設置は、多くの年金生活者、とくに男の年金生活者の先行きの生活を容易にする。

＊　＊　＊

新ソ連憲法の条文の一つに「市民に長期の積極的生活を保障する」必要が明記されている。それは人間が単に生きながらえるためでなく、最後の日まで十分価値のある、幸福な社会の一員であるために必要なのである。

☆　☆　☆

今日のソ連邦
一九七八年7月15日号
編集・発行　ソ連大使館広報部（東京都品川区東五反田3－9－13、郵便番号141、電話03・447・3536）
印刷　大日本印刷株式会社



日本で好評のソ連製人形　（本文10ページ参照）